



(ハ) 神道と時宜。

神道とは、我々の心が外部に發して行爲となる際に、これを適宜に調節するの道とでも言ふべきものである。彼曰く、

「萬事神慮に任せて、自己の爲にいたさざるべきが神道の旨なり」

とのべて居る。「自己の爲にいたさざる」といふのは、「他人や社會の爲にする」といふ意ではなくて、それは「自己の言行を慎む」意である。所欲所思をつゝしんで、みだりにこれを言行にあらはさぬことである。彼は又

「神道の旨とするは慎なり。慎とは所思所欲をおろそかに出さず、よく時宜を顧るをいふ。」

ともので居る。これを彼は又隱身こもりみもいつて居る。而してこれを慎むには、畏と愛を以てするのである。彼曰く、「さてその時宜を顧るべきやうを如何にといふに、畏愛の二つを以て校へ正すなり。畏とは身に禍の出づべきことを、かねて恐るゝなり。愛とは身に福の來るべきことを楽しむなり。人凡そ生れ得たる性、畏を以て慎まるゝもあり。中には畏を以て抑ふれば、いよく勵みて、所欲勢強くなるもあり。さる人は愛を以てする時は、覺えず慎まるゝものなり。」

即ち畏愛の二つを以て言行をつゝしむるのである。彼は所思所欲を言行に現はすのが禍福の別るゝ所であると考へたのである。従つて、福を求め禍をのがれるが爲には、なるべく所思所欲をあらはさず、欲望なくすませば良いのである。しかし人間の性として無慾無爲にとままることは到底不可能事であるから、そこに慎の必要が生じて來るのである。然らばかく畏愛の二つをもつて慎むといふ掟の根據を彼は何に求めてゐるかといへば、それは神であり神慮にあるのである。従つて、彼が時宜と稱して居るものは、神慮のあらはれであり、神の旨に従ふ所のものなのである。

時宜は又時とも中ともいつて居る。その意は概言すれば、「人をして其の言行を慎み、禍をさけ福を得しめる爲に、よりて守るべき掟」とでもいふべきものである。これは神慮に基づいたものであつて、人間幸福の源となるものである。しかもこの掟たるや、嚴格な道徳律といふやうなものではなくて、幾分人性の所欲に同情味を持ち、それを害のない程度に適宜に發散せしむるといふ寛大な慈悲の性質をそなへたものである。これが我國の神の御旨である。あまりに嚴正なるも、放縱なるも、共に神慮に叶はぬものであるとした處は、誠に興味ある「神の解釋」ではあるまいか。

(四) 御杖の歌道説。

(1) 歌道の本義。所欲を時宜によつて全くして、去禍招福の結果に導くものが彼の神道であることは、前述の通りであるが、しかし人間には神道の慎みだけでは抑制し切れぬ欲望がある。即ち一向心ひとまごころがこれである。所欲も、まだ偏心の時には、畏と愛とによつてこれを抑制し得るが、一向心になると、到底これでは如何とも致し難い。こゝに於て歌道の妙用が起つて來るのである。「歌道は一向心を慰めて時宜を全くする教」である。即ちどうしても言行

にあらはさずしては止まれぬ欲情の起つた時、それを言語行動に直接に出さないで、其の堪え難い欲情を和歌によつて言ひあらはすのである。何處かに出口を見つけて發散させてしまへば、其の欲情は止むものであるから、和歌によつて思を晴らして、一向心を慰めるのである。

しかしこゝに一つの疑問が生ずる。それは和歌も言語である。同じ言語でありながら、所謂言行の言に於ては禍となり、歌に於ては禍とならぬといふのは如何なる理由によるものであるかといふ疑である。

(ロ) 言語と和歌。これに關して、御杖は和歌と言語は根本的に性質を異にしたものであるといふ考である。即ち言語は彼我の情を通はすことを目的としたもので、直接の結束を豫想するものである。所謂直言であつて、彼のいふ爲にあたるものである。彼はこれを言學とよんでゐる。かく言語にあらはすことは、爲となるために、元來慎みを以て旨とする所の神道の主旨と違つたもので、發しては禍をうくるものである。古來「神ながら言學せぬ國」といつて、直言を戒めて居るのはこれによるものである。これに反して詠歌はたと自己の中にある鬱情を晴らすことを目的としてゐる。従つて直接の結果を相手に豫想するものでないから、爲とはならずして、良く時宜を全うすることか出来るといふのである。彼が

「言語は獨言にいふこともあれど、獨言は言語の専門にあらずして、彼我の情を通はすを要す。詠歌は神に奉り人に送ることもあれど、それは歌の専門にあらずして、我が鬱情を托するを要す。この故に言語は時やぶれ、詠歌は時全し」

とのべて居るのはこの意である。この立場からして、和歌に重んずべき所は、其の直言にならざる所である。彼は古

昔の歌を検して、其の直言ならぬ處を倒語といふ所に求めた。そしてこの倒語を以て和歌の本義としたのである。倒語とは、所欲を直接に言ひあらはさずして、間接にかくして言ふのである。神武紀の「以_レ諷詠倒語掃_レ蕩妖氣。倒語之用、始起乎茲」の語は、彼がこの説の根據とした處である。

かく言語と詠歌の相違を、直言と倒語とによつて區別した彼は、更に進んで、第二の區別を無形有形といふ點で區別して居るのである。こゝに御杖が形といつて居るのは、現代的な表現をかりていへば、藝術的形象ともいふべきものである。即ち文字の數、句の數、一篇の首尾などを總稱して、形とのべて居るのである。而して言語は無形であるから、其の生命は短く、歌は有形である故に、其の生命が長久であるとのべて、生命の差異にまで論及し、こゝに言靈説を呼び來るのである。例をとつて見れば、

ものゝふの八うち川のあじろ木にいさよふ波のゆくへしらずも。

といふ歌と、これをたゞの言語で「宇治の網代木にいさよふ浪を見て、人生皆かくの如く、遂には行方知らずになるであらう、悲しいことである」と打ち歎いて見るのとを比べて見るに、單に言語に出してなげいて見るだけでは、鬱情は或度まで慰められるかも知れぬが、その言語には形がないから、忽ちに其の感は去つてしまひ、其の生命は極めて短い。これを歌として形あるものに盛る時は、我が身内に爲をうながす鬱情を殺し、言の中にその情を生かして置く故に、その生命が永久であるが如きものであるとのべ、

「すべて形なきものには靈とゞまることなし。形あるものには、靈その中にとゞまりていつまでも死せず。」と論じて居るのである。

(ハ) 眞と私と公と神と。かく一向心を時宜を以て慰め制して詠歌に發することによつて、彼はこゝに眞が生ずると考へた。非唯抄に、「歌道は人の誠を立てるためのものである」とのべて居る誠はこの意である。この眞の心が眞心であつて、彼は、「外に時宜あり、内に欲情ありて、已むことを得ず思ひなれる心」と説いて居り、眞が言にあらはれたものが眞言であつて「眞言とは、眞心となりかねたる時、やむを得ずうたひすつる歌をいふ」とのべて居る。

この眞と私と公との相互關係は如何といふに、彼は

「もし時宜を犯して振舞はゞ、理はありとも、必ず眞は得がたき事なり。時宜を破らじが爲に、思ふ心、よむ歌、ふるまふ爲は、私欲のすぢなれど、眞物なり。」

と述べて、眞は、時宜によつて私欲を制する所がら生ずる故に、その中に、私欲の性質の系統のものがあることをみとめて居るが

「然らば眞は私にそへる名かといふに、所欲のまゝの心、言葉、爲にはかはりて、其の用公なり。」

といつて、眞と私との相異點は、其の用が公であるといふ點にあることをのべ、次に

「さては又公にそへる名かといふに、公なるは、皆知のなす所にて、理の上なり。眞は公理にもよらず、私欲にも拘らず、たゞ時宜を重んずるよりの事なり。」

と説いて、公と眞との相違は、公は知識により道理によつてする言行であるが、眞は、知にも理にもよらぬ所(たゞ時宜のためのもの)にその差異があることをのべ、更に進んで、神道の方では、眞を愛して、私、公、共に時宜を破

ることある故に貴ばぬことを説いてゐる。即ち、

「されば、私心、私言、私爲は、論の外なり。公心、公言、公爲は、理ありても時に違ふ事あるものなれば、神是を尊びたまはず。眞心、眞言、眞爲は、理なき時も、時宜を思ふあはれさに、神必ずこれを貴び給ふなり。」

といつて居るのである。

(二) 言靈説。眞言を神が貴ぶといふ思想及び、有形の歌に生命が宿るといふ思想は、彼の言靈説の深い根底となつて居るものであると共に、又彼の言靈説は彼の歌道に一つの生彩をあたへるものなのである。次にこれを見よう。

言靈とは、言語のはたらきの至妙なことを感じて、これに名づけたものであつて、徳川時代の語學者にはこれを主張したものはづいぶんと多い。言語の活用の靈妙にして、且つこれに一定の理法(文法などは、その理を説いたものである)あることを發見して、これを一つ靈のはたらきと思惟したものである。これが普通に語學上いふ所の言靈であるが、御杖の言靈は、それ以上に出で、和歌の言靈を説いて居るのである。

御杖の言靈は、彼が和歌に於て論じて居る倒語、眞、時宜などの思想を根底として居る。これ等の説に於て彼が、「直言せずして思をかかす」といひ、「時宜を以て所欲を制して、そこに眞あらはる」といふ時に、和歌には、直言以上の靈妙なはたらきの含まれてゐることを彼が意味して居ることは明かである。この妙用を彼は言靈と呼ぶのである。然らばかゝる言靈の本體は如何なるものであらうか。彼曰く、

「靈となるは如何なるものぞ。……言の中に、その時已むことを得ざると、一向心の已むことを得ざる様、自らとゞまりて靈とはなるにて候。」

「所欲はのどめ難く、時宜は破りがたく、せめて歌によみて、ひたぶる心を慰めたる心これなり。さる心の言にとどまれるなれば、妙用あらむ疑なきことなり。」

即ち一向心の已むことを得ざる状態にある心的苦悶、その苦悶をいだいてこれを辛うじて歌の世界に晴らしやつた時の作者の心的内容、これ等が、有形の言語であり、時宜より生じたる眞言である詠歌の中に、生きてとどまるもの、それが言靈の本體であるといふのである。故に彼は

「されば所欲を達せんが爲によむ歌は同日の論にあらず。其の靈の言に有ると無きとは、歌よむ志の、時宜を全うせんがためにすると、所欲の爲にするとのけぢめによるものなり。」とのべて居る。

彼は更に進んで、言靈の妙用が和歌の感應を生ずることに論及して居る。即ち和歌が天地をうごかし人倫を和らげ鬼神を感じしめるさういふ感通感應は、この言靈あるによるといふのである。感通とは、言語の道絶えたる所を通ずる妙用である。吾人が古歌をよんで作者の靈生命を感じるのは、和歌の中に、この言靈が生きて宿つて居るがためである。言靈は前述の如く、和歌を詠する際の作者の全心靈が有形の歌に宿つて居るものである。而して、この言靈は、時宜によつて所欲をのどめんとする眞言の中にのみ宿るものであり、その眞言は神の尊ぶ所のものであるから、言靈のはたらきは又一面に神の現はれたものであるといひ得る。歌が天地神明鬼神を感じしむるは、この神のあらはれともいふべき言靈がはたらくによるものである。この境地にまで到つて、和歌は其の究極の位に達するものである。彼の歌道の歸趣は言靈の妙用によつて、かゝる靈妙な感應を成就させる處にあるのである。

尙彼は感應は作者としては求むべからざるもので自然に到るを待たねばならぬものであるといふ注意をのべて居る。若し我々が感通を得ようと思つた時には、時宜を尙ぶ精神がうすくなり。所欲を達しようとする志が主となつて、歌は私爲に墮してしまふ。吾々が願ふべきは言靈である。ひとへに爲に出ないやうにと時宜を省るならば、言靈は自づと宿つて感通のために道を開いてくれるものであると説いて居るのである。

(本) 言靈説と古歌の解釋。御杖はこの言靈説に、父成章の説いた言語の表・裏・境の説をとり入れて、古歌の解釋法を説いて居る。即ち古歌などには、表面文字通りの意と、外に寓したる意があるとし、その裏面の意については、彼獨得の所欲と時宜の説明を以て、作者の心理にわけ入つた心理的説明を試み、かく表裏二面から見ることによつて古歌の意を完全に解し得るものとして居る。この實例は、彼の百人一首燈、萬葉燈、古事記燈等、すべて彼の解釋はこの方法を以てせられて居るので、我々は彼の解釋の仕方を味はふことが出来る。彼のこの裏面の寓意を求めて説く解方は、時宜としては索強附會の説に陥ることもあるが、その肯綮を得たものは、誠に面白い所があるのである。一例を萬葉燈からあげると、

秋の野のみ草かりふき宿れりし宇治の都の假庵し思ほゆ。(額田王の歌)

について、先づ言として語釋をあげ、次に靈として、

「この御歌、うはべは、たゞその行宮の、み草刈ふき事をぎたりし様の、所から中々様かはりて、をかしかりしかば、忘れがたき由に詠みふせ給へる也。やごとなき御身には、かくことそぎたることは、御心につく習とはいへども、大旨にいへるが如く、たゞこの行宮の忘れがたきまでの事ならば、御歌によみ出させ給ふべきばかりの御

歌ともおぼえぬ事なり。此女王、もと天智天皇・天武天皇の御思ひ人なれば、もし此の行幸の時、この二帝の中、御從駕せさせ給ひ、共に御宿りまして、此夜逢ひ初めましゝ事を思ひ給へるにや。その折の忘れぬ由をよみて、人は忘るゝやを試み給ひしか、又はつれなかりしを恨み給へるなるべし。行幸の御供にて、さるたはれごとあるまじき事なれば、憚かりて倒語し給ひしにこそ。又は餘人にや。さだかに知られぬは、倒語の所以ぞかし。」

(五) 歌道修行説

以上を以て大體御杖の歌道説の要點を説き得たと思ふので、次に實際の詠作に如何なる修行を彼が要求して居るかを見よう。

先づ彼は歌人的修養法を、修行と稽古との二つに別つて居る。修行とは大體歌人の精神的修養に關した方面であつて時宜によつて所欲を制し、慎を全うするといふ、いはゞ神道的な修行をふくむものであつて、髓には五典の名目をあげて修行法を説いて居る。五典とは、歌をよむに委しく心得べきことであつて、ひとへ心、時宜、一向心、詠歌、得眞の五つをさしたものである。而してこの五典は詠歌の大規模であると説いてゐる。つまり彼の歌道の精神を體得することである。次に稽古といふのは、彼が「詞の道」ともよんでゐるもので、非唯抄によれば、前に成章の際にのべた、言語の表を正し、真・境を推すことである。換言すれば、言語の表・裏・境の活用を知り分けて、これを實地に應用することを學ぶことである。こゝに表現方法の修養が出来るわけである。この詳細なることは、非唯抄の中に、廿七種の方法を説いて、景象・心象・辭象の三つを明かにすることを細説し、又「和歌入紐」を著しり、脚結を骨子として、填字法によつて歌の格を教へてゐるのである。

(六) 其の他の歌學上の意見について。

以上のべた他に見るべき述作は、寛政六年に弟成孚のために著した多南辨乃異則である。これは、六帖の「いづく」と踏みまどはせる玉づさにこゝはたなべの磯ならなくに」の歌によつて名づけたものであつて、廿一代集等について委しい批評を試み、自家の標準となすべき集を説き示したものである。父成章の六運説は、概説的であるが、此の書は、皆一々具體的な説明を加へて、世々の歌の變遷沿革をのべたもので、いはゞ六運説の細註ともいふべきものである。その最後に、

一志は三代集にすゑ、本づくに萬葉を以てし、助くるに後拾遺より後の世々の集を以てし、補ふに諸家の集等を以てし、努めて五つの級を明めて、籠の塵いでたつ足もとと、低き所より詠み上るべし」とのべて居る。

御杖の歌論の批評

御杖の説に於て特に私の興味を惹く所は、彼の所論が非常に現代の文學論的な色彩に富んで居ることである。殊にフロイドの夢の説、厨川白村氏の苦悶の象徴的などにまことによく似通つて居る點である。

フロイドは夢の成立を説いて、次のやうにいつてゐる。即ち、吾人が意識して居る際には、道徳的良心や社會的制裁などのために、非常に希望して居ながらも達成することの出来なかつた様々の慾情(主として彼は性慾をさしてゐるが)が、吾人の潜在意識の中に沈んで、心的傷害として澱んで居る。しかしこれは決して死滅したものではなく

て、機會あるならば外部に再び發現しようとしてゐるものである。所が、人間は夢の間は、良心などの制御をはなれて、極めて自由なる觀念の結合をなすものであるから、この際に、潜在意識の中の心的傷害は、再び意識界に復歸して活躍する。これが夢である、と説くのである。フロイドは尙この理を應用して、ヒステリー患者などの治療に用ひ、その患者をして、自己の達せられずして心の傷手となつてゐる事項を、醫師に打あけさせると、その心的傷害はこゝに、逸出口を見つけて發散し、その患者は治るとのべてゐる。

厨川氏の説はこのフロイド説にヒントを得たもので、心的傷害を説く所は同じいが、その發現の場所を文學に求めたものである。文學の創作こそ絶対自由の境地であつて、作者はその作中人物に如何なる事をも（例へば殺人、姦通、非倫の戀等）なさしめることが出来る。作者は此の世に於ける心内及外界の壓迫によつて、達げられなかつた感情（それは心的傷害となつて潜在界にある）を、絶対自由の境地に於て遂げ、以て自己のやるせない鬱憤を發散せしめるものであると説いてゐる。この立場から氏は文學を以て人間苦悶の象徴であると論じた。

御杖が、のどめがたき一向心を如何ともしがたき時に、これを詠歌の世界に發して、そこに於て自由なる發現をなさしめ、以て人間としての苦悶を救ふものであるとしたのは、一種の苦悶象徴を以て和歌を解したものだと思はれるのである。その心理解剖などの鋭さは、現代人と比して遜色はない。たゞ彼がそれを神道説と合して説いて居るに比して、現代の人々がこれを純心理學的に説いてゐるのががふ點である。學術上の術語もなく、又科學的な頭腦も發達して居なかつた徳川期に、御杖の如き人物の出たのは、誠に面白いことと思ふのである。

御杖の説が、伯父皆川淇園や父成章の精細な學風をうけたものであり、言靈説が、淇園が聲音の理を易理に求めた

説に基づいたものであることは、佐々木博士の夙に唱へられた所であるが、かくまで精細緻密なる理論的組織的歌論を構成し得た點は、やはり彼の天稟と不屈の研究的精神に歸せねばなるまいと思ふ。

御杖の和歌。彼の理論的方面によつてうかゞはるゝ如く、彼は歌人ではなくて、學者である。創作家よりも批評家に屬すべき人である。従つて、彼の作歌は、宣長のそれに等しく、生彩に乏しいもので、宣長や父成章などよりも一段と低位にあるものと評し得よう。歌集を御杖大家集といふ。作例二三をあげると

昨日といひ今日と待たれてとぶ鳥のあすかの里は花やさくらん（花）

音羽山こえて語らふほととぎす關のこなたの初音なりけり（郭公）

夏衣たちよる袖の夕風に池の心も秋やしるらん（夏）

くだけでも月こそ宿れ夕ぐれの野分ふきしく萩の上の露（秋）

都鳥ゆきをつばさに浮きてよる和田のみさきの冬のあけほの（冬）

第十一章 幕末歌人

以上述べ來つた如き様々の歌風の樹立、様々の歌論の提唱は、江戸時代の文運の盛運に乗じて、歌界に於ける異常の活氣を呈し來つたのであるが、幕末に到ると、こゝに一の新しい生命が歌界に展開されて來た。それは何か、「生活に根ざしたる個性味豊かな作品」の出現である。

かゝる作品を詠出した歌人として、特に傑出して居るのは、橋曙寛、大隈言道、僧良寛、平賀元義、太田垣蓮月等

である。

これ等の作者によつて、和歌は、花鳥風月の趣味の世界から、實生活の體驗を語る世界へ、生活歌の世界へと轉向を示した。古今派、萬葉派、たゞ言派、桂園派といった流派的歌人の他に、流派から超越して、自己の思ふまゝの格調措辭を自由に使用する个性的歌人ともいふべきこれ等の人々の出現によつて、江戸期の和歌は、幕末に到つてはじめて誇るに足る歌を生み出したのである。

しかし、これ等の人々の新しい和歌は、當時に於ては、あまりにも存在を認められなかつた。何時の時代でもさうであるが、新しい文藝運動の萌芽時代には、強い傳統的な力が因襲的に支配して居て、新しき生命は顧みられない。たまたまこれに氣づくものがあつても、當時の歌壇の人々は、これ等新人の作を、或は格調不整といひ、或は卑俗であるとして斥けて居たのである。良寛、言道、曙寛、元義何れも明治大正の時代に到つて、批評家によつてその價値を世にとはれたのである。若し、これ等の歌人の眞價が、も少し早く歌界に認識せられて居たならば、明治の短歌も廿年位は早く革新の途をたどつて居たであらうと言はれてゐるのである。以下これ等の人々を順次述べてゆかう。

良寛。僧良寛は、寶曆八年越後出雲崎町に生れた。生家は橋屋と稱して、代々出雲崎の名族であつた。俗姓は山本氏彼の父は伊織といひ、後、以南と號した人で、國典に通じ、和歌、俳諧をも良くした。歌に於ては京都の藤原光枝と交り、俳諧に於ては尾張の久村曉臺と親交があつた。良寛は以南の長子であつたので、代々神官と名主とを兼ねた家柄として、幼くして、狭川子陽の塾に入つて和漢の學を修めしめられた。彼の出家は十八歳の若年である。其の動機については様々に語られて居るが、彼の性格が、俗を厭つたものと見るが至當であらう。二十二歳の春、備

中玉島圓通寺の國仙和尚が、越路に勸化に廻つて來た時、良寛は其の徳を慕つて、弟子となり、師に従つて備中に下り、只管に禪道に勵んだのである。彼が天真流露の明朗な性格と、大自然に融合する無碍自由の態度とは、この禪によつて多く培はれたものと思はれる。其後、母の死によつて一度故郷を訪れたが、又もや飄々たる行脚の旅に上り、或は筑紫に、或は高野山に遊んだが、三十九歳の時、父以南の死に會し、四十二三歳の頃再び故郷の越後に歸住した。これより歿年に到る間は、或は國上山下の五合庵に、或は其の山麓の乙子神社側の小庵に住して、圓熟した心境を以て歌や漢詩を友とし、小童を友として、明朗なる生活を送り得たのであつた。かくて、天保二年（二四九一）正月六日、島崎村能登屋元右衛門の別舎に於て、安らかな往生を遂げた。享年七十五歳。

良寛の眞價は、彼の生存時代には、あまりに知る人がなかつた。たゞ彼の詩友たる儒者龜田鵬齋は、「北越の良寛は天下の偉人なり」と稱し、鈴木文豪は「良寛に傳ふべきもの三、詩は三隱の妙致あり、書は懷素の遺風あり、歌は萬葉の餘響あり」と稱したなど、具眼の士は、これを認めて居たが、今日良寛をして尤も敬慕せしめるあの人格などの美點は、當時は放逸の奇僧として世に知られたに過ぎなかつたらしいのである。

良寛の和歌は強ひて系統を求むれば、萬葉調の歌人と稱すべきであらう。しかし、彼の歌の特色は、それが萬葉調に於てすぐれて居るといふのでなくして、其の人格がさながらに、創作の上に反映して居る點が、我々から見ても感ぜられる處である。彼は偉大なる童心の持主である。それは單なる童心ではなくて、修業鍛練の結果到得した無碍なる明朗性を持つたものである。その修業としては、禪の悟道、又越後地方に特著しい念佛宗（眞宗）の安心などであると思はれるが、彼には禪にして禪臭なく、念佛にして、念佛につきまといふ嫌な臭味もない、兩者の美點を混融し

て一身に俱備してゐるやうな清澄さがある。和歌に於ては、よほどよく萬葉集をよんだものと見えて、古語など自在に驅使して居るが、所謂萬葉ばりの歌とは異つて、その精神の純真な點が特に目立つ。強ひて萬葉を模倣しようとしたものでなくて、自然に其の調子が出て來たものといふべきであらう。従つて、萬葉以外の三代集以下の歌風をも多くその中に持つて居る。これはあらゆるものに拘泥しない彼の性格があらはれたものであつて、時には古歌の三句四句をそのまま自歌に使用してゐるものもある。一定の主義主張を以て歌を詠する歌人と異つて、氣のむくまゝに心の欲するまゝに、如何様にも詠出してゆく態度は、羨しいまでに自由である。次に彼の作品をあげよう。

彼の長歌は萬葉調である。

足曳の國上くぐみの山の、山陰の乙子の宮に、宮づかひ朝な夕なに、岩とこの苔むす道を、踏みならしい行き歸らひ、十寸鏡仰ぎて見れば、み林は神さび立てり、おち瀧つ水音さやけし、そこをしもあやにと乏して、鼻月には山郭公、をちかへり來なきとよもし、長月の時雨の時は、紅葉ばをひきて手折りて、新玉のあまた月日を、こゝに過しつ

露霜の秋の紅葉と時鳥いつの世にかは我忘れめや。

これは晩年に國上山を離れる時の作であるが、よくその時の感をよみ得て居る。

鉢の子は愛はしきものかも、幾年か吾が持てりしを、今日道に置きてし來れば、立つらくのたづきも知らず、居ららくのすべをも知らに、刈菰のおもひ亂れて、夕づゝのかゆきかく往き とめ行けば此處にありとて、吾が許に人は持て來ぬ、嬉しくも持て來るものか、その鉢の子を。

春の野に董つみつゝ鉢の子を忘れてぞ來しあはれ鉢の子。

これは、彼が托鉢の鉢を忘れて居たのを、人が持つて來てくれた喜びをよんだ作であるが、よく萬葉の精神に入つてしかも萬葉の形骸に囚はれて居ない所、朗々唱すべきもので、次の手毬歌と共に、彼の生活を偲おもはしめる佳作であらう。

冬ごもり春さり來れば、飯乞ふと草の庵を、立出でゝ里にい往けば、玉鉢の道のちまたに、子ども等が今は春べと手まりつくひふみよいむな、汝がつけばあは歌ひ、あがつけば汝は歌ひ、つきてうたひて、霞立つ長き春日を、くらしつるかも。

霞立つ長き春日を子供らと手毬つきつゝ今日もくらしつ。

短歌の中より、彼の生活のほがらかさ、童心の美しさを見るべきものを出せば、

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば。

草の庵に足さしのべて小山田の山田の蛙きくがたのしさ。

いざさらば蓮の上に打ちのらむよしや蛙と人はいふとも。

飯乞ふとわが來しかども春の野にすみれつみつゝ時を經にけり。

風は清すし月はさやけしいざ共に踊りあかさむ老のなごりに。

歌やよまむ手毬やかむ野にや出でむ心一つを定めかねつゝ。

子どもらと手たづさはりて春の野に若菜をつめば楽しくもあるかな。

うま酒にさかなもて來よいつもく草の庵に宿は貸さまし。

露おきぬ山ちは寒し立ち酒ををして歸らむけだしいかゞあらむ。
月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに。

吾がいほに人の来るこそうるさけれとはいふものゝおまへではなし。

これ等の歌は、作れる歌といふよりも、自然に流露した感情の結晶ともいふべく、萬葉古今新古今などといふ意識から超越した自由さを見せてゐる。

山かけの垣根に咲ける卯の花は雪かとのみぞあやまたれける

今日別れ明日はあふみと思へども計りがたきは命なりけり

これなど圈點を付したる所は古歌の詞そのまゝであり、

みどりなる一つ若葉と春は見し秋はいろ／＼にもみぢけるかも

などは古今集の歌と殆どそつくりであるが、我々はこゝに剽竊の不快を感じないで、むしろ明けつばなしの朗かさをさへ感じ得るのである。

彼には又旋頭歌の作も多い。

秋の野の千草おしなみ行くは誰が子ぞ、白露に赤裳のすその濡れまくもをし。

墨染の我が衣手の廣くありせば、世の中の貧しき人をおほはましもの。

岩室の田中に立てる一つ松の木、今朝見れば時雨の雨に濡れつゝ立てり。

さす竹の君と語りし秋の夕は、あら玉の年はふれども忘れなくに。

吾宿の葉びろ芭蕉を身に着ませ君、秋風に破れば惜しけむ葉廣の芭蕉。

彼の歌風を概観すると、客観的叙景の作は割合に少く、多くは彼のゆたかな感情を宿した自然がうたはれて居る。そこに吾々が彼の生活をうかゞふたよりがあり、彼の心情にわけ入る途が開かれてゐる。又、長歌と旋頭歌には萬葉の調が基調となつて居るが、短歌に於ては、萬葉の純朴な精神を、古今の高雅な調べの中に盛つたと見るべき作が比較的の多いことを感じる。彼は天成の歌人といふべきであらう。

橘曙覽。橘曙覽は、井手曙覽とも云ふ。何れも其の先祖が橘諸兄であるといふことに因る。彼は文化九年(二四七二)五月に越前國福井石場町に於て生れた。父は五郎右衛門といつて、同地方の名家であり資産家でもあつて、紙商を業とした。曙覽とは後につけた號であつて、幼名は五三郎、後に尙事といふ。母は二歳の時歿し、父亦十五歳の時に逝つた。さうした境遇に動かされたものか、佛門に入らんと志して、日蓮宗妙泰寺の明導といふ僧について佛學を學んだのであつたが、明導が詩歌に巧であつた所から、その感化をうけるやうになつた。かくて彼は學問に志を向け、ひそかに京都に赴いて、山陽の門人兒玉士敬の塾に入つたが、數ヶ月で親戚のために呼戻されて、妻を娶らされたのであつた。しかし彼の志はこれによつて變ずべくもなく、天保十年二十八歳の時江戸に出でたが、數ヶ月にして又歸國した。此の頃彼は國學に興味を持ち、契沖、眞淵、宣長等の學風を慕つたが、殊に宣長を欣慕すること深かつた。しかし宣長は彼の生れる十一年前に歿して居たので、其の門弟の田中大秀が飛騨國にあつて講筵を開いて居たので、彼は赴いて古學を學んだのであつた。時に彼三十三歳。かくて彼の志は益々古學に向たので、遂に三十五歳の時、家業と資産全部を異母弟宣に譲り、自ら妻子を連れて、城南足羽山に隱栖して貧しい生活に入つた

のである。これ彼の生涯の大きい轉機であつた。

足羽山の栖は居ること三年、後に城西三橋に居を移し藁の屋と號した。安政元年に此の草庵も火災に逢ひ、彼亦大患にかゝつたが、辛じて助かり、草庵も門人によつて再建された。彼が橋の縁により曙覽(赤實)と號したのもこの年である。

曙覽は熱烈な勤王家である。國學は彼の生命である。従つて、彼は其の極貧の生活の中に處して泰然たり得た。又彼は性頗る恬淡、且つ和歌に無限の興味を持つて居た。その爲に貧困の生活は彼を不平家たらしめずして、眞に天成の歌人として大成せしめたのである。藩主の松平慶永も曙覽を尊敬し、侍臣をして其の講筵に連らしめ、元治二年二月には狩に託して自ら其の草庵を訪れて居る。且つ慶永の重臣中根雪江は曙覽と親交が厚かつた。慶永は曙覽を城中に召して古典の進講を乞はんとしたが、曙覽堅く辭してこれに應ぜず「花めきてしばし見ゆるもすゞなはたまたまの田廬に咲けばなりけり」の一首を奉つた。

これより先、文久元年彼五十歳の時、九月より子の今滋を伴つて、伊勢に参拜し、宜長の墓に詣で、大阪に出で、中島廣足を訪ひ、京に出で、大田垣蓮月を訪れた。この旅は「柳菴」といふ彼の旅行日記に詳しい。特に蓮月尼との交遊は興味深きものがある。

かくて慶應三年、徳川幕府大政を奉還する由を聞いて、非常なる歡喜に打たれたが、その翌、明治元年八月二十八日に五十七歳を以て歿した。勤王家歌人であつた彼は、わづかに王政復古の曙光を覽て逝いたのである。正岡子規が、「彼をして二重橋下に鳳輦を拜するを得せしめざりしは、返すくも遺憾の事なり」と歎じたのは、誠に同

感である。

曙覽の歌論。曙覽は論家としては、國學の方面に向つた人で、歌論としてはまとまつたものを残して居ない。圍爐裡譚の中の芦庵翁の歌を論じた條と、彼の撰に成る花廬沙久等はなゐさく等によつて、その大凡の理想を伺ひ得るのみである。後者は萬葉より以後の勅撰集や神樂催馬樂古今六帖等の中から、歌の模範とすべき作三百八十一首をぬき出したものであるが、大部分は萬葉古今の和歌である。且つ同書今滋の序によれば、

「先師常に言ひ給ひけらく、歌を學ばむには、萬葉集中の新體なる、古今集中の古體なる歌に着眼し、これを模範としなば、はじめてよき歌をよみ得べしと……」

とある。以て曙覽の歌の理想を知り得よう。芦庵翁の歌の評に於ては、芦庵の

「古へは大根はじかみ菰茄子ひるほし瓜も歌にこそよめ」

といつたことに同感して、古代の和歌の取材の自由さを説き、後世に到つて、題材が古き集にあるものゝ範圍に限られ、殊に平安朝以來、歌は「詞艶に、姿なつかしく、たけをあらせ、幽玄によむべし」と教へたため、一體に柔弱な女性的の歌風と變じ、その果は、歌語に於ても

「諺にいふ正月ことばといふ物のやうに、いつも定りて、早春には、朝日のどかに、霞たなびく。歳暮には、よする年浪、春ぞ待たる。花には、雨のめぐみ、家づとに折る。月に、くまなき影、雪に跡つけわぶるなどやうの詞の外には、世に歌詞は無きものゝごとくになり、百人が百人、一昨年も去年も今年も、同じことをのみ言ひならぶる……」

といった淺ましい状態になつてしまつた爲に、和歌は學才ある者のもてあそばぬものとなり、益々墮落して行く運命にある。歌人たるものは大にこゝに發憤して

「歌人とあらむ者、寢きたなくする目をよくさまし、竝に憤を發し、思を凝して、よみ口の鋒先を鋭どにし、其事に従ひ、其の物に因り、彼方此方のきらひなく、幽玄、洒落、麗妍、澹泊、殷富、凄凉、勇壯、溫柔、變化自在の臂を張りて、毛唐人の糟粕嘗むる詩人の陣を突き崩し、我語囀りちらす舌引き抜きくれむと、國風の旗さし建て、古言の鼓うちひゞかせて、後向かじ背見せじと、進まさらめや、勇まさらめや」と、非常な覺悟を以て、和歌革新に精進すべき事を論じて居るのである。

曙覽の歌風。彼の歌風を見るべきものは志濃夫しのぶお 迺舍歌集がある。五卷と補遺一卷より成り大體製作年次に従つて整へられた集で、大體三十五歳足羽山時代より以後の作品を収めて居る。明治十一年に嗣子今滋によつて發行せられたものである。

曙覽の和歌の特色は、其の取材に於て、其の用語に於て、多種多方面に亘り、從來の歌人の未だ曾て詠ぜざりし新境地を開拓し、しかも其の作に些の俗塵もとどめず高雅な氣品を備へて居る點。花鳥風月的な因襲的作品をよまないで彼の實生活をそのまゝに詠み出し、しかもそれが洒脱を極め、光風霽月の如き彼の心境をさながらに詠發して居る點。生活派歌人として隨一の觀ある點。萬葉を範としながらも萬葉の詞句音調に拘はれず、よくその萬葉歌人の作歌態度に分け入つて、眞に萬葉の精神を體現して居る點、この點に於ては、從來の萬葉派歌人の何人よりもすぐれて居ると評し得る。又内に燃ゆる勤王の情熱をその詠にもらし、勤王派歌人としても第一等の作家である點、詠史歌に於

て、又畫贊歌に於ても、立派なる作品を貽せる點。又少數ながら、連作の試みをし、且つこれに成功せる點など。擧げ來れば、正岡子規が實朝以後の第一人者であると激賞したのも、過褒でないとなづかれるのである。彼が、圍爐裡譚の中にのべた、「幽玄、洒落、麗妍、澹泊、殷富、凄凉、勇壯、溫柔……」等の各趣は、又以て彼の歌の實際に具現せられてゐる點が尊い。

先づ彼が國事を思ひ勤王を思ふ作に於ては、

ますらをがみかと思ひの忠實まこと心眼を血に染みて燧たき見ます。

正宗の太刀の刃よりも國のためするとき筆の鋒はらふるひ見ん。

國を思ひ寝られざる夜の霜の色月さす窓に見る劍かな。

國汚す奴あらばと太刀ぬきて仇にもあらぬ壁にもいふ。

天皇は神にしますぞ天皇の勅といはゞかしくみまつれ。

太刀佩くは何のためぞも天皇の勅のさきを畏まむため。

百千歳との曇りのみしつる空きよく晴れゆく時片まけぬ。

あたらしくなる天地を思ひきやわが目昧ままぬうちに見んとは。

等、その一斑をうかゞひ得られる。後の二首は王政復古の機到れるを喜んだ作で、晩年の作である。

天皇の大御使と聞くからに遙に拜む膝折りふせて。

これは北陸へ勅使の下つた時の作である。

次に彼の生活を詠じた作を見よう。その中には彼の人格が躍如としてゐる。

山吹のみの一つだに無き宿は傘も二つは持たぬなりけり（人に傘かして後取りにつかはしたる時）
夕けぶり今日は今日のみたてよおけ明日の薪は明日とりて來ん。

けぶり草それだに煙たてかねてなぐさめわぶる窓のつれなく（煙草買ふ錢なかりし時）

米の泉せきなほ足らずけり歌をよみ文をつくりて賣りありけども。

壁くゞる竹に肩する窓の内みじろぐたびにかれも枝ふる。

膝入るゝばかりもあらぬ草の屋を竹にとられて身をすぼめ居り。

後二首は、土間に筵をしいて生活してゐる家中に、筍が生じ長う伸びたのをそのままにしておいた時の作である。尙彼には獨樂吟五十首がある。以て彼の生活を充分にうかゞふと共に、彼の洒脱な氣品に打たれる感のする作である。その中數首を抜いて見よう。

たのしみは珍らしき書人にかり始め一ひらひろげたる時。

たのしみは百日ひねれど成らぬ歌のふとおもしろく出できぬる時。

たのしみは物をかゝせて善き價惜しみげもなく人のくれし時。

たのしみはあき米櫃に米いでき今一月はよしといふ時。

たのしみは稀れに魚煮て兒等みながうましといひて食ふ時。

たのしみはそゞろ讀みゆく書の中に我とひとしき人をみし時。

たのしみは雪ふる夜さり酒の糟あぶりて食うて火にあたる時。

たのしみは世に解きがたくする書の心をひとりさととり得し時。

たのしみは錢なくなりてわびをるに人の來りて錢くれし時。

たのしみは客人えたる折しもあれ瓢に酒のありあへる時。

たのしみは家内五人五たりが風だにひかでありあへる時。

たのしみは木の芽煮やして大きな饅頭をひとつ頬ばりし時。

たのしみは常に好める焼豆腐うまく煮たてゝ食はせける時。

たのしみは小豆の飯の冷えたるを茶漬てふ物になして食ふ時。

たのしみは好き筆をえて先づ水にひたしねぶりて試みる時。

たのしみは戎夷えいゐよろこぶ世の中に皇國みくに忘れぬ人を見る時。

たのしみは鈴屋すずや大人の後に生れその御論みろんをうる思ふ時。

その酒腕にして氣品に富む點、又用語の自由自在なる點、亦言道に相通じて、彼よりも一段と上位にあることを知る。叙景その代に於て新味を出し、新境地を開き、用語の擴張を試みた作には、

蛭はなまうるさく出でとぶ秋の日和よろこび人豆を打つ（秋田家）

夕顔の花しらくと咲きめぐる賤が伏屋に馬洗ひ居り（酉）

すくくと生ひたつ麥に腹すりて燕とびくる春の山畑（春）

羽ならず蜂あたゝかに見なさるゝ窓をうづめて咲く薔薇かな(薔薇)
 藁ぶきに雞さけぶ賤が門一もと柳ひるしづかなり(門柳)
 村すゞめをどれば我もうかれつゝそよめき立ちてさゝといふなり(竹)
 ますらをとならむ兒の生先は握りつめたる手にもしるかり(正淳が男子生ませけるに)
 着る物の縫目くゞに子をひりてしらみの神代始りにけり(蟲)
 綿入りの縫目に頭さし入れてちゞむ風よわが思ふどち(同)
 ふくろふの糊すりおけと呼ぶ聲に衣ときはなち妹は夜ふかす(口よりいづるまゝに)
 こぼれ絲網に作りて魚とると二郎太郎三郎川に日くらす(同)
 とくくゝと垂り来る酒のなりひさごうれしき音をさする物かな(酒人)
 なりひさご市より取りてくる酒もおのが夜さむは温めぬなり(寒僕)
 ともすれば沈む燈火かきくゞて亭をうむ窓に霞うつ聲(寒燈)
 よそありきしつゝ歸れば寂しげになりて火桶のすわりをるかな(火桶)
 蟻と蟻うなづきあひて何か事ありげに奔る西へ東へ(聚蟻)
 群よびに一つ奔ると見るが中に長々しくもつくる蟻みち(同)
 人に毛を噛みつくされし圓頂ころばかされて塵中に居り(退筆)
 酔くもあらず辛くもあらずぬ味はひを一かどもてる豆のしるかな(豆腐)

淡しかる味にかどもつ豆のしる高きいやしき品にまじはる(同)

いづれも一特色をそなへて居て面白い作である。次に詠史、畫賛の作をあげると、

大御門その方むきて橋の上に頂根つきけむ真心たふと(高山彦九郎)

大瀧の首長とらへて目の前に日本人の所業見せきつ(濱田彌兵衛)

一つある葉かげの苔かき抱き身を野にくたす姫百合の花(祇園百合女)

唇の寒きのみかは秋の風聞けば骨にも徹る一こと(芭蕉)

不二の根も背に負ひつる吾が母の御蔭の下に見てや過ぎけむ(僧元政)

一日生きば一日こゝろを天皇の御ためにつくすわが家の風(正成)

心なき身にもあはれと泣きすがる兒には涙のかゝらざりきや(西行)

ありとある竹に風もつ谷の奥水の響をそへて鳴りくる(萬竹圖)

河隈の巖に根はふ竹と竹なびきぞめぐる水をせばめて(同)

滑らかに露もつ苔路風ありて下蔭くらき竹の奥かな(同)

深見草こち向きがたき癖ひをばあやくもちし花にもあるかな(背面美人圖)

うつくしき黒髪たれに心をばとられて横もふり見ざるらむ(同)

ふりかへる片頬をだにと見たがらせ人をも後むかせざりける(同)

連作の例をあげると、

日の光いたらぬ山の洞のうちに火ともし入りてかね堀り出す
 赤裸あはだの男子むれ居て鏡かがみのまろがり砕く槌つちうちふりて
 さひづるや確たけたてゝきら／＼とひかる塊かたまりつきて粉にする
 笥かきかけとる谷水にうちひたしゆれば白露手にこぼれ来る
 黒けぶり群りたゝせ手もすまに吹き鏝くわかせばなだれ落るかね
 鏝くわくれば灰とわかれてきはやかにかたまり残る白銀の玉
 しろがねの玉をあまたに宮に收れ荷の緒かためて馬馳らす
 銀の荷負へる馬を牽きたてゝ御貢つかふる御世の御さかえ。

この八首は、彼が堀名の銀山に友人富田禮彦を訪ひ、その有様を見めぐつた時の作であるが、素材の新しさと、珍しき連作として特に有名である。その他、彼には紙すきを詠じた連作、人丸影供歌の實境を詠じた連作などがあるが、何れも巧にして手腕の非凡さを示してゐる。

以上見來つたやうに、曙覽はたしかに新古今以後第一等の歌人と稱し得られると思ふが、當時は、殆んど世にみとめられず、歌人としての令名はあがらなかつた。しかし彼は、それを憤りはしなかつた。たゞ眼識なき世を憐んだに過ぎない。次の數首は、彼が自歌に對する自信のほどを物語るものとして、最後にこれをあげる。

吾歌をよろこび涙こぼすらむ鬼のなく聲する夜の窓。
 燈火のもとに夜な／＼來れ鬼わがひめ歌の限りきかせむ。

人臭き人に聞かする歌ならず鬼の夜ふけて來ばつけもせむ。

凡人の耳にはいらじ天地の心を妙に洩らすわがうた。

大隈言道。言道は通稱を米屋清助といひ、萍堂と號した。寛政十年、筑前國福岡藥院町に生れた。家業は商であつたが、三十九歳の時弟にこれを譲り、自分は好む和歌によつて身を立てようとしたのである。彼の師は、福岡藩士二川幸之進相近で、和歌及び書を學んだ。漢學は豊後の碩儒廣瀬窓に學んだ。但しこれは彼の四十二歳の時である。彼は家業を弟に譲つて後は那珂郡今泉村に居をトし、子弟に和歌を教へた。其の門人として有名なのは野村望東尼である。安政四年六十歳の時、彼は大阪に移り住んだ。蓋し自家の歌風を世に問はん志のためと思はれる。文久元年には、草徑集三卷を上梓した。かくて大阪に止ること十年、六十七歳中風症にかゝり、慶應三年歸郷したが、遂に翌明治元年七月二十九日、七十一歳を以て歿した。

言道の歌論。彼の和歌に關する意見を見るべきものに、「ひとりごち」「こぞのちり」の二書がある。「ひとりごち」はその跋によると、彼が六十歳の時、大阪に上る際、弟子の利明にあたへたものであることは明であるが、その成立はも少し以前であらうと思はれる。「こぞのちり」は、「ひとりごち」の原稿の如きものと佐々木博士は説いて居られる。所論に、兩者重復する所が多い。今彼の所論を要約して見れば、

(一) 和歌は自己を詠ぜよ。これは現代の語でいへば、模倣を斥けて、只管に個性のこめられた歌を詠ずることに精進せよといふ意である。彼は古體、新體などゝ別ち詠み、又古今萬葉或は新古今などを宗として、ひたすらそれに倣はうとする歌人のよみ方を極度に斥けた。そしてかゝる模倣の作は作者の魂なき木偶歌であると斥けてゐるのであ

「僕かりに木偶歌と號づけたる物あり。魂たま靈たまなくて姿も意も昔の物なり。かゝる歌は千萬首詠めりとも、籠かごにて水をくむが如し」

「僕つらく、田舎人の歌を見るに、木偶にて世を終る人多し。古人は師なり吾には非ず。吾は天保の民なり、古人には非ず。みだりに古人に執すれば、吾が身、何八、何兵衛なる事を忘る。意のうはべのみ大臣の如くなりて、詠む歌さぞ尊きことにてもあるべけれど、そは賈人の冠袍を着たるなり。全く眞似にて歌舞伎を見るが如し」

かく彼は模倣的な詠歌を斥け、先づ自己の心を種として詠すべきをいひ、

「善き歌よまんと欲せば、先づ心より始むべし。心を種として吾が歌を詠するに、但心俗意もとよりにて、いまだ風姿髣髴たることを得ず。年を経月にわたりて、漸にすこしづゝ古人に近づく。全く似ざるを以て古人に近しとす。古人によく似たるを以て古人に遠しとす。古歌を學ぶ道のいとくはるかなるを知るべし」

古人に似ざる事を以て、眞に古人に近きもの、即ち己が歌を詠じ得る者となしたのである。

(二) 雅俗の辯、己が心をよみ、天保の民の歌をよみ、商人の歌をよみ、田舎人の歌を詠すべきものとすれば、次に生ずる疑問は、さる歌は俗なる歌となり歌體卑しきものとなるではないかといふ點である。現に言道の和歌は、「其の體卑し、その歌格壞れたり」と時人に貶せられて居るのである。これに對して言道は、和歌は自己を如實に詠ふものであるとの立場よりして、「吾は天保の民なれば天保の歌あるべし」といひ「我は市井の商人なれば商人の歌を詠まん、商人にして衣冠束帶せる公卿の歌を詠むは歌の本意に非ず」と高唱し、

「俗人は俗を以てせずんば尊からず、雅人は雅を以てせずんば尊からず」

「己れが歌を卑しといふ人あり。下賤なればさもあるべし。又異體なりといふ人あり。さる歌もあるべし。皆未熟の致す所なれば是非もなし。然るに己が心を詠じて古人に向はんの志ある人、此所を過ぎずして直渡なみわたする梯はしあらんや」

「強ひて雅をかざり偽らば、後人に天保の御代をくります也。後より顧みても、天保年間はかくの如くありしと、歌の趣にいちじるしく見えんこそ、歌の正道にてあらまほしきわざなれ」

と、俗に流るゝ事を厭はなかつた。但し、彼は俗が最良なりとは認めてゐるのではない。修養の結果、俗を離れて雅なる心境に到達することは望ましと考へて居るのである。たゞ、俗なる心にてありながら、表面を粉飾して、雅らしく見せかける事を斥けたのである。曰く、

「眞の風雅は、己が本心を先として、月花の惜しき情を悟り、杜鵑の面白からぬ聲もあはれになり、霞をあはれば、露をかなしみ、昔の人のあくがれしも宜なりと、まこと知る時ぞ、自らの風雅心には基つきぬべき。たゞ歌は月花をほめはやすものと心得たるは、まだしき程の心地なり」

又用語の雅俗については、

「漢語梵語も、今は國語同前なるは、嫌ひなく歌にいふべきものながら、其の選びをせねばならぬことになりてよ、歌學びよくせずはいはれぬことになりたるなり。今の人の平話の如く歌詞を自由にせねば、おのが心のまゝをいひ出づること難かるべし」

とのべて、俗談平語も自在に詠み得る境地を望んで居るのである。

(三) 眞淵、宣長、景樹に對する批評。彼は先づ宣長に論鋒を向けては、その初山路の説に、「後世に到りて實情を詠めるは、百に一つもありがたく、皆作りごとになれよば、作るべし」といひ、近來古體に分つて詠するといふ考方に對して、「作る」といふ事を更に吟味し、和歌は作らずして出来るものではない、三十一字に定れる以上、自然に成るものでない事は明であるが、その作る根本に於て、詠歎嗟嘆の感情が動いて居るか否か、眞の歌と偽作との別れ目であると論じ、その根元をすて、たゞ「歌は作り物なり」と考へてこれに臨むは誤であると論じて居る。

次に、景樹の新學異見に關しては、景樹の立論の立場と、眞淵のそれとは、その立場の異なるものあることをのべ「景樹は歌の如何なるものといふことを言ひ、眞淵は歌の學びといふ事をいはれたるなり。又眞淵の論は、歌といふものを詠み習ふ論也。景樹は歌の主意をいひて、學ぶことをいはず」と、景樹の非難のやゝ當を失せることを指摘して居るが、

「歌は情のゆくまゝにひとり調しらべなりて、思慮を加ふべきものならねば、古へに似せんとする暇あらんや、もしこれを似せたらんは、やがて飾れる偽のみ、又似せんとして似るべきものならんや。これを似せて似たりと思ひ居らんは、いとあぢきなし」

とのべた景樹の論に對しては、「誠に然り」といひ「これは歌の正論にて、即ち歌はかゝるものなるべし」「歌の本意はさるべきなり」と賛して居る。蓋し、古人に似せる云々の所が同感を誘つたのであらう。又眞淵の論に對しても、

「これはうひ學なれば、初心に教ふる道を論されたるにて、今の世人學びといふことなくては、うちつけにまことの歌いひ出づべきこと能はねば、萬葉を見よ、それにならへなど論されたる……終にはわがものとなりて、古人にもよらず、今人にもへつらはず、吾とわが嗟歎の歌なれど、師なくしては今に入り難ければ……何の道も、學ばずして己と善きに到らば、さばかりよき事はあらじ。されど學びて善惡まじれる道に入り、年月を経て後に、あしき事のみ選びすてんより外はあるまじ。初めよりよき事を選びとる力あらば、師といふものではなくてありなん」といつて、其の初心者を導くが爲の立場を肯定して居るのである。蓋し穩當の見解と稱すべきであらう。

(四) 和歌は一體に偏すべからず。これは、和歌は第一に作者の個性によつて、それ／＼特殊の作あるべきが當然である事、次に、歌の體は古來より種々あり、故に、眞實まことの歌をよむとても、たゞ涙ぐましく眞目なる事ばかり言ふものと心得るは誤であることを指摘したものである。曰く、

「人の面のかはる如く、歌も人に似て別々なり。其の性質、松もあり、竹もあり、柳もあり、梅もあり。いづれも同じからず。更にうごくまじき所あり。師なる人あやまりて、柳の性を松にせんとし、竹の生れ付を梅にせんとす。又學ぶ人、さる事かと思ひて、同じく己が性質によき所あるもあしき所あるも強ひて變ぜんとす。いたくあるべからざる事なり」

「歌の體いろ／＼ある物を、眞實を好むとて、唯涙ぐましく眞目なる事ばかりいふは偏れるなり。もとより眞目なる心の時は眞目なる事を云ひ、戯れたる時は、戯言をいふなり。……眞目なる歌を實情なりとて、夫にのみ偏よるべからず。この戯はた實情の外ならず」

(五) 講釋歌を排すべし。

「已れ初學に論して曰く、歌は花月を詠むものにはあらず、その月花につけて、吾が心をいふものなり。かく教へたるは、心を種とする事を忘れじ、月花の講釋歌をよませじといふなり。已れをおきて、月雪の上のみいへば、自身は如何にありても、歌は歌にて別物となる。……されば、月花をのぞきて、吾が心を云ふのみにても宜しかるべきを、目にかゝる所の月雪、耳に聞く所の鳥聲、歌の種となれば、それにつけて感歎すべき事なり。」

これは、心を種とする立場を重んじた所より生じた論で、古今集序の心をいとも適切に論じたものである。

以上を要するに、彼の歌論は精緻さを缺き、體系を整へては居ないが、其の所論は、彼の實際に於ける作歌體驗の上より生み出されたものであり、且つ歌に個性を尊重すべき事を高唱して居る所など、頗る現代人の心境に共鳴をあたへるものがある。木偶歌の譬喩、やゝ激した言ひ方ではあるが、所論は正にその通りと肯定せしめる所がある。

言道の歌風。言道の歌風を見るべきものは、文久三年刊の草徑集の他に、古典全集に收められた戊午集今橋集がある。草徑集はこの二集より言道の抄出したものである。

言道の歌は、彼の歌論を實證する作が多い。歌は歌、論は論と別々になつて居ない所に、歌人としての實力を見せて居る。この點に於て、宣長、御杖などは勿論、芦庵、景樹よりも更に一步をすゝめて居ると評すべきであらう。蓋し、彼の所論は、かゝる實際的體驗より生み出されたものである故である。

言道の特色は、其の觀察、其の着想の精細で且つ新鮮なる所にある。従來の歌人が等閑に見すぐして居たり、又氣づいても、歌によむべき事物でないと思へて居たやうな點を、巧に自己の作中に取り入れて、和歌に於て一新方面を

開拓した功は、没すべからざるものがある。勿論、言道が和歌に於て開拓し得た詩境は、俳諧に於ては既に元祿の時代に俳諧文學の中に於て開拓せられた所のものであり、これを俳諧に比較すれば、その着想も觀察もさして珍しくもなく、むしろ鋭さに於て劣る所もあるのであるが、和歌に於てこの世界を自己の見識より開拓し得たことは、誠に立派な業績といふべきであらう。

數しらぬ魚の命は板の上のかたなのあとにしるしぬるかな (俎板)

いづくにか吾身來ぬると思ふらん市にまろべるなだの蛤。

はしたなき片山里のはね釣瓶はねたる空の三月月の影。

旅人のいかに乗りてか淀舟のとまの上なる數のすが笠。

しぶく／＼にまが引く小田の牡牛うたれぬ先に歩めと思へど。

はきだめの塵の下なる芋すらも子は親にこそつきてありけれ。

夕立にさして行きかふ市人の傘は日傘になりけるかな。

いかばかり振りたてぬとも蝸牛角恐ろしと人の見ましや。

人心くちてはなれて桶の輪のわかれ／＼になるぞすべなき。

よそよりはいづれも同じ村鳥おのが妻こそつまも見しらぬ。

釣りも得で歸る籠かたみの空しきを輕め顔にも吹く嵐かな。

行く人を田舎童の見るばかり立ち竝びたるつく／＼しかな。

我酒のかぎり見えたるふらす、こに人の命も悲しかりけり。
家にてはとかく言はれし木枕の高き低きもなき旅寝かな。

これ等の素材、其の表現、共に従來の歌人に見られぬ新しさである。

答へする聲面白み山彦を限りもなしに呼ぶ童かな。

何事か遊ぶ遊ばぬいさかひも泣くぞ限りのわらはべのとも。

さし柳さして幾日も経ぬものを根さし引き見る友わらは哉。

幼きも又幼きをなつかしみ雞の子抱く里のたわらは。

泣くものは大人にならじ泣くものは柿も與へじ梨も與へじ。

いくばくの劣りまさりも見えぬ子の負へる負はるゝ哀なるかな。

童への枕のもとのいかのぼり夢の空にや舞ひあがるらむ。

妹が背にねぶる童のうつゝなき手にさへめぐる風車かな。

これ等は、彼の囚はれぬ新眼を以て、小兒の生活を凝視した所より生れた作であつて、又言道の歌の一特色と言ひ得られよう。

いつしかと我とりなれて後手の老の姿は誰にならひし。

わらはべのこゝにありとも知らすれど見えぬばかりになれる老かな。

何事も聞えひがめて老の身のことたしかなる思はくもなし。

何事かいひさして末は忘らるゝ老こそ老の心なりけれ。

従來の歌人の老後述懐の詠作と、これ等を比較して見よ。如何にその詩境の擴げられてゐるかどうか々々ひ得られる。

水にだに浮く輕石の輕ければ沈む時なき身のやすさかな。

あはせては又解き放つ古ごろもかくてぞ春も秋も經にけり。

折々はさらぬ家にも行きぬかしいつより來ぬる身の貧しさぞ。

吾身こそ何とも思はね妻子らが憂してふなべにうき此の世かな。

外面田の十町二十町我が宿のものがほにして人の物なる。

あたへにもなる時なくて我が園の瘦せたる竹のよの寒さかな。

今日は今日あらむ限りは呑みくらし明日のうれひは明日ぞうれへん。

吾が如く酒に酔ふらし音たてゝ打てば打つ手をまぬる山彦。

品たかきことも願はず又の世は又我が身にぞなりて來なまし。

これ等の作は、彼の生活人物を想見せしむる作として、又捨て難い味を持つて居る。

平賀元義。萬葉ぶりの卒直雄渾な歌風を以て、正岡子規に激賞せられた平賀元義も、亦幕末歌人として見のがすことの出來ぬ存在である。元義は寛政十二年(二四六〇)備中國に生れた。父は岡山藩士で平尾新兵衛長春といふ。平賀といふ姓は天保三年三十三才になつてつけたもので、彼の祖が信濃の平賀源氏の裔だといふ所から來たのである。それまでに彼は、祖母の實家の興津姓を名のり、又養子に入つて犬丸姓となつたこともある。

彼は武藝としては、劍、槍、弓、居合、手裏劍、捕手等あらゆるものを修め、和歌の外に古學、謡曲をも學んだが性頗る不羈奔放で、二十一歳の時主家に退身を願ひ、弟が相續することゝなつた。三十三才の頃より山陰山陽の各地を巡り、四十九歳にして最後の妻富子を娶り、五十二歳の時には清水谷家の侍格として上京した。五十二歳の時美作に楯の舎塾を創立して子弟を教へた。慶應元年(二五二五)十二月二十八日、六十六歳を以て奇行多き一生を終つた。

彼は元來國士を以て任じ、古學者を以て自任して居たので、歌は彼としては餘伎に過ぎないものであつたので、従つて生前に歌集などは残さなかつた。彼の書簡に「和歌の體の事御尋、先師賀茂眞淵翁の歌の體を好み申候。然れども學問の餘力により申すまでにて、歌ばかりよみ申さぬ故、世上の歌よみの様に、數はえよみ申さず候」といふのがあるといふ。以て彼の和歌に對する態度を推察することが出来る。

元義の萬葉調と、眞淵門下の多くの萬葉派歌人のそれとを比較するに、其の最も著しい差異點は、短歌の格調にあると思ふ。多くの萬葉派歌人は、其の長歌に於ては、萬葉ばりの格調で詠じて居るが、短歌に到つては、大部分が古今調や新古今調の影響を脱し切つて居ない。眞淵は元より、江戸派その他、幕末になつても、諸平の如きまでが何れも然りである。佐々木博士は、こゝに江戸期萬葉派歌人の特色があると指摘せられた。然るに、元義の短歌は徹頭徹尾萬葉調である。この點など、特に正岡子規をして感服せしめたところだと思はれる。又其の詠出態度に於て、元義の作は、誠に卒直であり、大膽である。少しの遲疑もなければ、短歌的な傳統の趣味に拘泥する所もない。これも元義の一特色だと思ふ。以下彼の作品をあげて、これを證してみよう。

牛飼の子等に食はせと天地の神の盛りおける麥飯の山(自彦崎至長尾村途中)

天照皇御神も酒に酔ひて吐き散らすをば許し給ひき(高階謙滿宅宴飲)

大井川朝風寒み大丈夫と思ひてありし吾ぞはなひる(自庭妹郷至松島途中)

皆人の得がてにすとふ君を得てわが寝る夜らは人な來りそ(晦日)

天地の神に祈りてますらを君に必ず生ませざらめや(三月三日夜)

たらちねの母にころばえ夜あはむ妹とし我は晝こそ逢ひけれ(題不知)

吾妹子は茅花をこゝだ食ひけらし昔見しより肥えましにけり(同)

五番町石橋の上で我が魔羅をたぐさにとりし吾妹子あはれ(同)

これ等の卒直大膽な野人的な作は、一寸他の歌集には見あたりにくいと思はれる。

もとしげき吉備の中山櫻散り青葉繁りぬ春盡きむとす(樋ヶ原看雪)

ひさかたの天うちきらし兒島のや麥飯山ゆあわ雪流る(遊于細谷川)

中山をわが越え來れば前しりへひだりみぎりに啼くほととぎす(中山を越えける時)

見渡せば高星高嶺朝日さし下つ群山さ霧たなびく(周西郷にて)

大君の加佐米の山のつむじ風ますらたけをが笠吹き放つ(加佐米山にて)

まな兒なす兒島の高嶺つしま山かぎろひ立ちぬ夜はあけむとす(早起)

雄神川あかとき寒み河上のゆついはむらに猿さはに啼く(題不知)

渡津見の潮の八百路の八潮路ゆ吹きくる風は涼しくありけり(反歌)

妹が家の板戸押開き我が入れれば太刀の手上に花ちりかゝる。

これ等は景を叙して萬葉風の域に入れるもの。

月よみの光さやけみ鋒とりて男さびする丈夫のとも(八月十五日夜弄槍して)

吾が大君物な思ほし大君の御楯とならむ我なけなくに(備後三郎大人賛)

弓柄とる益荒猛男し思ふこと遂げず殆かへるべきかは(手負つる武士の歌乞ひければ)

賜ひたる太刀とり佩きて事しあらば國の御楯と出でたゞしませ(見垣國道を祝きて)

眞黒なる煙の中をくき抜けて仇とりくべき人とこそ思へ(大和守久綾を)

これ等は彼の國士的氣概を示したものである。

彼の長歌亦佳作が多い。こゝには、彼が自身を詠じた詠をあげよう。

野々口隆正及びある漢學者流の、おのれを天傳ふ平賀の老翁、又平賀翁などに、物に書きたるを見て、いたく嘆きてよめる歌

皆人は吾を老翁といふ みな人は吾を翁とふ よしゑやし老翁といふとも よしゑやし翁ともいへ 黒髪は白くもならず 白き齒は黒くもならず 足すらもいまだいなへす 口すらも良くぞ物いふ 此の足の踏み立つ極み この口の物いふ限り 丈夫の心振り起し 八島國歩きめぐらひ 古への御書押開き 御國ぶり説きぞ示さめ 事しあらば火にも水にも 大君の爲にぞ死なめ 年は老いぬとも。

彼の意氣抱負さながらに躍如たるものがある。

太田垣蓮月。幕末歌人として、つゝましやかな女性歌人として、蓮月の名は逸する事は出来ない。彼女の傳記は、蓮

月尼自身が己の閱歷を記したものがあり、しかも名文と稱すべきものであるから、左に記さう。

「百姓にて今猶同姓あまた侍り。父は因幡の國の人、太田垣光古といへり。故ありて都東山に住む。その頃、寛政三年出生、名誠とよぶ。母は早うなくなりて、父にはぐまれて人となる。三十あまりにて、夫も子も亡くなりて、

つねならぬ世をうきものと三つぐりのひとり残りて物をこそ思へ

やがて父の許にありて、四十あまりにおくれて

たらちねの親の戀しきあまりには墓に音をのみなきくらしつゝ

この近き所に居らばやと思へど、山の上にて人の住むべき所にもあらねば、泣く／＼神樂岡崎に移りぬ。もとより貧しき身にて、せんかたなく、土もて、きびしよといふ物を作る。いと手づゝにて形ふつゝかなり。ゑりたる歌もたゞ好きにて詠むとはすれど、昔より暇なく賤き身にて、よき大人によりて學ぶことをせざりければ、人の口まねにて片ことのみなり。

手すさびのはかなきものを持ちいでゝうるまの市にたつぞわびしき

いのち長くて老いゆくほどに、世の中さわがしくなりて、

ゆめの世と思ひ捨てゝも胸に手をおきて寝し夜のこゝちこそすれ

恐ろしければ、北山のほとり、西賀茂といふ所に逃げいりて、猶長らへて今は八十あまりになりたり。

あけたてば墳もてすさび暮れゆけば佛おろがみ思ふことなし
夕さり空をながめて、

ちりばかり心にかゝる雲もなしいつの夕やかぎりなるらん」

以上で大凡彼女の生涯がわかると思ふが、彼女は世間的に見て誠に薄倅な運命の人である。母には二歳にて別れ、夫として迎へた彦根の藩士古川重二郎とは三十で死別し、數人の子供は夫より以前に悉く夭折して居る。彼女が尼となつたのも、一生清らかな操守の人として過したのも、この心の傷手のためと思へば、誠に氣の毒な身の上である。尼となつた後は、父と共に住んで、陶器を焼いてさゝやかな暮しをたてゝ居たが、それも十年ばかりで又父も歿した。「墓に音をのみ泣き暮しつゝ」の詠は、當時の彼女の心境を語つて餘蘊なきものである。

孤獨の尼僧、しかも彼女は、近藤芳樹が記して居る所によれば、非常な美貌の持主であつた爲に、彼女は却つて世のうるさゝに煩はされた。「引越しの蓮月」といふあだ名をうけるほどに轉々と居をかへ、平素は表の入口を閉ぢて居たといふことなど、彼女がうるさき人々の訪れを如何に嫌つたかを物語ると思ふ。

蓮月は多才多藝な女性であつた。和歌、書畫、圍碁、薙刀、鎖鎌、茶の湯、生花、舞唄等何れも堪能であつたといふ。その生計のたつきとした陶器なども、見真似の手づくねであるが、しかし雅致あり氣品あり、それに彫りつけた歌と共に、當時心ある人々に賞玩されて居た。文人雅客のみならず、貴顯の人々も駕を枉げることが多かつたらしい。その中でも、越前の曙覽との交遊の如き、誠に美しい挿話である。(曙覽の神蕪に詳しう)

晩年の蓮月は佛道によつて眞の安心立命を得て居る。しかもどこまでもつゞましい女性の美點を失はず、西賀茂

の神光院の境内の御茶所(三疊、五疊一疊の三間の庵室)で、明治八年齡八十五で歿した。

蓮月の和歌の特色は、一言に言へばつゞましいやかな歌風の中に、極めてやさしい情感を盛り込んだ作だと評し得よう。曙覽や言道のやうな自由自在な所はないが、如何にも女性らしい女性の歌を遺してくれた點に、我々は和歌史上の彼女を永遠に傳ふべきものがあると思ふ。彼女の歌は、「海士の刈藻」(明治三年刊)が生前に刊せられたが、彼女の全詠を収めたものは、最近出版の蓮月尼全集がある。

今彼女の作中、生活にふれた歌の主なるものをあげると、既出のものゝ外に

ことたらぬ住家ながらも七草のかずはあまれる春の色かな(若菜)

墨染の袖にも梅のかをりきて心げさうのすゝむ夜半かな(夜梅)

宿かさぬ人のつらさをなさけにて朧月夜の花の下臥(花の頃旅にて)

いにしへを月にとはるゝ心地して伏目がちにもなる今宵かな(秋月)

岡崎の月見に來ませ都人かどの畑いも煮てまつらなむ(八月十五夜)

旅ならぬ枕のくさに蟲なきて秋あはれなるわがいはりかな(秋の頃西賀茂にもものして)

山里のあやしの窓の紙障子風つつぶてとうつ霞かな(山家徹)

柴の戸におちとまりたる椋の實のひとりもの思ふ年の暮かな(初めて田舎に住みける年の暮に)

日かけ待つ草葉の露のきえやらで危く世をもすこしつるかな(述懐)

世の中はたゞうたゝねのしばらくを覺めぬ夢路にまどふわりなさ(同)

弓矢とり太刀さげ佩きて來ん世には君に仕へむ身にうまれてん（男子にておはします人のうらやましければ）
越路より四方にひかりし玉手宮あけみのうしのなきぞ悲しき（曙覽の死を悼みて）
死ぬもよし死なぬもよろし又一つどうでもよしの春は來にけり（七十七の春）
塵ほどの心にかゝる雲もなし今日を限りの夕暮の空（身まかりける時）
願はくは後の蓮の花の上に曇らぬ月を見る由もがな（同）

其他叙景歌などの中すぐれたるものをあげると

川ぞひの柳の糸にかゝりけり残るこほりの片われの月（早春月）
千くさ咲く秋はあれども一くさの二葉見つけし春の嬉しさ（若草）
音もせず降るとも見えぬ朝じめり枝おもげなる青柳の糸（朝春雨）
うまゐして蝶の夢みむ菜の花の枕にかゝる春の山里（春山家）
朝風に露とちりくる一聲はかゝる端山のやまほととぎす（杜宇一聲）
たちよらむ陰も夏野の草むらに露を求めてとぶ胡蝶かな（夏野）
里の子が機おる音もとだえして晝寝の頃の暑き旅かな（夏旅）
朝風に川ぞひ柳散りそめて水のしらべぞ秋になりゆく（初秋）
散りそむる桐の一片の露の上に寝ざめ夜深き月を見るかな（初秋月）
野に山にうかれくゞて歸るさを聞までおくる秋の夜の月（野月）
川なみのよるくゞごとに衣打つ音羽のさとの秋ぞさびしき（里袴衣）
はらくと落つる木の葉にまじりきて栗の實ひとり土に聲あり（秋山）
冬畑の大根のくきに霜さえて朝戸出寒し岡崎の里（冬朝岡崎の里にて）
われしらしせこの袂のほころびは引きけむ人ぞ縫ふべかりける（寄衣戀）
かへり見る遠山眉にひきそひて細くなりゆく旅ごゝろかな（旅にありて）（完）

近世和歌評釋

はしがき

近世の和歌を評釋するについて、私は近世における主要な歌人五十家ばかりを選び、それぞれまづ傳記の概略を掲げ、次に代表的な、又は注意すべき作品をあげて評釋するといふ方法をとらうと思ふ。しかし本講座においては別に能勢講師の近世和歌史が講述せられることになつてゐるから、各歌人の傳記の委しいこと、又は各歌人相互の關係とか、歌壇の變遷とかいふやうなことは、その方について知られたく、ここでは傳記は極めて簡單にして、歌そのものの解釋を主とし、なほ氣のついた所に少しづつ批評のやうな言葉を添へてみたいと思ふ。嚴密にいへば近世の和歌は元祿の古學興隆期から始まるといふべきであらうけれども、ここでは一般の文學史の時代的區分に從つて、細川幽齋から始めて幕末にまで及ぶことにする。なほ一言したいことは、和歌といつても短歌を主とすることに於いてである。近世の歌人も、短歌のほかに長歌や旋頭歌をも作つてはゐる。けれども一般には短歌を主としてゐたのみならず、事實上長歌や旋頭歌には二三の特例を除いては殆ど價值あるものがないのである。従つて本講においても主として短歌を取扱つてゆかうと思ふのである。

名を藤孝といふ。玄旨法印ともいふ。武將であつたに拘らず、文學にも通じ、和歌は三條西實枝に學び、古今傳授を傳へた唯一の人であつた。その歌風は二條家の特色を最もよくあらはしたものであるが、流石に秀逸なものが少なくない。家集を衆妙集といふ。慶長十五年、七十七歳で薨去。

枝ながら見よといひしを忘れては折る袖にけぬ露のむら萩

○「詠百首和歌」の中「萩露」の歌。 ○けぬ 消えぬ。

この歌は古今集、秋上、よみ人しらす「萩の露玉にぬかむとればけぬよし見む人は枝ながら見よ」を本歌に取つてゐる。古今集の歌は、萩の露を玉に見立てて、それを糸に貫き通さうとして、手に取ると、消えてしまつた。よしや露の玉を美しいと思つて賞翫しようとする人は、枝のまま、露を宿らせておいて、見よ。といふ意味であるので、それに基づいて、「枝ながら見よ」と昔の歌にいつてゐるのをふと忘れて、露の美しく宿つてゐる萩の枝を折らうとして袖が觸れると、群がつてゐる萩においた露が消えてしまつた。といつたものである。古歌を巧みに活用してゐる。

心せよきぎす鳴くなりかの岡に草刈るをのこわけて入るとも

○「岡春雉」といふ題の歌。

かの岡に草を刈る男よ。草を分けて奥深く分け入つても、そこには雉子が鳴いてゐるのだから、その雉子を心なく追ひ立ててしまふなどの事のないやうに、氣をつけよ。

のどかなるかけを契りて春の日のおつれば落つる夕雲雀かな

○「飛鳥井羽林亭にて、夕雲雀を」とある。 ○かけ 日の影で即ち日光のこと。

雲雀はのどかな春の日の光と行動を共にすることを約束してゐるやうに見えて、夕方になつて、日が落ちると、雲雀も、今まで空高くあがつてゐたものが、落ちてくることである。といふ歌である。面白い趣向である。

何を世に思ひおかまし春の夜の月と花との露のあけぼの

○「月前花」といふ題詠。

春の夜の月と櫻の花。やがて夜が更けて曙になる。一面に曉の露が宿る。何ともいへぬ景色である。かうした景色を眺めれば、何をこの世に思ひ残さう。思ひ残す事はない。

吉野川高嶺の櫻ちらぬまも花に流るる水のしらなみ

○「天正十七年吉野にて花の歌五首」とある中の一首。

吉野山の高嶺に咲いてゐる櫻が散れば、その花が吉野川に落ちて流れるのであるけれども、櫻がまだ散らぬ間にも、花が水に映じて、吉野川の白波は花の色になつて流れることである。こゝいふ歌で、よほど観念的であつて、必ずしも實景ではなからうけれども、又さういふ點では相當の面白味がある。

きのふけふ秋くるからにひぐらしの聲うちそふる瀧の白波

○詞書「愛宕山より月輪にまかりて秋立ちて二日といふに下山しける道に瀧ありけるを人に尋ればひぐらしの瀧と答へける

に折ふしひぐらしの名にもたがはず鳴きけるを聞きて」

詞書にあるやうに「秋立ちて二日」であるから、「昨日今日秋くるからに」といつたのである。昨日今日秋が来たばかりであるのに、秋が来ると、もうすぐに、いかにも秋らしく、瀧が落ちて白波となつて流れつつ音を立ててゐるのに、聲を添へて鯛が鳴いてゐることである。しかし「ひぐらしの瀧」といふ名にそむかず折しも鯛の鳴いてゐることが、まことに趣深い。といふ歌で、歌の調子は、古今集、賀、凡河内躬恒「すみの江の松を秋風ふくからに聲うちそふる沖つ白波」を本據にしてゐる。

元政

普通に深草の元政として知られてゐる。石井元好の子、元和九年に生れた。幼名を俊といひ後に源八郎と改め元政と名乗つた。二十六歳の時に出家して元政といひ、後に洛南深草村に住み、寛文元年、三十九歳の時、その庵を寺として、草山瑞光寺といつた。寛文八年二月十八日入寂。年四十六。家集を草山和歌集といひ、寛文十一年に刊行された。

よしや吹け難波の蘆のふしのまも月に寝られぬ秋の浦風

○「浦月」といふ題詠。○蘆のふしのまも 蘆の節と節との間といふことで、短いことをいふ。新古今集、戀一、伊勢「難波浦短き蘆のふしのまも逢はでこの世をすぐしてよとや」といふのは有名で、難波は蘆で古來歌枕になつてゐる。

難波の浦に宿つたが、その蘆の節の間のやうに極めて短い間さへも、秋の月があまりに美しい爲に、寝られないのであるから、浦風よ、構はないから、いつそ強く吹いてくれ。風が烈しからうとも、それに破られるやうな夢さへ

結ぶことができないのであるから。といつたやうな趣で、これは新古今集、露旅、藤原定家「袖に吹けさぞな旅寝の夢も見し思ふかたより通ふ浦風」といふ歌の心に似通つてゐる。

迷ふぞよ逢ふはわかれのことわりは人にもさこそ教へける身の

○「わらは友だちなりし人田舎より尋ねきて歸りし時」といふ詞書がある。逢ふは別れのはじめとか、會者定離とかいふ事の道理は、自分は僧であるから、人にも今までそのやうに教へてきた身であるのに、今さし當つてこの人と別れた時には、別れが惜しまれて、さすがに心が迷ふことである。

里の犬のあとのみ見えてふる雪もいとゞ深草冬ぞさびしき

○「雪ふりつもりたるあした」の歌。○いとゞ深草 ふる雪も一層深く積るといふ意味と深草といふ地名をかけてゐる。里の犬の足跡ばかりが見えて、ほかに人の足跡は全く見えない。ふる雪はますます烈しくふつて、一層深く積る。この深草の里の冬はまことに寂しいことである。

面影もたださながらのふるさとを埋みなはてそ庭の浅茅生

○父の久しく住んでゐた家でよんだ歌。元政の父元好は萬治元年十二月十八日に八十七歳で死去。その時元政は三十六歳であつた。

もと父の住んで居られたところへ来て見ると、今は世に亡い父の面影までも、そのままに思ひ出されるが、ここを長くこのままにしておきたいから、庭の浅茅生よ、ほしいままに生ひ茂つて、ここを埋めてしまつてはいけない。

身をさらぬ心を友と定めずばひとり住むべき山の奥かは

六

○「山家」さいふ題がある。

どんな事があつても、自分の心は自分の身を離れ去ることはないから、「身をさらぬ心」といつたのである。その自分の心を自分の友と定めなければ、ただ一人で住むことのできる山の奥であらうか。到底寂しくて住むに堪へられないであらう。

木下長嘯子

名は勝俊。はじめ豊臣秀吉に仕へ、後に徳川家康に仕へた。武人であるが、歌人としてもすぐれてゐた。東山の靈山に住み、蓬髪して長嘯子といひ、慶安三年に歿した。年八十一。家集を舉白集といふ。その歌はよほど自由清新といふ特色を持つてゐる。

霞たつ逢坂山のさねかづらまたくりかへし春は來にけり

○巻頭の歌「春たつ心を」といふ歌である。○上句は序詞で「さねかづら」から「くり」にかかる。「さねかづら」は美男長ともしふ蔓草で、その蔓を繰り取るといふことから「くり」にかかるのである。

歌の意味は「くりかへして又今年も新しい春が來た。」といふだけであつて、上句は序であるが、「霞たつ」はおのづと春の有様をあらはし、「逢坂山のさねかづら」と續けたのは、後撰集、戀三、三條右大臣（定方）「名にし負はば逢坂山のさねかづら人に知られでくるよしもがな」に基づいてゐる。

さもあらばあれ羽風ばかりに散る梅よよそには聞かじ鶯の聲

鶯の羽を動かす爲におこるわづかの風にだけでも散るところの梅よ、それはどうともあれ、それよりも自分は鶯の聲をよそ事のやうには聞かまい。しみじみと聞いてやらう。

けふはまづ里のあげまきしるべして若菜つませよ野飼がてらに

○あげまき 總角。髪を左右に分けて揚げ、巻いて角のやうに結ぶこと。又、髪を總角に結んだ子供のこと。○野飼 牧場に牛馬を放し飼ひにすること。

今日は何よりもまづ、里の子供よ。野飼をしながら、案内して、連れて行つて若菜を摘ませてくれよ。といふ歌で、中々面白い表現である。

春の夜の限りなるべしあひにあひて月もおぼろに梅もかをれる

○題「月前梅」○あひにあひて よく打合つて。折よく重なつて。古今集、戀五、伊勢「あひにあひて物思ふ頃のわが袖に宿る月さへぬるるがほなる」といふ用例がある。

月も臙に照つてゐるところへ、ちようどよく叶つて、梅も芳しく薫つてゐる。かうした景色こそ春の夜の最上のものであらう。

難波瀉あけぬなみとを月夜よし夜よしと出づる春の舟人

○「春の歌の中に」の一首 ○月夜よし夜よし 古今集、戀四、よみ人しらす「月夜よし夜よしと人に告げやらば來てふに似たり持たずしもあらず」に基づいたことばで「月夜よし夜よし」と重ねた形である。

春の夜の難波瀉で、いい月夜であるさいつて舟人たちはまだ夜の明けない港を、舟を漕いで出てゆく。といふ意味で、舟人が月のいいのに浮かれて、月を賞翫する爲に舟を出すのであらうといふやうな心持を、古今集の歌の句を巧みに利用して歌つたものである。

月夜よしねぬ夜あまたの花のかげ逢ふべき夢の人もこそ待て

○詞書「故太閤より花歌五十首めしけるとき一夜によみはべりける」とある。故太閤とは豊臣秀吉のことである。○ねぬ夜あまたの拾遺集、戀三、人麿「頼めつつ來ぬ夜あまたになりぬれば待たじと思ふぞ待つにまされる」新古今、夏、家隆「いかにせむ來ぬ夜あまたのほととぎす待たじと思へば村雨の空」などの「來ぬ夜あまた」といふ句法を學んだものである。

この頃は、月がよく、花も美しく咲いてゐるので、その景色を賞翫する爲に、花の下蔭で寝ない夜が多くつづく。寝ると夢を見て、その夢の中で逢ふべき人があるが、その人がさぞ自分を待つてゐるだらうに、寝られないので夢も見ないことである。

待ちわびて聞くをならひの時鳥つれなからずば野邊の村鳥

○「夏の歌の中に」○村鳥 群鳥に同じ。

時鳥の聲は、倦み疲れるほどまで、さんさんに待つて待ち焦れて、その上でやつと聞くことができるといふのが常の習ひである。これがもしつれないのでないならば(譯もなく澤山に鳴いてくれるやうであるならば)野邊の多くの鳥と異なる所はないであらう。つれないからこそ時鳥といふものの値打があるのである。

あはれにもうち光りゆく螢かな雨のなごりのしづかなる夜に

○「ある人のもとにて」の詠。

美しい叙景である。

昨日まで何とも聞かぬ萩の葉に今日よりかなし秋の初風

○「初秋」といふ題の歌。

昨日までは夏であつたので、何とも思はずに聞いてゐた萩の葉の風である。ところが今日から秋になつたので、秋の初風に吹かれて音を立てる萩の葉の聲は、まことに悲しいものである。といふ意味で、拾遺集、秋、紀貫之「萩の葉のそよ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ」といふ歌を始として、萩の葉と秋風とを結びつけた歌、そして萩の葉に吹く秋風の聲はいかにも秋らしく悲しいものであるといふ考へ方が古來多くあるのに、根據をおいたものである。

ひぐらしの聲もなれたる山里に今一入のさびしさもがな

○「ひぐらしの鳴きければ」とある。

鯛は寂しいものである。けれどもかうして山里に住まひしてゐると、その鯛の寂しい聲にも馴れてゐる。だから鯛よりほかのもので、もう一層の寂しさがあればいいと思ふ。

さそはれておぼえず月に入る野邊の左は小萩右は松虫

○「秋の歌の中に」。

月があまりいいので、それに誘はれて思はず踏み入る野邊、その左手には小萩が一面に咲きみだれ、右手の草むら

には松虫の聲がする。といふ歌で、やや観念的ではあるけれども、表現に新味がある。

難波江や月かげさえてみだれ蘆の末こす風に千鳥鳴くなり

○題「千鳥」

難波江の冬の景である。月の光が冴えて、みだれ立つ蘆の葉末を寒い風が吹き越す。その風に吹かれて千鳥が悲しげに鳴く。といふ歌で、かういふ歌は勿論ややもすれば陳腐になつてしまふが、これなどは表現の上にとどこか新しいところがあつて、傳統的ながら美しい歌になつてゐる。

はかなくも覺めてけるかな見しやそれ何にたとへむ一年の夢

○「東山にて歳暮のころを」

一年の夢が今日、歳暮の日にはかなくも覺めてしまつたことである。見た夢は一體何にたとへよう。たとへる物もないほど、はかないものであつたことを感ずる。といふ年末の感を歌つたもの。

とけてねぬ霜夜を寒み山里は嵐のとほそ夢たたくなり

○「山家の歌の中に」

○とけてねぬ 心が解けては寝られない。 ○とほそ 櫃のことから轉じて戸のことをいふ。

霜のふる夜が寒いので、心安らかに寝られない山里の住まひは、嵐が戸をたたいては、夢を破ることである。即ち嵐の戸に吹き當る音のために、結ばうとする夢が破られ、その上に寒さがきびしいので、少しもおちついては寝られないといふのである。下旬のいひあらはし方が面白い。

よしやただ憂き世に何か久方の月をのみこそ花をのみこそ

○久方の 月の枕詞であるが、上からは「憂き世に何か久しからん」とかかる。

○月をのみこそ 花をのみこそ いづれも

「見ゆ」が略された形である。

この憂い世の中にどうして久しく生きてゐられようか。どうせ短い命であるとすれば、よしやただ月ばかりを、花ばかりを見て、楽しく暮さう。

世々の人の月は眺めしかたみぞと思へば思へば物ぞ悲しき

○「月の歌の中に」。

月といふものは、昔から世々の多くの人が眺め眺めた形見である、つくづく思へば、何となく悲しいことである。

下河邊長流

本姓小奇、名を具平といふ。通稱は彦六。故あつて母方の姓なる下河邊を稱した。大和國宇田の人。はじめ長龍といひ、難波に出てから、堀江の水に因んで長流と改めた。名聞を求めず、隱遁的の生活をしてゐた。萬葉集に精通し、萬葉集管見を著した。中世以降萎靡陳套その極に達した堂上歌學に反抗し、和歌を自由な天地に、そして民衆の手に取戻さうとして、寛文十年民衆の歌を集め林葉累塵集と名づけて刊行した。又徳川光圀から萬葉集の註釋を依頼されたが、つひに業を終へずして歿した。これが契沖によつて繼承せられ、完成して萬葉集代匠記となつたのである。長流の歌集には、延寶九年、(この年九月二十九日天和と改元)五十八歳の時に自選した長龍延寶集があり、歿後

に契沖が選んだ晩花集がある。(長龍延寶集のことを自撰晩花集ともいふ。)その歌風はまだ必ずしも在來の堂上風を脱してはゐないが、反二條派なる京極爲兼や木下長嘯子に私淑して、やや新味があつた。貞享三年、六十三歳で歿した。

梅が香を佐保路はるかに送りすてて柳にかへる春の河風

○以下すべて自撰晩花集から選出。 ○佐保 奈良の郊外。

佐保河のほとりを吹く春風が梅を吹いて、梅の香を遙かに佐保路に吹き送り、それを吹き捨てておいて再び歸つてきて、河邊の柳に吹くといふやうに、風が梅の香といふものを持つて行つて捨てて来て、更にまた柳のあたりを吹き廻るといふやうに見立てたものである。

秋風を柳が枝にちぎりおきて行くやこのめもはるのかりがね

○「歸雁」の歌。 ○行くや「や」は詠歌の助詞。 ○このめもはるの 木の芽も張る、即ち芽が萌して次第に成長するといふ「張る」に「春」を掛けたのである。古今集、紀貫之、春上「霞たちこのめもはるの雪ふれば花なき里も花ぞ散りける」といふ例がある。

木の芽が次第に成育する頃、春の雁は、柳の枝に今は春風が吹いてゐるが、やがて秋風が吹くであらうことを約束し、その秋風が吹く頃には再び訪れて来ようとの約束をしておいて、歸つてゆくことである。

雪はけぬ今いくかありて櫻花さかむとか見る春の山守

○けぬ「消えぬ」に同じ。 ○山守 山を警する人。

春になつた。今まで積つてゐた雪は消えてしまつた。山守よ。今幾日ほど経たらば、櫻の花が咲くだらうと思ふか。古今集、春上、よみ人しらず、「春日野の飛火の野守出でて見よ今いくかありて若菜摘みてむ」の換骨奪胎である。

櫻がり雨はいとはぬ木のもとにうたて雪ふる花のあらしよ

○「落花」の歌。 ○櫻がり 櫻を尋ねて遊ぶこと。 ○うたて あまりに甚しいといふやうな意味。

拾遺集、春、よみ人しらず、「櫻がり雨はふりきぬ同じくは濡るとも花の蔭にかくれむ」といふ古歌がある。櫻狩の場合に、雨がふつてきたならば、古歌にあるやうに、花の蔭に隠れようから、雨は厭はないのであるが、木の下に立寄ると、花が風に吹き散らされて、ちようど雪がふるやうに、しかも驚くべく甚しくふつてくる。といふので、「雨は厭はぬ木の下に雪がふる」といひ、そしてその雪に惱まされるといふのではなくて、却つてさうした景色を喜んでゐるといふのである。

待ち待たぬ人わきもせぬ時鳥この里中にもらす初こゑ

○人わき 人の區別。人によつて分け隔てをすること。

時鳥が今に鳴くか鳴くかと待つてゐた人と、別に氣にもとめず待つてもゐなかつた人と、その間に差別をつけることもせず、時鳥はこの里中で、誰の耳にも一様に聞えるやうに、初聲を洩らすことである。

五月山卯の花月夜まだ宵のかげと見しまに峰の横雲

○「夏九十首の歌よみける中に」といふ詞書がある。 ○初二句は萬葉集、卷十、作者不詳、「五月山卯の花月夜ほととぎす聞け

ども飽かずまた鳴かぬかも」に基づいてゐる。「卯の花月夜」を略解その他には、卯の花の白く咲いた様を月夜に譬へたものと解してゐるが、古義その他には、卯の花に月が照らしてゐることと解してゐる。後者の方がよるしい。○峯の横雲 新古今集、春上、藤原定家「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空」この歌は夢からさめてみると、朝になつてゐて、峰から静かに横雲が離れてゆく、といふやうな意味であるので、この歌によつて「峰の横雲」といつて夜明け方の景をあらはしたのである。

五月の山に卯の花が咲いてゐるところに月が照つてゐる。まだ宵の月影であると思つてゐた間に、早くも夜が明けて、峰のあたりに横雲が棚引いてゐるのが見える。

我のみやほさぬ袂とわびぬれば尾花が袖も露の夕ぐれ

○「草花」といふ題がついてゐる。○ほさぬ袂 ほしあへぬ袂。涙に濡れてそれをほしても乾かすことのできない袂。後拾遺集、戀四、相模、「うちみわびほさぬ袖だにあるものを戀に朽ちなむ名こそ惜しけれ」の用例がある。

自分ばかりがこんなに悲しくて、袂が涙に濡れて、ほしてもほしきれない程であるのかと、思ひわびてゐると、さうではなくて、秋の夕暮に野路を行くと、尾花にも露が宿つてゐて、それがちようど袖を涙で濡らしてゐるやうに思はれる。

遠きつらはただひとつらに見えし雁の近づく空に數ぞわかるる

空の遠くに見えた時には、ただ一列の雁であると思つたのに、次第に近づいてくるのを見ると、その雁の數がはつきりと目に見えてくる。といふので、詞書に「爲兼大納言の體にならふ歌」とある。京極爲兼は玉葉和歌集の撰者で

二條家に對抗し、新奇な歌を作つて二條家からは異端視せられてゐた。後世長く二條家の歌風が盛であつた爲、あまり顧られなかつたのであるが、長龍はこれに私淑してゐたのである。

もろこしにありし人だにこひかへす御津の濱なる松にやはあらぬ

○「契沖が難波より山里にいりけるにいひ遣しける」といふ詞書がある。○もろこしにありし人 唐土に行つてゐた人といふことで、ここでは山上憶良のことをさす。萬葉集、卷一、山上臣憶良在大唐時憶本郷歌「いざ子ども早もやまとへ大伴の御津の濱松待ち戀ひぬらむ」といふ歌がある。○こひかへす 思ひかへして戀ひ慕ふこと。○御津 今の大阪の地。

その昔、唐土に行つてゐた憶良といふ人でも、故郷のことを思つては、戀ひ慕つた御津の濱なる松ではないか。憶良も御津の濱に生えてゐる松がさぞ自分の歸りを待つてゐることだらうと歌つたではないか。といつて、契沖が山里へ入つてゆくのを送つて、自分が待つてゐるから、再び難波へ歸つて來給へといふ心持を歌つたのである。

契 沖

下川元全といふ武士の子で、尼ヶ崎に生れた。十一歳の時、今里の妙法寺に入り、その後剃髪して高野山に上り、修行すること十年、下つて難波生玉の曼荼羅院の住職となつた。下河邊長流よりは後輩であつたが、交遊を結んでゐた。その後、和泉の久井に居り、更に池田萬町の豪家なる伏屋重賢の邸内なる養壽庵に入つて、學に勵んだ。長流の業をついで、つひに萬葉集代匠記を完成した。晩年は高津の圓珠庵に住んでゐた。そして古今餘材抄その他の著述に従事した。家集には延寶九年に自分で編じた契沖延寶集がある。これは後に自撰漫吟集と呼ばれたもので、ほかに漫吟集類題二十卷がある。漫吟集には長歌も含まれてゐて、無常賦、六道賦などすぐれた作がある。元祿十四年入

寂。年六十二。

雨まじり風うち吹きてふる里にちる花さむし春の夕ぐれ

○以下すべて自撰漫吟集から選出。

平明な、しかも趣ある叙景である。

さよふけてたれ住吉のきしもせむ遠里小野のまつ虫のこゑ

○きしもせむ「住吉の岸」とかかつて「来しもせむ」とつづく。「し」は強意の助詞。○遠里小野 今では大阪市住吉區遠里

小野町になつてゐるが、古くから歌枕として知られてゐて、萬葉集、卷七、「住の江の遠里小野の眞萩もてすれる衣のさかり過ぎゆく」などの古歌がある。

住吉の岸に近い遠里小野に松虫の聲がするが、こんなに夜が更けてしまつては、誰がわざわざ来もしようか。誰も来まいのに、人を待つといふ名の松虫が、しきりと人待ち顔に鳴いてゐる。

くれにけりありて憂き身のながらへば又こむ年もかくや歎かむ

○「年のはての歌」である。

今年も年が暮れてしまつた。このままこの憂い我が身が生きながらへるならば、又来年も暮になつて、このやうに歎くことであらう。

心ある人に一夜の宿かりて馴るるも悲し明日のふるさと

○「旅の歌の中に」とある。

情の深い人に一夜の宿を借りて、色々とお接待を受けるけれども、自分は旅の身であるから、明日はどうしても別れて、この宿を出て行かねばならぬ。明日になれば、この宿が自分の爲には「ふるさと」になつてしまふ。と思へば、今夜かうしてもてなされ、この人と馴れ親しむ心も、親しめば親しむほど別れにくくなるであらうから、却つて悲しく思はれる。といふ纏綿たる情を歌つて頗る巧妙である。

雲みぢをなほ同じ世と頼みしをさてだにあらで別れぬるかな

○詞書「父が越の國にて身まかりける時よめる」 ○雲みぢ 空の彼方の遙か遠い所といふ意味。

越の國といふ遠い所に行つて居られても、やはり同じ世に生きてゐるのだから頼もしく思つてゐた。けれどもその父が越の國で亡くなつたのである。たとへ遠く離れてはゐても、同じ世に住んでゐるからと、せめてはそれを頼みにしてゐたのに、今はそれさへできないやうに、別れてしまつたことである。

久方の都を遠み思ふことありても見ばやしほがまの浦

○「名所の歌」の中。○久方の 天、雨、月、空などにかかる枕詞から轉じて都にかかる枕詞に用ひられる。萬葉集、卷十三「久方の都をおきて草枕旅ゆく君をいつさか待たむ」 ○しほがま 鹽釜。鹽釜。今の宮城縣にあつて、古くからの名所。

この鹽釜の浦は都から遠く離れてゐるので、自分は今これといつて物思ひもないけれども、何か憂い悲しい思ひでもあつて、この景色を眺めたい。さうすれば景色を一層しみじみと味はふことができるであらう。

駿府城内に生れた。父は渡邊監物忠。幼にして父に伴はれて下野の那須に住み、後に江戸に出て伯父戸田政次に養はれて戸田姓を名乗つた。本多侯に仕へたが、後に浪人して淺草金龍山の邊に住んだ。寶永三年四月十四日歿。年七十八。在來の堂上歌學に反抗して、自由の天地を開くべきことを主張したが、その歌論を最も明らかにしてゐるものが梨本集である。家集は傳はつてゐない。「紫の一本」隱家百首「鳥之迹」その他の諸著に歌が散見してゐる。

あちこちとめぐりて爰にくるま坂うちくたびれて腰をひくなり

○「紫の一本」の中の歌で、車坂でよんだもの。「紫の一本」は一種の江戸名所記で、紀行文體に書かれてあつて、見聞のままに歌を挿入して綴られてある。○くるま坂「爰に来る」とかけて「車坂」といつたので、車坂は下谷にあつて今の上野公園の東のところ。○腰をひくなり「曳く」は「車」の縁語。

江戸中の名所をあちこちと歩き廻つて、此處の車坂へ来たが、もう疲れてしまつて、足や腰をひきずるやうにして、やつと歩いて来た。といふやうな即興的で、かつ狂歌めいた歌であるが、いかにも飄逸で面白い。

ひく琴に聲も惜しまぬ時鳥感に堪へかねわれも音になく

○「紫の一本」の歌。「戸塚毘沙門堂の縁に琴の音に和して郭公を聞く」とある。

ひく琴の音に和するやうに聲も惜しまず時鳥が鳴く。それを聞いて自分も感に堪へずして、聲を立てて泣くことである。といふ意味。「感に堪へかね」といふことばの使ひ方が目新しい。

聞く人の首なげぶしの唱歌にも浪あらじとはよき小歌ゆゑ

○同じく「紫の一本」の中。「王子金輪寺に雪見に罷り、陶々齋とさし請けひき請け酒を飲む。遣使三味線をひけば、陶々齋は音頭を吹く。京生れのもの罷り出でて、投節を聲も惜しまず歌ふ。」とあり。「紫の一本」は陶々齋と遣使といふ二人が江戸市中を歩いて見聞したまを記したやうに作つたものである。○なげぶし 明暦頃から元禄頃まで流行した小歌で、はじめ京都の島原の柏屋又十郎抱への河内といふ遊女の歌ひ出したもので、歌は島山箕山の作が多かつたといふ。その歌は「松の葉」その他に傳へられてゐるが、ここに「浪あらじ」といふのは「渡りくらべて世の中見れば阿波の鳴門に浪あらじ」といふ小歌で、「松の葉」には古今百首なげぶしとして最後の句が「浪もなし」となつて掲げられてある。

投節の唱歌に「浪あらじ」と歌ふのであるが、それがまことによい小歌であるので、聞く人は首を投げて感心して聞くのである。といふ意味。

のがれかね世にふりはてし老の身はかくれ棲むべき山梨のもと

○「隱家百首」委しくは「不求橋梨本隱家勸進百首」の歌で、これは晩年に本郷の丸山本明寺谷に住んで、みづから隱家の茂睡と名乗り、その庵の前の小橋を不求橋と稱してゐたが、隱家、不求橋、梨本と號する所以を三首の歌によみ、それを序のやうにして、以下隱家主人の作を始め勸進百首を収め、なほ追加二十九首を添へて、元禄七年に刊行したものである。この歌はその序三首の中、梨本と稱する所以は庵の前に山梨の木があるからであるといふことを歌つたものである。

世を通れようと思つて、通れることができずに年経てしまつた老人の身は、山梨の木があるあたりに、世を忍んで隠れ住むべきである。といふので、隱逸を好んだ茂睡の面目をよくあらはしたものである。なほこの時、不求橋とい

ふ橋をかけてその傍に札を立てておいたところが、三輪執齋といふ陽明學者がその前を通つて「求めざる心なりせば隠家に誰わたれとてかけし橋ぞも」と詠んだといふことである。

ぬれて鳴く山ほととぎす五月雨のふる巢や思ふ親やこひしき

○「鳥之迹」の歌。「鳥之迹」は山名義豐(玉山)の志をついで茂睡が當時の歌人の作八百餘首を集めた撰集である。○この歌は「五月雨杜宇」といふ題の歌。○ふる巢 古巢であるが、五月雨の降るとかかつてゐる。

五月雨に濡れて鳴くところの山時鳥は、もとの巢を慕はしく思つて鳴くのか、それとも親がこひしくて、そんなに鳴くのか。

小倉山峰のともしのうつるか戸難瀬の川のかがりぞ見る

○「鳥之迹」の歌。○題「照射」 ○ともし 照射。夏の夜、山の中で篝火をたき、その火に誘はれて寄つてくる鹿を射取ること。○戸難瀬の川 大堰川ともいふ。杜川となり、末は淀川と合流する。小倉山の麓、嵐山の近くを流れる。戸難瀬川に浮んでゐる舟の篝火は、小倉山の峯の照射が映るのかと思つて見ることである。

家づとにゆるせばとても櫻花見すべき人のあらばこそ折らめ

○同上。「妻なくなりし又の年上野の花を見て」。

櫻の花の枝を、家への土産に持つて行つてもいいと許してくれたところが、持つて歸つて見せるべき人があるならばこそ折りもしようが、見せて喜ばせる人もないのだから、折つても仕方がない。

荷田春満

伏見の稻荷の神官荷田信詮の子。本姓は羽倉。はじめ名を信盛といひ、後に東麻呂と改めた。東丸・東満・春満とも書く。家職を弟信名に譲つて、専ら古典の研究に力を用ひ、國學を唱へ、就中萬葉集についての造詣が深つた。又、國學校を創立しようとして幕府に建言した。創造國學校啓文が即ちその建白書である。しかしこの事は實現せられなかつた。元文元年七月、六十八歳で歿した。家集を春葉集といふ。

音ならでござろく風の梅が香にさめて惜しまぬ夢の手枕

○題「梅」。

風の吹く、その音で目が覺めたのでなくて、風に吹き送られる梅の香に氣がついて目が覺めた。常ならば、手枕のうたた寝に見る夢の名残が惜しまれるのであるのに、今はたとへ夢が破られても、目が覺めて却つて梅の芳香をきくことができたので、覺めたことを少しも惜しまないのである。といふ技巧で作らげたやうな歌である。

いつはあれどいづくはあれど波かすむ繪島が崎の春のあけぼの

○題「春曙」 ○繪島が崎 淡路島にある。

いつといふ中にも、どこといふ中にも、とりわけ波のかすむ繪島が崎の春の曙の景色がいい。

棹とめて見るまもなみの早瀬河花にうらみむ春のいかだ士

○題「花」 ○なみ 「見る間も無いので」といふ意味と「波」をにかけてゐる。

春の筏を流す人は、波の流れの早い川であるので、兩岸に花が美しく咲いてゐるけれども、棹をとめてそれを眺める間もないから、花に對してさぞ恨めしく思ふことであらう。

石の上いそいそぐ早苗さやなか五月雨ごごいのふるの山田やまのにうゑめおり立つ

○題「早苗」 ○石の上 「ふる」の枕詞であると同時に、こ、ではおのづか「いそぐ」とかかつて同音を繰返すやうになつてゐる。 ○ふる 布留。大和國の地名。「五月雨の降る」とかかつてゐる。 ○うゑめ 植女。ここではいはゆる早乙女。

いそいで植ゑようとする早苗であらうか。五月雨のふる中で、布留の山田に田植の女がおり立つてゐるのが見える。といふ歌。用語の技巧で持った歌である。

ほのかにもあけゆく星の林まで秋の光と見れば身にしむ

○「立秋」の歌。

星の林といふのは数多くの星のことである。意味は平明である。秋になつたといふことを強く感じてゐるのである。

ふきはらひ風も月まつけしきかも残る雲なきいさよひの空

○「十六夜」の歌。

十六夜の月が昇るべき空に、今まであつた雲を、風が吹き拂つてしまつて、今は空に残る雲は少しもない。風までもかうして邪魔になる雲は拂つて、月の出るのを待つてゐるやうな様子であることよ。といつて、自分が月を待つ心を言外に含めたものである。

なく鳥のこゑもうもれて稻荷山くれ静かなる雪の杉村

○「雪のふれる夕」の詠。

稻荷山の夕暮、雪のつもつた杉の村立に鳥が鳴くが、その鳴く聲も雪に埋れてゐるやうな感じである。

かぞへじなこれもうき身につもりては老となるべき曉の鐘

○題「曉」

古今集、雑上、在原業平の歌に「大方は月をもめでしこれぞこの積れば人の老となるもの」といふのがある。それを念頭において、月が積れば老となると昔の人はいつたが、曉の鐘も積ればやはり老となるであらうから、鐘の音をかぞへることはすまい。といつたのである。

賀茂真淵

遠江國敷智郡濱松莊伊場村に生れた。岡部氏。濱松驛の本陣梅谷甚三郎の婿養子となつたが、享保十八年、三十七歳の時に、妻子を残して京都に出て、荷田春滿の門に入つた。春滿の歿後、一旦歸郷し、元文三年に江戸に出て、この間いよゝ國學の研鑽につとめ、延享三年、五十歳の時、田安宗武に召され、名聲とみに高くなつた。明和元年日本橋濱町に住み、その家を縣居あがらと號した。明和六年十月三十日、七十三歳で病歿。その著書は非常に多く、萬葉考、日本紀和歌略註、古事記和歌略註、新學、冠辭考、伊勢物語古意、源氏物語新釋、宇比麻奈備、國意考、歌意考、神樂歌考、催馬樂考などはその最も有名なもので、いづれも賀茂真淵全集に收められてゐる。家集には寛政三年村田春海の撰輯した賀茂翁家集、天明元年樹取魚彦の撰輯した縣居歌文、明和九年加藤美樹が撰輯し、上田秋成が補つて刊

行した縣居歌集の三種がある。

を筑波も遠つあしほもかすむなりねこし山こし春や來ぬらむ

○以下すべて賀茂翁家集から選出。○「春の始の歌」の一首。○を筑波「を」は接頭語で、筑波山のこと。「み吉野」「ま熊野」「を泊瀬」などの類例がある。○遠つあしほ 遠くの葦穂山。筑波山の北につづく山で、「足尾」とも書くけれども、下野國の足尾山とは別である。○ねこし山こし 嶺を越し山を越しといふので、古今集の東歌に「甲斐がねをねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」といふ用例がある。○一本には第三句「かすみけり」結句「春來ぬらしも」となつてゐる。

筑波山も、更に遠くの葦穂山も一面に霞がかつてゐる。今や春が遠くの方から山を越し嶺を越して來たことであらう。といふ歌で、あの筑波や葦穂あたりから、この江戸へ春がおとづれて來たのであらうとの心。筑波や葦穂は江戸からやゝ東には當つてゐるが、まづ北にある山といふべきである。それを極めて漠然と東にある山と考へて、そして春は東から來るといふ思想に基づいて、かやうに歌つたものである。嶺を越え山を越えといふところを「越え」といはないで「越し」といつた爲に、調子が強く、歌柄が大きくなつて、全體としていかにも大江戸の春を歌ふにふさはしい大きい、のんびりした、しかもよく引締まつた調をなしてゐる。

春されば鈴菜花咲く縣見に君來まさむと思ひかけきや

○詞書に「二月の末つ方、櫻の花もやや盛なるころ、伊久米の君のおはしたるに、庭を畑に作れりしが、鈴菜の花の盛に咲きたりければ、詠みて出しける」とある。伊久米の君とは土井伊豫守の夫人である。眞淵は晩年日本橋の濱町に家を作り、その庭を田舎風にしつらへて、縣居と號してゐたのであるが、この歌などはよくその狀を髣髴せしめる。○縣 田舎といふ意。

春になると鈴菜の花の咲く我が家の庭、田舎風に作つたこの庭を、高貴な君が見においでになるであらうと、かねて思ひかけてゐたことであらうか。まことに思ひがけぬ御來來であるとの意。

うらうらとのどけき春の心よりにほひ出でたる山ざくら花

○「花の歌とて」の一首。

「春の心よりにほひ出でたる」といふことは、春の心から美しく咲き出でたといふことで、即ち春といふものゝ心をよくあらはしてゐるやうに咲き出たといふことである。この歌は有名な歌であるけれども、觀念的なものであつて、歌としては必ずしもすぐれたものではない。

橋の島の宮居のあととめて鳴くは昔のほととぎすかも

○「故郷郭公」といふ題で、この場合の故郷といふのはその昔立派な宮殿があつて今は廢址となつてゐる所といふやうな意味である。○橋の島の宮居 大和國十市郡にあつて、天武天皇の皇子なる日並知皇子のお住みになつた所。宮居とは宮殿のある所の意。

橋の島の宮の跡を尋ねて來て鳴くのは、昔の時鳥であらうか。といふのは、昔の日並知皇子の御在世當時の事を知つてゐる時鳥が、昔の事をなつかしく思ひ出して、その爲にわざ／＼こゝに來て、あのやうに鳴いてゐるのであらうか。といふ心である。柿本人麿以下の日並知皇子の薨去を悼む歌が萬葉集の卷二に出てゐるので、作者はそれを念頭に置いてゐるのである。

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむ浦をむかし見しかな

遠江の濱名の橋は、真淵の郷里なる濱松から程近いところにある。この歌は江戸に出てから後、その濱名の橋のあたりで秋の月を眺めたことを、なつかしく思ひ出して詠じたものである。

播磨路や夕霧はれて久方の月おし照れり印南野の原

○同じく「月の歌とて」○久方の 月にかかる枕詞。○印南野 播磨國の加古川の東南なる平野で、萬葉集、卷二、中大兄皇子の御歌に「香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南國原」などとあつて、古くから歌枕として知られてゐる。

調子の高い、歌柄の大きい歌である。萬葉集、卷七に「家にしてわれは戀ひむな印南野の淺茅が上に照りし月夜を」といふ歌がある。必ずしも直接關係があるといふわけではなからうが、参考までに掲げておく。

見渡せばほのへきりあふ櫻田へ雁鳴きわたる秋の夕ぐれ

○題「雁を」○ほのへきりあふ 「穂の上霧り合ふ」であつて、穂の上に霧が立ちこめてゐること。○櫻田 櫻といふ所の田であつて、櫻は尾張國愛知郡作良のこと。今の笠寺の北の所。

「見渡せば」と始めて「秋の夕ぐれ」と收めたところ、いかにもよく纏まつてゐるといふ感じがする。「櫻田へ雁鳴きわたる」といつたので、運動的情景がよくあらはれてゐる。殊に「へ」といふ語に注意すべきである。全體の格調は雄大である。萬葉集、卷三、高市黑人「櫻田へ鶴鳴きわたるあゆち瀉潮干にけらし鶴鳴きわたる」とあるに基づいたものである。

こほろぎの鳴くや縣のわが宿に月かけ清しとふ人もがな

○詞書、九月十三日夜縣居にて。○鳴くや 「や」は詠歌の助詞で「鳴く縣の宿」とつづく。この「や」の用法は古今集、戀一、よみ人しらず「夕づく夜さすや阿べの松の葉のいつともわかぬ戀もするかな」新古今集、秋下、攝政太政大臣(良經)「きりぎりす鳴くや霜夜のさむしるに衣かたしきひとりかもねむ」などにおけると同様である。○人もがな 「がな」は願望の意を示す助詞。

こほろぎの鳴く我が縣居に、今宵は十三夜の月がまことに清く美しく照つてゐる。自分だけでこんないゝ景色を眺めるのは惜しい。訪ねてくれる人があればいゝ。共にこの景色を眺め明かしたいから。

にぼどりの葛飾早稻の新しぼりくみつつをれば月かたぶきぬ

○同じく「九月十三日夜縣居にて」○にぼどりの 鳩といふ鳥は水をよく潜るから、かづく(潜ること)といふことから「葛飾」にかけられる枕詞として用ひられる。萬葉集、卷十四「にぼどりの葛飾早稻をにへすともそのかなしきをとに立てめやも」といふ用例がある。○葛飾 古くは勝鹿とも書き、下總國に屬してゐたが、現今では東京府と千葉縣とに跨つて郡名になつてゐる。○新しぼり 新しく醸造した酒。○くみつつをれば 一本「くみつつをれば」とある。

葛飾の早稻で造つた新しい酒を酌んで月を眺めてゐると、いつか夜が更けて月が傾いたことである。との意。やはり雄大な感じがある。なほ同じく「九月十三日夜縣居にて」として三首、

秋の夜のほがらほがらと天の原照る月かけに雁鳴きわたる

縣居の茅生の露原かきわけて月見に來つる都びとかも

こほろぎのまち喜べる長月の清き月夜はふけずもあらなむ

いづれも萬葉調で、眞淵の特色を最もよく示してゐる。

今もかも小島が崎こじまがさきににほふらむ君に似るてふ山吹の花

○戀歌であつて「春の暮に人を思ふ」といふ題詠。○小島が崎 山城國宇治川の中にある山吹の瀬のこもこもいひ、大和國高市郡飛鳥の橋の島のことともいふ。

古今集の「今もかも咲きにほふらむ橋の小島の崎の山吹の花」と萬葉集「妹に似る草と見しよりわがしめし野べの山吹たれか手折りし」との二首に基づいて作られた歌で、その萬葉の歌に山吹のことを「妹に似る草」といつてゐるから「妹」を「君」にかへて「君に似るてふ山吹の花」といひ、そして古今の歌によつて、「今もかも小島が崎ににほふらむ」といつたのである。即ち古歌にもあるやうに、愛する女に似てゐるといふ山吹の花が、今もやはり小島が崎に咲き匂つてゐることであらうか、といふことを歌つて、山吹の花を女に擬し、春も暮れてゆかうとするのに、あの女は今もやはり美しい姿でゐることであらうか、といふ意味をあらはしたものである。古歌を巧妙に活用してゐるところが見どころである。

世の中のはかなき時はほととぎす鳴く音もことにうらぶれにけり

○哀傷の歌で詞書に「卯月のはじめつ方茂子の天のみまかりつと聞きて花などおくりけるにさしたる歌」とある。茂子は筑波子ともいつて、眞淵の門人で、いはゆる縣門の三才女の一人。その夫は土岐新左衛門頼意。この歌は頼意の死んだ時の眞淵の甲問の歌である。

人が死んだと聞いて、世の中をはかないものと思つてゐる時に、折しも時鳥が鳴くが、その鳴く聲もとりわけ心わ

びしいものゝやうに聞えるとの意。「世の中のはかなき時は」といふ大まかないひかたも、時鳥の聲がうれはしげであるといふ斷定的ないひかたも、痛切な哀悼の意をあらはすにふさはしい。

何となく人の心もみだるるはもろき木の葉のつひの夕風

○「ある人のいたみに夕落葉を人に代りて」

何といふことなく人の心もそれ共みだれるものは、もろい木の葉が夕風に吹かれてつひに散つてゆく様である。といふいひかたであるが、換言すれば、木の葉が夕風に吹かれて、つひに散りみだれてしまふのを見ると、何といふ譯もなく人の心もそれと同じくみだれて物悲しくなる。といふことで、落葉を詠じてかつ人の死を悼む心をおのづからあらはしてゐる。

信濃なる須賀の荒野を飛ぶ鷺のつばさもたわに吹くあらしかな

○題「嵐」○須賀 信濃國、今の松本市の南西にあたる地方。○たわに 揚む程までに。

眞淵の高古雄大な調を代表する歌としてよく引用される歌である。

沖つ風吹きにけらしな武藏の海みともせきまでいづて舟よる

○題「船」○みと 水門。港のこと。○せき 狭き。○いづて舟 五手船で、楫を二丁立てるのを一手といふから十丁楫の船で非常に早い船をいふのであるといひ、又一説には伊豆出船で、伊豆國で造られた船といふ義であるともいふ。

沖の風が強く吹いたことであらう。いづて舟が武藏の海を漕ぎ返つて、港も狭くなる程まで寄り集つてくることである。といふ歌。雄渾の調。

ふるさとにとまりもはてず天雲のゆきかひてのみ世をば經ぬべし

○詞書「ふるさとにあからさまに歸らむとするを終にはいかに定めむとするぞといふ人に」○第二句一本「さまりもはてじ」
暫くの間と思つて故郷に歸らうとしたところが、ある人が、あなたは江戸にゐて、故郷の濱松へ時折お歸りになるが、結局はどちらに永住なさるつもりですかといふやうに尋ねたので、それに對して、どちらにも永住はしないで、あちらこちらに往來するであらうと答へた歌である。今かうして故郷に歸るけれども、そのまゝ故郷に留つてはしまはないで、ちやうど大空を往來する雲のやうに、江戸との間を行つたり歸つたりしてばかりゐて世を經てしまふであらうとの意。即興の歌でありながら、おのづから眞淵の本意を示してゐるものでもあらう。

百づたふ五十のうまやになる鈴のおとづれをだに絶えずせよ君

○詞書「難波へ行く人を送る」○百づたふ「い」「いそ」「やそ」などにかかる枕詞。○五十のうまや「うまや」は驛、宿場のこと。五十の驛とは即ち東海道五十三次のことである。

上三句は序で、「鈴の」から「音」にかゝるのであるが、旅立つ人、しかも江戸から難波へ行く人を送る場合であるから、極めてふさはしい序である。歌の意味は、難波へ行つてからも音信だけでも絶えずしてくれよといふこと。

飛彈たくみほめてつくれる眞木柱立てし心は動かざらまし

○詞書に「いでみをいにしへさまに造りけるに九月二十六日人々つどひてほぎ歌よみけるによめる、實暦五年の秋なり」とあつて、歌の左に更に曰く「これは今日つごへるはわがいにしへの書の學の道つたふる人々なればかくいへり」と。「いでみ」は客を應接する座敷。「ほぎ歌」は祝賀の歌。實暦五年は眞淵五十九歳。○飛彈たくみ たくみ即ち工匠はその昔飛彈國から多く出たので飛彈たくみといふ。○ほめてつくれる 祝の言を稱へて造つたといふことで、萬葉集、卷二十「まけ柱はめて造れる殿の」といませ母とじ面がはりせずといふ用例がある。「まけ柱」は眞木柱に同じ。

自分は家を古代風に造つたのであるが、工匠たちが祝の言を稱へ、眞心こめて造つてくれた家のこの眞木の柱は、永久にしつかりと立つて、動くことはないであらうといふ歌で、家が永久に動搖することがないことを祝ひ、かつこの家に集つて古學の研鑽するところの自分たちの志もいつまでも變ることがないであらうといふ心持をも含めて歌つたものである。

田安宗武

徳川八代將軍吉宗の第二子。正徳五年に生れ、享保十六年に田安門内に邸宅を賜はり、田安家と呼ばれ、いはゆる御三卿の一である。はじめ荷田在滿を召し、後に賀茂眞淵を聘して國學を修め、萬葉集を愛して多く萬葉風の歌をよんだ。國歌八論餘言・歌體約言・摘要冠辭考・樂曲考・服飾管見などの著がある。家集を天降言といひ、薨後その臣なる藤原直臣の編纂したものである。明和八年六月四日、五十七歳で薨去。

みだれ咲くちぐさの花の色まして歸るさ惜しき野路の夕ばえ

○以下三首は享保から寛延まで即ち宗武十七八歳から三十五六歳までの作の中である。○この歌は「平尾てふ所にて夕照をよめる」とある。平尾は今の麻布の廣尾である。

野路を歸つてくると、道のほとりに色々の花が咲きみだれてゐるが、それが夕日に照り映えて、色が一層美しく見えるので、歸りの道の名残がまことに惜しいことであるとの意。

櫻花さくと聞きつつ行き見て見ればたゞ白雲の峰に棚引く

○詞書「武藏の國飛鳥山といふ所に、仰せごとにて櫻あまた植ゑさせ給ひぬれば、春ごとにいみじき盛なれば、遠つ浦の海人、深き山の賤夫だに雲をわけ、波を凌ぎてつゞふめるに、蘆垣の間近き程にて、今までおそなはりたることのいと本意なくて、本年はと思ひて、春雨の晴間求めてまかり侍りき」

飛鳥山に櫻が植ゑられたのは元文の初年で、將軍吉宗の命によるものであつた。詞書に「仰せごとにて」とあるのは即ち吉宗の仰せでといふことである。この歌はそれから數年後のものであらう。程遠からぬ所でありながら、行つて見ないことを残念に思つて、ある年の春、行つて見たのである。櫻の花が咲いてみると聞いて、行つて見ると、櫻の花といふよりも、たゞもう白い雲が峰に棚引いてゐるのである。といふので、ありのまゝで、しかも大まかで、こせこせした所のないのが、いかにも宗武らしい。

榮えゆく色こそしるし竹の下に千代をこめたる鶴の毛衣

○詞書「六十の賀し侍りける人のもとへ、竹たてたる盃の臺に小袖をそへて遣すとて」

年賀の歌として、特にすぐれてゐるわけではないが、第二句「色こそ」といつて「しるけれ」といはずに「しるし」と結んでしまつた所が面白い。

いぶかしなやや春立ちしに女郎花咲きぬと思ふは菜の花ぞこれ

○以下十首享保から寶曆の頃まで、宗武十七八歳から四十八九歳頃までの歌。○この歌は詞書に「目黒さいふ所へ行き侍りに歸さの道のはざりに菜の花のいみじく咲けるを見てよめる」とある。

やつと春になつたばかりであるのに、秋咲く筈の女郎花が咲いてゐるのは不思議だ、と思つてよく見ると、これは女郎花ではなくて、菜の花であつたとの意。「いぶかしな」といふ起句、字餘り、「菜の花ぞこれ」といふ結句など、すべてたどくしいひかたで、しかも即興的の趣、そして突嗟の場合の驚きと喜びとをよくあらはしてゐる。

惜しむべきことにしあれど暑き日は秋立つ程を待たれつるかも

○「夏の歌」

日の過ぎてゆくことは惜しまねばならぬことではあるけれども、暑い日は暑さに堪へられずして、秋になる日が待たれることであるとの意。「程を待たれつるかも」は正格でない。正しくいふならば「程の待たれつるかも」或は「程を」といつたら「待ちにけるかも」とでも結ばなければならぬところであるにも拘らず、そんな事に拘泥せず平氣で破格を使つてゐるところにも、宗武の面目がよくあらはれてゐる。

人皆は星の契とあぢきなめど天と共にし終へむ契ぞ

○題「七夕契久」○あぢきなめど 形容詞「あぢきなし」を動詞形に活用させて「あぢきなむ」としたのである。「はかなし」「はかなむ」の関係と同じである。

人皆は星の契、牽牛織女二星が相逢ふことは、一年にたゞ一度、七月七日の夜だけであるといふので、まことにあぢきなものとやうに思ふけれども、考へて見れば、天といふものゝあらん限りつゞくべき契であるから、なかく頼もしいものであるとの意で、趣向も面白く、「あぢきなめど」といふ言葉も面白い。

永き代の橋を行きかふ諸人はおのつからにや姿ゆたけき

○七月十五日の作。○永き代の橋 永代橋。隅田川の最下流に架けられてある橋。

下句の意味は、わざとさうするのではなく、自然と姿が悠々と、のんびりと、楽しさうに見えるのであらうとの意。勿論、永代といふ橋の名がめでたい名であるといふことを下に思つてゐるのである。「諸人」といふ言葉も作者が將軍の子で、田安侯といふ身分の人であるから、ふさはしい。

洲崎邊に漕ぎ出でて見れば安房の山の雲居なしつつ遙けく見ゆも

○同上。○洲崎 隅田川の川口の東の海岸。○雲居なしつつ 雲居は天空のことであるが、ここでは「雲居なす」といつてゐるから、雲のこと。即ち安房の山が雲のやうに遙かに見えるといふこと。

全體が大きい感じである。「安房の山の」といふ悠然たる調を「遙けく見ゆも」とひきしまつた調で受けて止めたところは凡手でない。上に「見れば」といつて下に「見ゆも」と收めたのは稚拙であるけれども、この歌などでは却つて應揚で上品に響いてゐる。

眞帆ひきてよせくる舟に月照れり楽しくぞあらむその舟人は

○七月、加島くさしまでの作。○眞帆 一杯に正しくかけた帆。

沖の方から、帆を一杯に張りあげて歸つてくる舟に月がはつきりと照つてゐる。あの舟の舟人はさぞ楽しいことであらう。といふ歌で、夕月夜の海を歸つてくる舟を見て、舟人たちは楽しいであらうと思ひやりつゝ、うつとりとそ
の舟を眺めて立つてゐる宗武の姿が想見せられる。歌柄も大きい。宗武の代表作の一である。
ちはやぶる神寶ちふ玉まきの太刀のさやけき今日の月かも

○八月十五夜の歌で「夕ぐれになるまにまに雲晴れていとさやけき月のさし出でしを見て」との詞がある。○ちはやぶる 神にかかる枕詞。○ちふ さいふ。○玉まき 玉鏝。玉で飾をつけた。○初句から「太刀の」までは「鞘」といふことから「さやけき」にかかる序である。

一首の意味は「さやけき今日の月かも」といふだけで、要するに十五夜の月のさやけきを讚美したものであるが、序がいかに面白。

夕づく日はや隠ろひて旅衣ころもて寒く秋風ぞ吹く

○「旅の心を」○夕づく日 夕日に同じ。

夕日が早隠れて、夜になつて、旅衣の袖に寒く秋風が吹くとの意。すなほないひかたである。いかにも歌として整つてゐるといふ感じがする。

酒のみて見ればこそあれこのゆふべ雪ふみわけて行きかふ人は

○詞書雪のいたう降り積りぬるゆふべ酒のみつつ庭のさま見侍りけるによめりける」とある。

酒を飲みつゝ、この庭に降り積る雪の景色を見るからこそ、かくも楽しいのである。かうした夕暮に、雪を踏みわけて行つたり來たりする人は、どんなにか難儀することであらう。といふのである。厚い薄團の上に坐り、脇息にでももたれて、酒を飲みながらの雪見といふ何の不足もない身分であつて、しかもその身分に誇りを感じるといふのでなくて、雪の中を出て歩かねばならない人の上を思ひやる宗武の心がゆかしい。

學ばでもあるべくあらば生れながら聖ひがしにてませごそれ猶し學ぶ

○「學ばざる人を憂へてよめる」○ませど「あれど」の敬語法。○猶し「し」は意味を強める爲の助詞。學ばないでもいふならば、それは生れながらに聖人であるといふわけにせうけれども、しかし聖人でもやはり、いやが上にも學ぶべきである。まして凡人たるもの、學ばないでよからうか、といふ教訓的の歌。

うちなびく春きたれるか久方の天の香具山かすみそめたる

○以下六首は實曆年中、無川百首の題によつてよんだ百首の中。○この歌は「立春」といふ題である。○うちなびく春にかる枕詞。○久方の天にかかる枕詞。

意味は平明である。しつかりした調子で、しかも枕詞を二個用ひて、悠然と歌つてゐる。

春雨は音しづけしも妹が家にい行き語らひこの日くらさむ

○題「春雨」○いき「い」は接頭語。高古の調で、のんびりとした感じである。

ほととぎす妻をとひつつ血あゆまで鳴くなる聲を聞けば悲しも

○題「杜鵑」○あゆ血や汗などのしたたること。但し「あゆ」は下二段活用の動詞であるから「あゆるまで」といふのが正格である。

時鳥が妻を呼び求めて血の流れ出るほどまでに鳴く、その哀切な聲を聞くと、まことに悲しいことであるとの意。「あゆるまで」といふところを「あゆまで」としてゐるなどは無難作である。

武藏野を人は廣しとふわれはただ尾花わけ過ぐる道とし思ひき

○題「薄」

武藏野を人はたゞ漫然と廣いといふ。けれども自分は實際に行つて見て、一面に尾花の生ふる中を分けて過ぎる道であると思つた。一向に廣いとは思はなかつた。といふので、勿論廣いではあるが、かういつた趣向が奇抜である。

人皆は秋を惜しめりその心空にかよひてしぐれけむかも

○題「時雨」

誰でも人は秋の過ぎ去るのを惜しんでゐる。その心が空に通じて、ちやうど悲しげに涙を流すやうに、時雨が降つてきたのであらうか。といふ意味で、純然たる萬葉調である。

我はもやふみをし持たぬ旅人か逢坂山を越えがてにする

○題「不逢戀」○ふみ關所を通行する爲の手形。過所ともいふ。

自分は手形を持たない旅人であるのだらうか、逢坂山の關を越えることができないでゐる。といふので、換言すれば、手形は持つてゐるのに、なぜ逢坂の關を越えることができないのであらう。といふこと。逢坂山を越えるといふのは、戀人に逢ふことの意味であるから、一首の根本は、なぜ逢ふことができないのだらうといふことである。

いよよ清くなりにしといひし象川は今はいかならむ見まほしきかも

○題「河」○象川大和國吉野郡にある。

萬葉集、卷三、大伴旅人の「昔見し象の小川を今見ればいよよさやけくなりけるかも」といふ歌に基づいたもの

で、いよ／＼清くさやけくなつたと昔の人のいつた象川は、今はどんな様子であらう、行つて見たいものであるとの意。

いにしへの慕はしきかもかづらせてただに見むかもこれの柳を

○「園柳を」 ○かづらせて「かづらす」は「かづらく」といふのとも同じで、髪かみにする事。髪は頭髮の飾りをいふ。

上古には柳の葉などをそのまま頭の飾りにしたので、たとへば萬葉集、卷十一「霜がれし冬の柳は見る人の蔭にすべく芽ばえけるかも」などの歌がある。この歌はさうした上古が慕はしいといふ心をよんだもので、柳を蔭にした古の世を慕はしく思ひながら、今はこの柳を蔭にはしないで、たゞそのまゝに見ることだらうか。と歌つたのである。二句切で四句切で殊に結句が「これの柳を」となつてゐるので、全體の調子が高く強い。

かく來てはめづらしみ聞けごこの波の夜な夜なひびく蟹の伏屋は

○「佃島にいさける頃」といふ詞書がある。佃島は隅田川の川口、築地の對岸にある島。 ○伏屋 賤しい小さい家、

かうしてたま／＼來ては、波の音を珍しいと思つて聞けけれども、この波の音が毎夜響いてゐる漁人の家では、漁人たちは珍しいとも思ふまいとの意。自分は時たま來たので面白く聞けけれども、始終この波の音を聞いてゐる人は面白くもないだらう。一體どんな心持で聞くことだらう。と漁人の心を思ひやるやうによんでゐる。結句「蟹の伏屋は」といつて、その後をいひ残したところに深い趣がある。

河津美樹

宇万伎とも書く。幕府大番の騎士で、江戸の淺草に住んでゐたが、公用で難波に勤番したこともあつた。賀茂真淵の門に入り、魚彦、春海、千蔭と合せて縣門の四天王と呼ばれた。家集を諍の舎歌集といひ、門人なる上田秋成の編輯である。安永六年、五十七歳で歿した。

鈴鹿河八十瀬こえぬる浪の上にゆくすゑ遠く立つ霞かな

○詞書「古道が母の八十賀に河のべの春こいふ題をわかつてよめとありければ」○古道は小野古道、長谷川謙益ともいふ人で、やはり真淵の門人である。

歌の表面は、鈴鹿河の多くの瀬を越えては流れてゆく浪の上に、ゆくすゑはるばると霞が立ちこめてゐる、といふことで、「八十瀬こえぬる」といふのは勿論八十歳を越えたといふ意味で、古道の母の八十の賀を祝ふ心である。ゆくすゑ遠く霞がこめてゐるこいふのは、霞の奥には何があるかわからず、それがどこまでつゞいてゐるのか知れないので、この人がこの後いつまで長生するか、限りも知れぬほどの長壽を保つてあらうことを祝福するのである。河は必ずしも鈴鹿河でなくてもいゝわけであるが、特に鈴鹿河といつたのは、古歌に「鈴鹿河八十瀬」とつゞけたものが多いからである。参考までにその二三をあげると、萬葉集、卷十二「鈴鹿河八十瀬わたりてたが故か夜こえにこえむ妻もあらなくに」源氏物語、賢木「ふりすて、今日は行くとも鈴鹿河八十瀬の波に袖はぬれじや」新勅撰集、俊成「ふりそめて幾日になりぬ鈴鹿河八十瀬も知らぬ五月雨のころ」など。

今もかも咲きにほふらむ大和なるこせの春野のつらつら椿

○「春大和國をおもひてよめる歌」○こせ 大和國葛城郡と吉野郡との境にある巨勢山。○つらつら椿 多く生ひつらなつた椿。

萬葉集、卷一、坂門人足「巨勢山のつらつら椿つらつらに見つ思ふな巨勢の春野を」といふ歌に基づいてゐることは明白である。即ちかの有名な巨勢山のつらつら椿は今頃は咲きにほつてゐることであらうかと思ひやつた歌である。初二句は古今集(夏)「今もかも咲きにほふらむ橋の小島の崎の山吹の花」に基づいてゐる。

見せばやにしひて手折りし三輪山のしげきがもとの露にぬれつつ

○「萩が花を折りて人のガリヤル」といふ詞書がある。○三輪山 大和國城上郡にある山。

萩の花を折つて人に贈つたとき添へた歌であるから、歌には萩の花といふことはいつてゐない。三輪山の繁く生ひ茂つた木立の下の露に濡れながら、この萩の花は、是非あなたにお見せしたいと思つて、その爲に骨を折つて一生懸命になつて手折つたものです、といふ意味である。事實は必ずしも三輪山で手折つたのでなくとも、歌の上でさういつて勿論差支ないのである。

武藏野のをぐきを出づる月影を見るまさかりに時雨ふりきぬ

○題「時雨」○をぐき 小峠。「を」は接頭語。「峠」は山の洞穴をいふ。萬葉集、卷十四「武藏野のをぐきがきざし立ち別れいにし背よりせろに遠はなふよ」といふ用例がある。○まさかり 「ま」は接頭語。盛といふことで最中といふやうな意味。

武藏野の中の小高い山の穴から昇るところの月の光を見て賞美してゐる、ちようどその時に、折あしく時雨がふつてきた、といふ歌で、歌としては「を」が近接して重用されてゐることや「見る」といふことばがやゝ適切でないのではないかと思はれるけれども、萬葉集と古今風との融合したものといふやうに感ぜられて、一首の調が捨て難い。

夕あらし吹かぬ都もさゆるかな比良の高嶺にみ雪ふるらし

○題「冬違情」

夕方の強い風も吹かず、極めて静かな都の中も、しんしんと底冷えがして、つめたい空氣である。都の近くの比良の高嶺に恐らくは雪が降つてゐることであらうとの意。調子の高い歌である。

もののふの草むすかばね年ふりて秋風さむしきちかうの原

○江戸から難波へ行く途中のこと「鹽尻の嶺をこえて洗馬てふ所へうつりゆく間は限りもなき大野らになむありけることは昔甲斐と信濃のますらたけをのいくさしたる所にして討たれたる者の塚ども今もありと聞きて」○草むすかばね 續日本紀、聖武天皇の天平勝寶元年四月一日、盧舍那佛の前で宣せられた宣命の中に、大伴佐伯二氏の先祖が歌つた歌として「海行かば みづくかばね 山行かば 草むすかばね 大君の へにこそ死なぬ のごには死なじ」とあり、萬葉集、卷十八、大伴家持の「賀路奥國出金詔書歌」の中に「海行かば みづくかばね 山行かば 草むすかばね 大君の へにこそ死なぬ かへりみはせじ」とあるのに基づき、屍骸が長く捨ておかれて、それに草が生えることをいふ。○きちかうの原 栢原が原であつて、信濃國筑摩郡洗馬の東北にあつて、天文二十三年に武田信玄と小笠原長時と戦つた所。

主君の爲に奮戦して戦死した武士たちの屍には、草が生えたことであらうが、その戦争があつてから今まで、久しい年月がたつて、今は屍などは見る由もなく、この桔梗が原にはたゞ秋風が寒く吹いてゐるばかりである。古戦場に來て昔を思へば、そゞろ戦慄をさへ感ずるのである。

難波どを漕ぎ出でて見れば吾妹子とすみだ河原の月をしぞ思ふ

○「難波にいたりてまた人の家に在りけるほどに月のいと面白かりける夜舟を浮べて」○難波ど「とは水門のことで、ヤがて港といふほどの意。

難波の港を漕ぎ出で見ると、月の景がまことに宜しい。これを見るにつけても、故郷の妻と共に眺める隅田の河原の月はどんなにかと思ふことであるとの意で、「すみだ」は「吾妹と住み」とかゝる。同じやうな用法が賀茂真淵の「ふるさとの野へ見にければ昔わが妹とすみれの花咲きにけり」といふ歌にも見られる。

あづまぢの富士の柴山しばしばも馴れて物思ふわかれするかも

○難波の上田秋成が美樹の東國へ歸るのを送つて「白雲もい行きはばかる富士の嶺のあなたにかへる人のわかれば」と詠んだのに答へた歌である。

富士山のむかふに歸つてゆく人のわかれば、いくら惜しんでも盡きないと秋成がいつたのに對して、東國の路なる富士の柴山といひ、それを序として「しばしば」とつけ、今度ばかりでなく、いつも／＼馴れては別れる時には感慨無量で、名残惜しい別れをすることであるといつたのである。美樹と秋成との交誼を察するに足る。

歌である。

楯取魚彦

本姓伊能。下總國香取郡佐原の人。香取に因んで楯取と稱した。江戸に出て賀茂真淵の門に入り、その縣居の近くの濱町山伏井戸に住んで、家を茅生の庵と稱した。天明二年三月二十三日、六十歳で歿した。安永五六の二年間の詠草を清水濱臣が集めて楯取魚彦家集と題して縣門遺稿に収録したものがあつた。

玉川に玉ちるばかり立つ波を妹がたづくりさらすとぞ見る

○題「布」○玉川 武藏の多摩川である。○たづくり 調布。手で作つた白い布をいふ。てづくり。

萬葉集、卷十四、東歌の「多摩川にさらすてづくりさらさら何ぞこの子のこゝだかなしき」に基づいてゐることは疑ひない。この東歌は多摩川で布を晒してゐる女への愛を歌つたものである。武藏の多摩川はいはゆる六玉川の一で、調布の玉川として有名である。玉川といふ名はもと水の清く美しいことから名づけられたものであらうが、その名がいかに水の清澄な感じを聯想させる。その玉川に立つ波、玉の散るのにも喩へたいほどの美しい白い波、それを、愛する女が白い布を晒すのかと思つて見るといふのである。やはり萬葉集の東歌に「筑波ねに雪かもふるいなをかまかなしき子ろがにぬほさるかも」といふのである。即ち雪の白いのを、女が白い布を乾したのかと見るといふ歌で、この歌などをも恐らくは念頭において作つたのであらう。おのづから「た」の頭韻をなしてゐるところなども面白。

足曳の山の櫻ははしきかも風ふかぬ間ととく咲けるらむ

○「木の花當よりも早しといふ事を」○足曳の「山」にかかる枕詞。 ○はしき 愛らしき。

山の櫻は今年はいつもよりも早く咲いたが、それは春が深くなると、風が吹いてすぐに散らされてしまふので、風の吹かない間に早く咲いておかうと思つて、かやうに咲いたのであらう。可愛いものだ。といふ心。やゝ理におちてゐるといふ弊はあるが、面白い趣向の歌である。

一夜だにありがてなくに二夜すぎ三夜來ぬ君によよとぞ泣かる

○「一夜隔てたる二夜隔てたるなどいふ事を人々詠めるに我は三夜隔てたる」とふ事を」○よよ 泣く聲をいふ。古今六帖（第四）に「君によりよよくくとよよくと音をのみぞ泣くよよくくと」といふ歌がある。

一夜逢はずにゐるだけでも、堪へ難いのに、まして逢はぬ夜が二夜過ぎ、三夜も續けて君が来てくれないので、よよと聲を立て、泣かれるといふので、「よよ」に「四夜」をかけてゐることはいふまでもない。萬葉集、卷三、高市黑人「妹も我も一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる」といふ歌もあるが、それにくらべると、一、二、三、四の並舉があまり目につきすぎるやうである。要するに遊戯的分子の多い歌である。

天とぶや雁が鳴くねは聞くらめど近くある我を知る人ぞなき

○「人を忍びにあひ知りて逢ひ難くありければその家のあたりをまかりありきける折に雁の鳴くを聞きてとふ事を」といふ詞書がある。

空を飛ぶところの雁の鳴く聲は、遠くのものであるが、耳にとめて聞くであらう。けれども、近くにかうしてゐる自分の事を知つてくれる人はない。——自分の思ふ人は、今恐らく空に鳴く雁の聲を聞いたであらうが、自分のこゝ

にかうして來てゐるといふことを知る由もなく、逢ふことができずにゐるこの歎きを知つてはくれまい。——といふ歌である。古今集、戀四「人を忍びにあひ知りて逢ひ難くありければその家のあたりをまかりありきける折に雁の鳴くを聞きてよみて遣しける」といふ詞書で大友黒主の「おもひいでて戀しき時は初雁の鳴きてわたると人知るらめや」といふ歌がある。これに基づいたものであつて、しかも出藍の作といつていゝであらう。

浅茅生の茅生の露はら露しげみ月こそやぞれ茅生の露はら

○「望の夜家にありて」といふ歌。 ○浅茅生 「茅」は「つばな」ともいふ草で、その草原のまだ深くは生ひ茂つてゐないのが浅茅生である。

一面に茅の生ひ茂つてゐるところ、露がおりて、その露が繁くあるために、草の葉末の露ごとに満月の光が美しく宿つてゐる。まことに飽かぬ眺めであるといふので、家を茅生の庵といつてゐたので、これはその庵にあつて、前栽の月の景を楽しんだ歌である。

冬されば千草がうれをおしなびけうちの大野を風ふきわたる

○題「冬の風」 ○うちの大野 大和國宇智郡にある野。

歌の意味は、冬になると、多くの草の葉末を押し靡かせて、宇智の大野一面に風が吹き渡ることであるといふこと。純然たる萬葉調である。

土は裂け水に乾ける夏すぎてけさの朝けの風の寒しも

○題「秋の初風」 ○朝け 朝明け。

「土は裂け水は乾ける」といふのは酷暑のこと。やはり萬葉調である。

秋の野の尾花くず花はぎの花知らえぬ花も今さかりなり

○題「秋の花野」 ○知らえぬ 名も知られぬ。

萬葉集、卷八、山上憶良の旋頭歌に「萩が花尾花くず花なでしこの花、をみなへしまた藤ばかり朝顔の花」とあつて、これを俗に秋の七草といふが、この歌はそれらの中、尾花と葛の花と萩の花とをあげ、そのほか色々の名も知られない草の花までも、すべて今がさかりであると歌つたものである。

芝の野に葛ひくをとめ家のらへこの野づかさ葛ひくをとめ

○「葛をよめる」○のらへ 告げよ。 ○野づかさ 野の中の小高くなつてゐる所。

芝生の野の小高い所で、葛をひいてゐる少女よ、おまへの家はどこであるか、告げ知らせよといふ意。萬葉集、卷七の旋頭歌に「太刀のしり鞘に納野に葛ひく吾妹、眞袖もち着せてむとも夏草刈るも」同、卷十「時鳥鳴く聲聞くや卯の花の咲き散る岡に葛ひくをとめ」(但し結句、原文、田草引嬢嬢)などあるのから「葛ひくをとめ」の句を用ひたのであらう。少女に向つて「家のらへ」といふことは、やはり萬葉集、卷一の卷頭、雄略天皇の御製「かたまもよ、みかたま持ち、ふぐしもよ、みふぐし持ち、この岡に、菜つます兒、家のらへ、名のらさね、そらみつ、やまとの國は、おしなべて、我こそをらし、のりなべて、我こそをれ、我こそは、せとしのらめ、家をも名をも」(略解の訓による)といふのに胚胎してゐるのである。なほ「葛ひくをとめ」といふ第二句を結句に反復してゐる形は、萬葉及びそれ

以前の古調の一である。

天の原ふきすさみける秋風に走る雲あればたゆたふ雲あり

○「雲を」

大空を強く吹き荒れた秋風のために、走る雲もあるし、又ゆらくと棚引いてゐる雲もあるといふので、雑作なく詠んでゐて中々面白い歌である。

しが妻の待つらむ知らにうつせみの世をばかりとやここにこやせる

○「雁を組にのせたるを」 ○しが妻 其が妻又は汝が妻。 ○こやせる 「こやす」とは臥すこと。

雁が羽を抜かれて組の上に載せられてゐるのを詠んだもので、雁にもやはり妻があるであらうと思へば、その妻の待つてゐるであらうことも知らないで、いづれにしても世は假の世であると思ひ諦めてゐるのであらうか、こゝにかうして寝てゐることであるとの意。第四句の「かり」は「假」に「雁」をかけたのである。源實朝の歌に「組といふ物の上に雁をあらぬ様にしておきたるを見て」といふ詞書で「あはれなり雲のよそにゆく雁もかかる姿になりぬと思へば」といふのがある。参考までに掲げておく。

咲く花は八重もこそよき君が爲は一重ごころに仕へ給はぬ

○姫路の君の許に始めて宮仕へに出た人に贈つた歌。 ○八重もこそよき この係結の用法は古いもので、日本書紀、仁徳紀に

「衣こそ二重もよきさよ床を並べむ君はかしこきろかも」萬葉集、卷十一「難波人葦火たく屋のすしたれどおのが妻こそよきめづ

らしき」などの用例があるが、平安朝以後の用法では「八重もこそよけれ」といふやうにするのである。八重と一重とを對照させたのである。咲く花は八重もいゝけれども、主君の爲にはひとへに心をひたすらにして忠實にお仕へなさいとの意。

鶉殿餘野子

鶉殿孟一士寧の妹。紀伊侯に仕へて瀬川と稱し、後に出家して涼月院といつた。賀茂眞淵の門人。天明八年、六十餘歳で歿した。家集に佐保川、涼月遺草がある。

○「旅のやどりに時鳥さく」といふ歌。

目ざめがちな旅の宿に時鳥の聲を聞く。時鳥が鳴く、と思ふと、泣いて別れて来た故郷のことが思はれる。もとより「思ひ寝」であつて、他郷にゐて故郷を戀ひ思ひながら寝てゐるのである。時鳥の聲を聞いては、あれは泣いて別れた故郷のなつかしい人の聲ではないか、と思ふさへ夢であるのか現實であるのか、といふかなり複雑な心持を歌つたものである。旅愁懷郷の歌、情緒纏綿といふところである。

夕月夜ほのめきそめし琴のねを聞くとしもなく更けにけるかな

○「夏の夜琴ひくを聞きて」

第二句「ほのめきそめし」は「夕月夜」を受けて直ちに「琴のね」につづく。夕暮に月がほのかに光りそめて、その時どこかでほのかにゆかしい琴の音が聞えてきた。それを聞くともなく、かといつて月を見るといふでもなく、うつとり

としてゐる間に夜が更けてしまつたとの意。

こすのうちには花吹き入るる春風はつらきものともえこそ恨みね

○題「落花入簾」

春風は花を吹き散らしてしまふものであるから、憎らしいと思ふけれども、小簾の中へ散つた花を吹き入れる時には、却つて風情を添へるので、春風をつれないものと恨むことはできないといふ歌。やゝ理におちてゐる。

ありし世もあふ事かたきははき木のはては行方も知らず惑へる

○「母のおもひに侍る頃」とあつて、歌の左に「こは里におり侍る事のいさたまさかなりしを常に戀ひきこえ給へりし事を思ひ出でていへるなり」と添へてゐる。○ははき木 新古今集、戀一、平定文家歌合に、坂上是則「その原やふせやに生ふる帯木のありとは見えて逢はぬ君かな」古今六帖、第五「その原やふせやに生ふる帯木のありとて行けど逢はぬ君かな」袖中抄、第九「その原やふせやに生ふる帯木のありとは見れど逢はぬ君かな」などあり、源氏物語、帯木の巻にもこれによつて作られた源氏と空蟬の君との贈答の歌がある。信濃國園原の伏屋（布施屋）といふ所に、遠く望むと帯のやうに見えて、近く立寄つて見ると、その形が見えなくなつてしまふといふ木があつたと傳へられる。この歌では「ははき木」に「母」をかけてある。

母の喪に服してゐた時の歌で、左に書き添へられてあるやうに、紀州侯に仕へてゐた爲に、里に下りて母に定省の誠を盡す機会があまりなかつたので、「生前にも逢ふことの容易でなかつた母」といふやうにいつたのである。帯木の歌から聯想されるやうに、これに近づかうとすれば消えて見えなくなる。今母は既に亡く、逢はうとしても逢ひ見る由もなく、自分は頼る所を失つて、はてはどうしていゝのかわからぬやうに迷ふことである。

露ながら伊勢の濱荻折りしきて月見むための旅寝をぞする

○「濱の月を」

萬葉集、卷四、碁檜越の妻の「神風の伊勢の濱荻折りふせて旅寝やすらむ荒き濱べに」といふ歌に基づいてゐる。平明な歌であつて、しかも趣が深い。

油谷倭文子

江戸の京橋弓町に生れた。眞淵の門に學び、寶曆二年七月十八日わづかに二十歳で歿した。家集「文布」があり、その中に歌集「散りのこり」がある。

ことさらに衣はすらじ眞萩原わけゆくからにほへるものを

○題「萩」

古歌に「衣にほはせ旅のしるしに」とか「萩の花すり」とかあつて、昔は萩を衣に摺つたものであり、さういふことを歌つた歌も多いが、自分はずさく衣に萩を摺りつけることはすまい。この一面に咲き亂れた萩の原をわけて行くだけで、萩の色に染まり、萩の香が移るのであるから。

袖の上におほえずおつる涙にもすすろに月はやどりぬるかな

○「ある時よめる」

袖の上に覺えず落ちる涙、それは若い女の感傷的な涙であらう。その涙にもやがて何といふことはなしに月が宿る

といふのは傳統的な考へ方であるけれども、そこにやはり温雅な趣がある。

秋はなだ野べの尾花のほのほのと見ゆるゆふべのさを鹿の聲

○「秋のあはれを思ふ心をよまむとて人もよむに」と訓書がある。

秋は何よりもたゞ野べの尾花がほのほと見える夕暮に鹿の聲の聞えてくるといふ景情を思ひやる。さうい趣が最も深く物のあはれを感じさせる。

君を待つゆふべの霜にむすほはれ招きもあへぬ袖を見せばや

○「枯れたる薄にさして人のがりやる」とあるが、この「人」といふのは、河津美樹と相思の仲であつたといふことであるから、或は美樹のことであるかも知れない。

霜にむすほはれて枯れた薄であるから、薄は風に吹かれて人を招く姿を見せるものであるが、招くこともできない。私もこの夕暮に君を待つてはゐるが、あらはに袖を振つてお招きすることもできないのである、この私の心をお見せしたいものであるとの意。これに對して「人」からの返歌は同じ薄につけて「秋過ぎて心かれゆく花薄招かぬ宿は誰かとふべき」とあつた。即ち枯れてゆく花薄のやうに、君の心は離れていつて、招いてもくれないのであるから、そんな人の家を訪れはすまいとの心。

霜がれの野べとはいへどおもひ草尾花がもとにありと知らずや

○前掲の贈答につづいて「立ちかへりこと草のまだ枯れぬにさしかへて」とある。○おもひ草 女郎花の異名。新古今集、冬、和泉式部「野へ見れば尾花がもとおもひ草かれゆく冬になりぞしにける」なごといふ古歌がある。

霜がれの野べではあつても、尾花の下におもひ草がある——枯れた薄につけた文ではあつても、心には君のことを思つてゐるのである——と知つては下さらないのですかとの意。これに對する返歌は「かれがれの尾花が袖はかくすとも頼まむものか霜の小草」といふので、そんな嘘をいつても、もう頼みにはしないとの心である。

思ふごち浦よりをちの浦づたひ玉藻ひろはむ沖にをれ波

○「相摸國の江の島に詣づとつとめて立出でてけり。ゆほびかなる海のつらを見つつ行くほど世に覺えぬ心地す。」とある。「ゆほびか」とはゆたかに廣々としたこと。

親しい人たちと共に、この浦から更に遠くの浦へと浦づたひに行きながら、美しい藻を拾はうから、波よ、打寄せらるな、沖の方にゐてくれ、といふ歌で、古今集の東歌に「こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざし濡らすな沖にをれ波」(これはもと風俗歌である。「めざし」とは童女のこと。)とあるのによつたもので、情趣のゆたかな歌である。

土岐筑波子

進藤正幹の養女で、土岐頼意の妻となつた。もと茂子といつたが、風俗歌の「筑波山は山しげ山しげきをぞや誰が子も通ふな下に通へわがつまは下に」新古今集、戀一、源重之「筑波山は山しげ山しげけれど思ひ入るには障らざりけり」などの古歌によつて、筑波山としげ山との縁から眞淵が筑波子といふ名をつけたのであるといふ。家集を筑波子家集といふ。この筑波子と前述の餘野子、倭文子とを合せて縣門の三才女といふ。

とはれなばやさしかるべき宿なれど花しにほへば人ぞ待たるる

○「家の花さかりなる頃」○やさし 恥かしいこと。

こんな花が盛に美しく咲いたのだから、誰か来てくれよばいよと思ふが、もし来てくれたならば却つて恥かしい思ひをしなければならぬと思はれるほどむさ苦しい住みであるけれども、やはり花が美しく咲いてゐると、人の訪れが待たれることである。

中垣のあらはなりしも夏くればはひもてかくす夕がほの花

○題「ゆふがほ」

中垣が今までは、見えすいてゐたけれども、夏が来ると、夕顔の蔓が匂ひまみひついて、中を隠して、その上に美しい花が咲いて、一層の趣を添へることである。

わくらばに涼しき風も通はなむさばかり遠き秋ならなくに

○題「みなつき」○わくらばに たまさかに。

六月といへば(太陰曆で)夏の最後の月であるから、やがて秋に近いのである。まだなか／＼暑く凌ぎ難いので、時たまには涼しい風が吹き通つてくれよばいよ。夏ではあるけれども、それほど遠い秋でもないのだから。といつたのである。ちぎに秋になるのだから、もう早く涼しい風が吹いてくれよばいよといふ心持。

わがせこがとき洗ひ衣も縫はなくに萩の葉そよぎ秋風の吹く

○題「秋風」

解いて洗濯した我が夫の着物もまだ縫はないのに、もう萩の葉がそよいで秋風が吹くことであるとの意。古今集に紀貫之の「わがせこが衣はるさめふることに野べの緑ぞ色まさりける」同、よみ人しらす「わがせこがころもの裾を吹

きかへしうらめづらしき秋の初風」などの歌もあるが、これは女の歌だけに實感が出てゐるやうに思はれる。

むすびつと見そむる程もあらなくにはかなく消えし草の上の露

○「いとけなき子のうせし頃」

むすんだと見そめて程もなく消えてしまつた露のはかなさに寄せて、生れて間もなく死んだ子を悲しんだ歌である。

いはけなくいかなるさまにたどりてか死出の山路をひとり越ゆらむ

○前のと同時の作。

死出の山といふのは冥途にあるといふ山で、幼い子がいたいけにもそれを越えてゆくのであらうが、どのやうな様子でたゞ一人越えてゆくことだらうと思ひやる母の心がよくあらはれてゐる。

荷田 蒼生子

荷田春満の姪で、在満の妹である。はじめ名を楓里かほりといつた。家集を「杉のしづ枝」といふ。天明六年に六十五歳で歿した。

來ぬ人をわが思ひ寝の手枕にうたてにほふか風の梅が香

○題「梅薫枕」 ○うたて 甚しいといふやうな意味のところに使ふことは。

待つても來ない人を思ひ慕ひつつ寝る我が手枕のあたりに、あまりとばかり驚かれるほど、風に吹かれて梅の香がにほつてくることであるとの意。新古今集、春下、俊成女「風かよふ寝ざめの袖の花の香にかる枕の春の夜の夢」と

いふのがあつたが、必ずしもそれに基づいてはゐないにしても、やゝ似通つた情趣である。

川原風かよへる宿にをすまきて月まつほごの袂すずしも

○「河邊の家にて夕納涼すまて」 ○をす 小簾。

川原を吹く風が吹きかよつてくるこの宿に、簾をまきあげて月の出るのを待つてゐる今の間の風に吹かれる袂の涼しさを歌つたのである。すなほな歌ひぶりがよい。

秋風のやどるためとは植ゑなくに待ちとりがほの庭のをぎはら

○「秋の風萩を吹く」といふ題を人に代つて作つた歌。

庭に萩を澤山植ゑたけれども、それは必ずしも秋風がそれに宿るやうと思つて植ゑたわけではない。にも拘らず、秋になつて秋風が吹き初めると、庭の萩原はいかにも秋風の吹くのを待ち焦れてゐたといふやうな様子で、すぐに秋風を取つて、そこに物悲しげな秋の音を立てゝゐるといふやうに詠んだのである。萩の葉の音を秋の初風に結びつけて歌ふことは拾遺集、紀貫之「萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるゝはじめなりけれ」そのほか古い歌に少からず例がある。

浅茅生の露にしほれしかひもなく虫のねばかり聞きてかへりき

○「秋の頃ある人の墓に詣でて」

浅茅生の露を踏みわけ、露に濡れ、涙に萎れて墓を尋ねてきた、その甲斐もなく、もとより亡き人に逢ふ由もなく、むなしく墓のあたりに鳴く虫の悲しげな聲だけを聞いて歸つてきたとの心で、その詠みぶりにどこか新しみがあ

る。

別れぬる今日にあふかひもなきたまの影だに見えぬならひ悲しも
○「母君のみまかり給ひて一めぐりになり給へる日よみて手向け奉りぬ」とある首の中の一節。
母の一周忌である。別れた去年の今日にまためぐりあつても、その甲斐もなく、亡き魂の影さへ目に見えない。これが人の世の習ひであるとは知つてゐても、その習ひがひし／＼と身にしみて悲しいことであるといふ歌で、第二句の字餘りなども注意すべく、「なき」といふ掛詞の用法は必ずしも清新な味があるわけではなく、全體がやゝ觀念風に傾いてゐるといふ難は免れないであらうけれども、それでも真情の掬すべきものがある。

梶 女

元祿寶永の頃の人で、祇園の邊の茶屋女であつたが、和歌をよくし、その歌を集めたものを「梶の葉」といふ。次々にあげる二女のと合せて「祇園三女歌集」として傳へられてゐる。歌としては必ずしもすぐれたものではないが、その人の異色あるが故に、こゝにあげようと思ふ。

こひこひてまた一年もくれにけり涙のこほり明日やとけなん

○「十四になりける年、歳暮戀といふことを人のよませ侍りければ」とあるから、十四歳の時の作である。

歌はあまりよくはないが、この年が暮れて明日になれば春になるから、春風で氷が解けるやうに、涙の氷も解けて、嬉しいことがあるであらうと歌つたことは、古今集の貫之「袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」二條后「雪のうちには春は來にけり鶯のこほれる涙今やとくらむ」などを知つてゐたであらうと思はせる

點に興味がある。

わが袖のにはひもゆかし君がため折りつる梅の名残と思へば

○「人の許へ梅の花を折りてつかはすとて」

意味は平明である。いはゆる風流の心である。

あふことははかなき春の夢路かなやがてうつろふ花のおもかげ

○題「逢夢戀」

ある夜の夢の逢ふ瀬を歌つたばかりでなく、小野小町の「花の色はうつりにけりないたづらにわが身にふるながめせしまに」も同じやうに、忽ちにして容色の衰へて行くことをも歎いてゐるのである。

よひよひの面影ながら待ち出でむあづまのはての山の端の月

○東國から京に上つた人がやがてまた東國へ歸るさいふので「忘れじな神の御園の秋の月われはあづまのはてに住むとも」と詠んだのに對する返歌である。

東國の人といふのは恐らくは江戸の男であらう。その歌の「神の御園」といふのは祇園神社のことである。東國に歸り住んでも、祇園の月は長く忘れまいといつたのである。返歌は、東の空遠く山の端から出る月は、今まで逢つた宵ことの君の面影をさながらに偲ばせて、この後も宵ごとに出るであらう。それを私は君の形見として待ち焦れては見ることであらうとの意。

ひとこゑは思ひなしかとながめやる雲のいつこそ山ほととぎす

○「ほととぎすを聞きて」

一聲鳴いたけれども、或はそれは思ひなしで、鳴いたと聞えたばかりであつたのだらうかと思つて、雲を眺めやるが、いつたい今の時鳥は雲のどこにゐて鳴いたのであらうといふ歌。時鳥の歌は古來非常に多いが、これなどは中々いゝ歌である。

百合女

幼にして梶女に養はれ、やはり祇園の茶屋女であつた。家集を「小百合葉」といふ。

見ればあかね花の色香にたぐひなき身のうきほども思ひ忘れて

○題「見花忘恥」

身の憂いことをも忘れて、花を飽かず眺めるといふのは、單に言葉ばかりでなく、恐らくは實感に基づいてゐるのであらう。

夕波のたちもかへらて涼しさのここをせにせむ河づらの里

○題「水邊納涼」

○ここをせにせむ ことを「暫しい所さしやうといふ程の意味。西行法師の「聞かずともここをせにせむ時鳥山田の原の松の村立」といふ用例がある。

「夕波の」は「たちかへる」とかゝる。夕方になつたけれども、家へは歸らないで、この河邊の里を一番涼しい所とし

て、こゝになほ涼んで行かうとの意。

よもすがら起きゐてともに賤の女がうつやころもの淺茅生の里

○題「掛衣」

夜どほし起きてゐて、賤の女が相共に衣を打つ。「衣」の縁語として「麻」とかゝり、それから續けて「淺茅生」といふ。

うきながらいつまでかくは世の中にすみの衣の身をもかへなで

○「世をうしと思ふ頃」

憂い身でありながら、いつまでかうして世の中に住んでゐるのであらう。墨染の衣に身をかへることもしないで。との意。「住み」と「墨」をかけてある。

町女

百合女が幕臣徳山某と相許し、生んだのが町女である。町女は池野大雅に嫁し、玉瀾と號し、書をよくし、歌をも詠んだ。歌集「白芙蓉」がある。天明四年九月二十八日、七十八歳で歿した。

あやなくも春は過ぎぬる花の枝を見せばや人にかたみなりとて

○題「三月盡」

○あやなく 物の譯もわからず、道理もなく、といふ意味から、致し方もなく、といふ意味にも用ひる。

惜しいと思つても、せん方もなく春は過ぎていつてしまつた。せめて春の形見であるといつて、花の散つてしまつ

た枝でも、人に見せたいものである。

夏の夜の浅澤沼のみなそこに影もみだれて螢とびかふ

○題「螢」

浅い沼の水底に螢の影のみだれ飛び交ふ光の明滅がうつるところを詠んだものである。

本居宣長

伊勢の松坂の人。通稱富之助、後に彌四郎といひ、健藏と改め、春庵(舜庵)ともいつた。鈴屋と號した。商人の家に生れたが、幼少の頃から學に志し、二十歳の時、法幢和尚に始めて和歌の添削を乞ふ。はじめ今井田氏の養子となつたが、間もなく養家を去り、母のすすめに従つて醫師にならうとして、二十三歳の春、上京し、堀景山について儒學を學び、武川幸順について醫術を修得した。又、冷泉爲村の門人なる森河章尹に和歌を學んだ。三十四歳の時、賀茂真淵が松坂に來た際に面會し、やがてその門に入る。その後研究を積んで、つひに國學の大家となり、古事記傳の如き大著を完成した。歌論はその著、石上私淑言、排蘆小船その他隨筆などに散見してゐる。歌の集を鈴屋集といひ、歌は近調、古風と分けて、前者は新古今風を主として古今あたりの風を加味したもの、後者は真淵の風を受けついで萬葉風の古體である。鈴屋集のほか自撰歌があり、玉鐙百首がある。享和元年七十二歳で歿した。

朝さらず來鳴けかきつの梅が枝に聞きのよろしき鶯のこゑ

○題「鶯」○かきつ 垣内。○以下すべて鈴屋集より抄出。

毎朝來て鳴け。垣根の内なる梅の枝に。鶯よ。その聲は聞くにまことにいい聲である。といふ歌で、いはゆる古風の歌である。

な散りそね風は吹くとも櫻花ありて明日來む人も見るがに

○題「櫻花」○がに やうに。爲に。

櫻の花よ。そのまま咲いてゐて明日來る人が見ることのできるやうに、たとひ風は吹かうとも、決して散るではなうぞとの意。これも古風の歌。

風かよふさ枝にすがる影見えて螢もなびく庭の吳竹

○題「竹裡螢」

庭に一村の吳竹がある。その中に螢がゐる。風が吹きかよふ。風に吹かれると、螢は吹き落されまいとして竹の枝にすがりつく。そして光つたり消えたりするので、その影がよく見える。そんなふうにして風が吹いてくると、螢のとまつてゐるままで竹が靡くといふ景をよんだもの。これはいはゆる近調の歌であるが、なかなか面白いところを歌つてゐる。

さす竹の大宮人し駒なべて駒むかへにと逢坂のぼる

○題「駒迎」○さす竹の 宮にかかる枕詞。○駒むかへ 昔八月十六日に行はれた公事に駒牽といふことがあつた。信濃國か

ら馬を献じて、天皇南殿に出御あつてこれを見給ふ儀である。その時ひいてくる胸を逢坂山まで迎へに行くことを駒迎といつたのである。

六一

大宮人たちが馬を並べて(打揃つて馬に乗つて)駒迎のために逢坂山を登るとの意で、古風のいい歌である。

浅茅生やたが秋風を身にしめてひとり夜寒の衣うつらむ

○題「掃衣」

浅茅の原で今宵あたりは誰が秋風を身にしみじみと感じながら、一人寒い夜に衣を打つことであらうとの意。

折しもあれ月もいまはのあけがたにもみぢ葉さそふ峰の木枯

○題「曉落葉」

月も今はもう沈まうとする夜明け方の空に、ちようどその時、山の上に木枯が荒く吹いて紅葉を吹き散らしてしまふ。まことにあはれ深い有様である。

加藤千蔭

枝直の子で橋千蔭ともいふ。通稱は要女、後に又左衛門といふ。字は常世麿(徳與麿)といふ。朧国又は芳宜園と號した。父の枝直は江戸の町興力で、歌人でもあつたが、千蔭も父の職をついで興力をしてゐた。賀茂眞淵について歌びを學び、村田春海と並んで江戸における縣門の双壁であつた。萬葉集略解の著がある。家集を「うけらが花」とい

ふ。文化五年に七十四歳で歿した。

あまの子が磯菜つむなる眞袖より八十島かけて霞こめけり

○題「海邊霞」

海邊では漁人の子が磯菜を摘んでゐる。波がひたひたと寄せて来て、その子らの袖が濡れる。さうした景色の海邊から、沖の方遙かに澤山の島々のあるあたりにまでかけて霞がこめてゐるといふのである。「眞袖より」といふひ方は斬新である。

おのづから夜の間の花の露おちて芝生にかをる春のあけほの

○題「閑中春曙」

夜の間花に宿つた露が芝生に落ちて、春の曙はその芝生に露が花の香を含んでゐるので、えならぬ香の漂ふやうに思はれて、いい景色であるとの意。「おのづから」といふ言葉が微妙に使はれてゐる。

隅田川みのきてくださ筏士にかすむあしたの雨をこそ知れ

○題「霞中春雨」

一面にかすみわたつてふる朝の春雨は、雨がふつてゐるとも見えないが、隅田川を筏を着て筏を下す人が見えるので、その筏を着てゐることによつて雨のふつてゐることを知るのであるとの意。どことなく作爲の跡があるやうで

白くない所もあるが、千蔭の歌としては有名である。

をつくばの山かき曇り葛飾かつしかや苗代小田に小雨ふりきぬ

○題「雨中苗代」

筑波山のあたりは一面に曇つてゐると見る間に、葛飾の苗代田に小雨がふつてきたといふだけのこと、意味は何でもないが、調子で持つてゐる歌である。

隅田川堤に立ちて船まてば水上とほく鳴くほととぎす

○題「郭公」

意味は單明であるが、調子がよく、どことなく餘情があるやうな歌で、千蔭の歌として有名なものであるのみならず、その歌風を最もよく代表するものの一である。

おきそむるみぎりの露に心せよ伴のみやつこ春ならずとも

○題「新秋露」 ○みぎり 砌。軒下などの敷石のあるところ。 ○伴のみやつこ 伴の御奴。主殿そのみまの役人で宮中の掃除なごをした下級のもの。

この歌は拾遺集、源公忠殿もりの伴のみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすなといふ歌に根據を持つてゐるので、それは春の歌、これは秋の歌であるから「春ならずとも」といつたのである。秋になつて砌のあたりに露がおき

始めるやうになつたが、伴の御奴よ、春でない秋ではあつても、よく心を用ひて折角美しくおいた露を散らしてしまはないやうにせよとの意。

桐の葉のかつ散りかかるおばしまに村雨そそぐゆふべ涼しも

○題「新秋雨涼」

欄干に村雨がふりかかり、一方又桐の葉も散つて落ちかかつてくる。さうした夕方の涼しいことよ。

大空は嶺のあらしにさえさえて軒の垂氷に月ぞうつろふ

○題「冬月」

山の上から吹きおろす風が大空を吹き拂ひ、冬の夜の空は冷たく冴えて、月の光が軒のつららに映つてゐるとの意。

わたの原夕浪黒く立ち來めり熊野の沖に鯨寄るころ

○題「黒」

熊野の沖に鯨の寄つてくる頃、大海原に夕方、浪が黒く立つてくるやうであるといふことで、意味は何でもないが、熊野の鯨といふものと「黒」といふ感じとがびたりと合つてゐて面白い。

村田 春海

春道の子。通稱平四郎。字は士観。琴後翁、また織錦齋と號した。歌文を賀茂真淵に學び、儒學を皆川淇園に學んだ。千蔭と並び稱せられるが、歌よりもむしろ散文の方にすぐれてゐるといはれる。家集を琴後集といふ。文化八年に六十六歳で歿した。

明けぬとて鳴くやきぎすの聲のうちにはのぼのしらむ春の山畑

○題「雉」

夜が明けたといふので鳴くところの雉子の聲が聞える。その雉子の聲の聞える中に、いよいよ夜が明けて山畑が白んでゆくといふ春の朝の景である。

よるべをば波にまかせてる花の香ごめにめぐる春の盃

○題「三日の日」

三月三日、曲水の宴の歌である。上流から盃を流すと、盃は流れ流れてその行き着く先を波に任せるかのやうに、波のまにまに流れつつ、花が散つてその中へ落ち込むのを、その香もろとも受け入れて浮べながら、廻り廻つて流れてゆくとの意で、いかにも長閑な楽しげな歌である。

さみだれに爪木の道も絶えにけり谷の岩橋水こえしより

○題「兼」

五月雨がふり續いた爲に、谷川の水が増して、そこにかけである岩橋を水が越えてしまつたので、それからは薪を伐りに通ふ道も絶えてしまつたといふ歌である。

よしさらば衣にほはせ眞萩原わけゆく袖は雨にぬるとも

○「雨にぬれて萩の花を見る」といふことを歌つた歌。

萬葉集、卷一、長奥麻呂「曳馬野にほはり原入りみだり衣にほはせ旅のしるし」といふ歌を念頭において作つたものであらう。たとへ萩の原を分けて行く袖は雨にぬれようとも構はないから、萩の原の中へ入つて衣をその萩に匂はせよ。と人に命ずる形である。

上田秋成

通稱は東作。無勝、鶉居、三餘亭などの號がある。大阪に住み、後に京都に住んだ。歌は河津宇萬伎に學び、小澤蘆庵とも親交があつた。家集を藤箋册子といふ。ほかに雨月物語、春雨物語、癡辯談、膽大小心録、冠辭考續紹などの著がある。文化六年に七十六歳で歿した。

風あらしき木曾山ざくらこの春は君をすごして散らば散らなん

○「木曾山ざくらこの春は君をすごして散らば散らなん」といふ詞書がある。南畝は蜀山人である。

南畝が東國へ歸るに當つて、木曾路を通るのであるが、その木曾の山なる櫻よ、今年の春はこの君が通る時、盛に

咲いて、その美しい花を見せてこの君の旅心を楽しませて、それから後は散るらならば散るがいい。それまでは散つてはいけない。といふのである。

香具山のをのへに立ちて見渡せば大和國原早苗とるなり

香具山の山の上に立つて四周を見渡すと、大和の國原は一面に田で早苗をとつてゐるのであるとの意。調が高古で萬葉のそれに通ふものである。

早苗とる時にはなりぬをとめらが難波すががさ紐はつけてん

早苗をとる時となつた。早少女らは早苗をとる爲の用意として、難波の浦の菅で作つた笠に紐をつけたことであらう。紐をつけてすぐかぶれるやうに菅笠の用意をしたことであらうとの意。これも調子の高い歌である。

はふりが清むるあとに木の葉ちりて神の御手洗こほりぬにけり

○はふりこ 祝子。「はふり」ともいふ。神に奉仕する人。 ○御手洗 みたらし。「みたらし」ともいふ。神社の境内にある池や川のこと、手などを洗ひ清める爲のもの。

はふりが神前の御手洗に木の葉が散りこむのを拂ひ清めるすぐあとから、又木の葉が散つて、やがてその水がこぼつてしまふといふ情景。

寒き夜をあかしかねてぞ今朝見れば生駒が嶽に雪のつもれる

○「田舎すみせし時」の歌。

寒い夜をあかしかねて、よくも眠らずに朝になつてしまつた時、戸口に出て見ると、今朝は近くの生駒山に雪がつもつてゐるとの意で、大阪に住んでゐた頃の歌である。

ありあけの月の光はうづもれて峰しろたへの雪のふりはも

○題「雪降寒月」

古今集、坂上是則「あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれる白雪」といふ歌があるが、これは白い雪の景色がまるで有明の月の光のやうだといふ歌である。秋成のこの歌は雪のふつてゐる上に有明の月が照つてゐるのであるが、その月の光は眞白い雪のためにうづもれたやうに、見えなくなつて、峰は一面に雪が眞白くふり積つてゐることであるといふのである。多少趣はちがふが、新古今集、藤原俊成「雪ふれば峰のまさか木うづもれて月にみかける天の香具山」といふ歌がある。又下句の「雪のふりはも」といふ表現は、古今集、大歌所御歌「水莖の岡のやかたに妹とあれとねての朝けの霜のふりはも」といふ例がある。

柳もえ蘆つのぐみて津の國の長柄の堤人のゆきかふ

○「早春歌」○つのぐむ 蘆などの芽を出すことをいふ。後拾遺集、曾根好忠「三島江につのぐみわたる蘆の根のひとよのほどに春めきにけり」などの用例がある。

攝津の國の長柄の堤は淀川の堤である。その岸に柳が芽をふき、蘆もいきいきと新しい芽を出して、世は全く春で

ある。その堤を春らしい装ひで、春らしい気分で行つたり來たりしてゐるといふ長閑な風景である。

高圓の野邊見にくればにひ草にふる草まじり鶯なくも

○題「鶯」 ○高圓 大和國添上郡にある。○にひ草 新しく芽を出した草。「にひ草にふる草まじり」といふ句は萬葉集、卷十四「おもしろしき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひば生ふるがに」に基づいてゐる。

歌の意味は、高圓の野邊に散歩して來て見ると、その野邊は新しい草、古い草が入りまじつてゐて、何ともいへぬ趣である。その上に、どこかで鶯が美しい聲で鳴いてゐることである。といふことで、「にひ草にふる草まじり」といふ句が萬葉集から出てゐるのみならず、高圓といふ地名も萬葉集に多く出てゐるものであり、「鶯なくも」といふ調子も萬葉風である。

かげろふのもゆる春日の小松原うぐひす遊ぶ枝うつりして

○野「鶯」

單純な歌であるけれども、餘情が豊富である。「枝うつり」は枝から枝へと飛び移ること。

稀にとふ人をやどして春雨の夜をすがらに語る庵かな

○題「庵春雨」

稀に訪ねて來てくれた人を自分の庵に泊めて、折しも春雨がふつてゐる夜、夜どほし盡きぬ物語をするといふ歌。

思ふことあらぬ枕に花の香のあさらにかをる春の曙

○題「櫻花」○あさら 「あさらかに」といふも同じ。淺く、淡く。

春の夜明け方、これといつて憂いことも悲しいこともなく、物思ひもなく寤てゐると、枕のあたりに櫻の花の香がほんのりとかをつてくるとの意で、ほんのりと淡い花の香に陶醉して何の屈托もないのんびりした心持を歌つてゐる。

舟うけてたが物の音をあそぶらん嵐の山の花の木がくれ

○題「山路花」

「物の音を遊ぶ」といふのは音楽を奏すること。嵐山の山路を行くと、花の木に隠れてよくは見えないが、山の下の方の流れに澄みわたる音楽のしらべが聞える。誰が舟を浮べて、舟の中で琴箏を奏してゐることであらうと奥ゆかしく思ふ。

櫻花うれしくもあるかこのゆふべ嵐にかへて小雨そぼふる

○題「雨中花」

この日の夕暮、櫻の花に嵐が吹いて吹き散らしてしまふのは惜しいと思つてゐたが、嵐が吹かずに（嵐に代つて嵐の代りに）小雨がしよぼしよぼとふつてゐる。その爲に花は散らないのみならず、一層しんみりした美しい景色であ

るといつて、その嬉しさを歌つたものである。

石川のこまのたはれを花に遊び主ある人の帯を取らしそ

○題「花下遊」 ○たはれを 蕩子、遊治郎さいふこまではあるが、いくらか風流を解する男さいふ意味も含まつてゐる。○取らしそ「取りそ」に同じ。

催馬樂に「石川の、こまうどに、帯を取られて、からき悔いする、いかなる帯ぞ、はなだの帯の、なかはたえたる」といふのがあつて、それに基づいた歌である。石川は河内國石川郡で「こまうど」は高麗人である。石川は昔高麗その他の歸化人の住んでゐた所であるといふ。この催馬樂は女が高麗の男に帯を取られて、それを後に悔いるといふことを歌つたもので、秋成の歌は「石川のこまのたはれを」と歌つてゐるが、事實は高麗の男でなくても催馬樂の歌によつて高麗といひつづけたのである。「主ある人」は夫を持つてゐる女といふこと。風流の蕩子よ。花にうかれ遊んでも、人の妻なる女の帯を取つてはいけない。といつたのである。花見に行つて遊び戯れ、女の袖などを取るけれども、催馬樂に、女が帯を取られて悔いをするところやうに、女の、まして夫のある女の帯などめつたに取つてはなるまい。といふやうな心持である。

大井川くだす筏のあとたえてゆふべの波に花ちりうかぶ

○題「嵐山花」 ○大井川 大堰川。嵐山のところを流れる川。

晝の間は大井川に筏を下してゐたが、夕方になつてもう筏の影も全く見えなくなつて、波に靜かに花が散り浮んで

ゐるとの意。

吉野山岩のかけみち春ゆけば瀧つ河内に花ちりうかぶ

○題「落花」 ○かけみち かけち、懸路、棧道。石などが多くて険しい山中の道をいふ。○瀧つ河内 水の激して流れるところの川筋の灣曲したところ。萬葉集、卷一、柿本人麿「山川もよりて仕ふる神ながら瀧つ河内に船出せすかも」といふやうな歌がある。

吉野山の岩の険しい道を春の日に行くと、目の下に見る曲り入つた激流に花が散つて浮んでゐることであるとの意。萬葉の古調である。

渡殿をいきかふ裾もかろげなり夏立つ今日の衣の追風

○題「更衣」 ○渡殿 昔の建物で廊下をいふ。○夏立つ 衣がへの歌であつて、夏四月になることをいふと共に「たつ」は衣の縁語「裁つ」である。

今日は夏になつて衣がへをして、渡殿を行つたり來たりする人たちの裾も見るからに軽い様子である。風がうしろから吹いて袖をひるがへし、衣にたきしめた香のかをりが吹き送られてほのかにほつてくる。といふ歌で男であつても差支ないが、女の様子を歌つたものとしてみた方が歌として面白い。

松風の音羽の山を越えくれば夏ならぬ夜の月すみわたる

○題「夏月」

音羽山に松があつて、それを風が吹くといふのは實景であると共に、「松風の音」とつづいて「音羽山」といつたところが歌として面白い。音羽山を越えてくると、夏ではあるが、夏とは思はれぬほど涼しく、冴え切つた月が一面に照り渡つてゐるとの意。

入りつどふ千船のひまを漕ぎ出でて夕涼みする難波人かも

○題「涼み」

難波の港。入り集まつてくる多くの船。その間を漕ぎ出でて夕涼みをするといふ歌。印象が繪のやうにはつきりしてゐて、しかも調子が高い。

湊入のいつての舟は早きかも漕ぎそけてゆく沖の夕立

○題「ゆふだち雨」 ○いつての舟 五艇漕の舟、又は五人で漕ぐ舟、又一説には伊豆國から造り出す舟のことであるといふ。ここでは要するに舟足の早い舟をいふのである。 ○漕ぎそけて「そく」は「遠ざく」「退く」などと同じ意味の語である。沖にひとしきり夕立が来る。その時ちようど五手船が港に向つて漕ぎ入らうとしてゐたが、雨がふつてゐたので、一層速力を早めて、雨を避けて隣りに港に入つてしまふ。その舟の早いことを詠歎したもので、表現が面白く、調子も歯切れがよくて痛快である。

天の川川波高し夜ごもりにかへすはすべな明けばおもなし

○題「七夕」 ○すべな「すべなし」に同じ。 ○おもなし 恥かしい。

織女星の心を歌つたもの。天の川の波が高く立つてゐる。夜のうちに彥星を歸さうと思ふけれども、波が高いので、歸すにすべがない。さうかといつて、もつと長く留めておきたいは山々だけれども、夜が明けてしまつて、歸る妻が人に見られては恥かしいといふ纏綿たる情を歌つたものである。

千里まで照らせる影とゆふなみの潮のたたへに月さしのぼる

○「月の歌」 ○ゆふなみ 「言ふ」と「夕波」との掛詞。

月が海上千里の遠くまで照らすとよくいふが、夕暮の潮が満々と湛へてゐる、その波の上に、今しも月が昇ることであるとの意。

照る月に雁のまれびと鳴きわたるわが待つ友はこよひ來なくに

○題「雁」 ○まれびと まらうご。客人。

月の清く照つてゐる前を、雁といふ遠來の客は鳴き渡るのである。けれども自分が待ち焦れてゐる友は今宵は來ないのである。「來なくに」といふいひかたには餘情がある。

寝よと告ぐ鐘よりのちに音ふけて人待ちがてら衣うつなり

○題「掛衣」

萬葉集、卷四、笠女郎「皆人を寝よとの鐘は打つなれど君をし思へばいねがてぬかも」といふ歌がある。もう寝るべき時である。夜が更けたから人々はもう寝よと告げるもののやうに鳴り渡る夜半の鐘である。その鐘が鳴つてしまつてから後、ある女は今宵はもうおそいから来てはくれまいと一方では諦めながらも、一方ではなほ来てくれるだらうかと待ちながら、衣をうつてゐる。その音が更けた夜の空に悲しげに響きわたるとの意。或は旅に出た夫を待つ妻の歌と見ることもできるであらう。

おきわたす霜のたえまとなりにけり今朝は落ちたる野路の棚橋

○題「霜」

一面に霜がおいてゐるが、今朝見ると、野中の路に、細い流れにかかつてゐる棚橋が落ちて、そこだけ水が流れてゐる爲に、霜がおいてない。ちようど霜の絶え間になつたやうに見えるとの意。趣向の面白い歌である。

涼みとる淀の里びと川ぞひの柳に落つる月を見るかな

○題「河柳三日月」

淀川の岸なる里人は川のほとりに出て涼みをとつてゐる。そして川ぞひの柳の梢あたりに落ちてゆく月を見ること

であるとの意。すつきりした感じである。新古今集、藤原公衡の「かりくらし交野の眞柴折りしきて淀の川潮の月を見るかな」といふ歌が何となく思ひ出される。

風の上に立ちまふ雲のゆくへなく明日のありかは明日ぞ定めん

詞書によると、住居を定めずにあちらこちら歩いてゐるので、今は何處に住んでゐるかと思ねた人があつたので、答へた歌であるといふ。風の吹くまにまに立ち舞ふ雲のやうなもので、ゆくへは定まらない。ゆくへも知らず此處に住み彼處に住んで、明日の住む所は明日になつて定めよう。あらかじめ定めておくことはできないとの意。賀茂真淵に「ふるさとにとまりもはてす天雲のゆきかひてのみ世をば経ぬべし」といふ歌があり、橘曙覧に「夕煙今日は今日のみ立てておけ明日の薪は明日とりて來む」といふ歌がある。

われよりも貧しき人の世にもあればうばらからたちひまぐぐるなり

詞書によれば、庵を鶺鴒じゆんと名づけてゐたが、これは聖人鶺鴒じゆん殿い食い(莊子天地篇にある言葉)といふつもりではない。「鶺鴒は常居なし」といふことによるのであるといふ。即ち前の歌のやうな心持である。ある夜、この庵に盗人が入つて、少しばかりあつたものを持つて行つてしまつた。そこでその翌朝作つたのがこの歌であるといふ。自分ほど貧しいものはなからうと思つてゐると、世の中にはなかなか自分よりもつと貧しい人があるので、茨やからたちの隙を潜つて入つて来て物を盗んで行つたのであるとの意で、盗人を憎む心や盗まれた物を惜しむ心を出さずに、自分よりも貧しい人だと思へば却つて氣の毒だといふ口吻でかやうに歌つたところに秋成の面目がよく見えてゐる。

名は文中、通稱は帯刀。尾張に生れたが、多く京都にゐた。はじめ冷泉爲村の門人となつたが、後に獨立して一家を成した。家集に六帖詠草及び同拾遺がある。享和元年、七十九歳で歿した。

さしてゆくかたもなけれど香にめてて梅咲く野べは遠く來にけり

○題「野梅」

蘆庵は「ただごと歌」といふことを主張して、技巧の自然を喜び、ありのままを歌はうとした。そのために缺點としては力の弱いといふことになりがちであつたが、そのすぐれた作にあつては平且でありながら、どことなく無限の情趣が漂つてゐるのみならず、明々誦すべき秀逸が少くない。この歌の如きも、頗る平明であつて、しかもなかなか趣の捨て難いものがある。どこといつて目ざして行く所は定まつてゐないのであるけれども、梅の花の咲いてゐる野をその花の香を懐かしみつつ、もう少しもう少しといふやうにして、遠く來てしまつたといふ漫步の心を、梅に興味の中心をおいて歌つたものである。

よしや吹け暮れなばなげの櫻花ちるをだに見む春の夕風

○題「夕落花」 ○第二句は古今集、春下、素性法師の「いざ今日は春の山べにまじりなむ暮れなばなげの花のかげかは」に基づいてゐる。「なげ」の「な」は「無し」といふ形容詞の語根で、「なげ」は「ありげ」の反對の意味、即ち「なささうな」なきが如き」といふ程の意味である。

古今集の歌に「暮れなばなげの花のかげかは」三あつて、即ち日が暮れたならば、なささうな花の蔭であらうか、否宿るべき花の蔭はあるであらうといふこと、換言すれば日は暮れようとも宿るのに雅趣のある花の蔭といふものがあるであらうといふ意味を歌つてゐるから、この歌でもその心持を念頭においてゐるのである。櫻の花の咲いてゐる景色を飽かず眺めたいけれども、風が吹いて來て花を散らす。夕方であつて、やがて日が暮れるであらうが、日が暮れば却つて趣のある花の景色があるであらうから、いつその事、春の夕風よ、構はないから吹いてくれ。さうすれば美しく咲き盛る風情は見る事ができないにしても、せめて散る景色を心ゆくまで賞翫しよう。との意。

夕されば南の風に雲消えてみるめ涼しき沖のいさり火

○題「夏の海」 ○みるめ「見る目」に「海松布」といふ藻の名を掛けてゐる。但し、この歌では「海松布」といふことはあまり意味を持つてゐない。

夕方になると、南から吹く風に雲が吹き拂はれ、消えてしまつて、次第に暗くなる沖の彼方に點々として漁火が見えるが、それがいかにも見るからに涼しいといふ夏の海の夕景で、どちらかといへば幾分説明に過ぎたといふ嫌ひはあるが、捨て難い歌である。

夕日こそさして見せけれこがくれてうつろひ残る秋萩の花

○詞書「萩のかつかつ残れるに入日さすを」 ○うつろひ 色の變ることをいふが、ここでは散ること。

木の間に隠れて、わづかに散り残つてゐる萩の花を、それに夕日がさして、美しい風情を現し、そこに萩の花がま

だ咲いてゐることを見せてゐるとの意。「さして」は夕日の射すこと、とそれと指し示すこととを掛け、木の茂つた奥にあつて人目につきにくいのを夕日が照し出して萩の咲き残つてゐることを見せてゐるといふやうに歌つたのである。

しぐれつる雲は残らで夕日さすまやの軒端はしづく落つなり

○「しぐるる音するに見あぐれば夕日さしたり」とある。即ち時雨かと思ふ間に晴れてしまつて夕日がましてゐるところを歌つたものである。○まや「あづまや」のこと。催馬樂に「あづまやのまつのあまりのあまそそぎわれ立ち濡れぬその戸開かせ」といふ歌がある。即ち「あづまやの」といふのを重ねるのを略して「まやの」といつてゐるわけである。

時雨がふつたが、その雲は残らず消えて空一面に晴れ渡り、夕日が花やかにさして、その夕日に照らされてゐるあづまやの軒端にはボタリボタリと雫が落ちてゐるといふ景色で、雨のあがつた後の夕映の状がよく歌はれてゐる。

ふると見しねやのあられば夢なれやさむる枕におとも残らず

○題「寢覺歌」

寢屋にゐて夢現に霞がふると思つたが、それは眞實に霞がふつたのではなくて、夢であつたのであらうか、目がさめて見ると、枕近くに霞の音も聞えないとの意。霞のふると見たのは果して夢に過ぎないのであつたのか、或は事實寢てゐる間に霞がふつて覺めた時にはもうやんでゐたのか、その點の明らかでないところに却つて趣がある。

わが松のこずゑのからす音に鳴けば里の市人朝だちすなり

○詞書に「軒の松に鳥の一聲鳴くほどもなく市人のさざめきゆく音するを」とある。○朝だち 多くは朝の旅立ちをいふが、ここでは旅立ちといふ程の事ではなく、人それぞれの業務に就くために家を出ることをいふ。

自分の家の庭の松の梢に鴉がゐて鳴くとやがて町の人たちはそれぞれ仕事をするために家を出てゆくことであるとの意。朝の實景實感である。「市人」は町に住む人たちのことであるが、ここでは主人として商人をいつてゐるのである。

香川景樹

鳥取の人。林氏。京都に出て梅月堂香川景柄かほまの養子となつたが、やがて離縁してしまつた。主義としては古今集を尊重し、調べの説を唱へ、特に叙景の歌にすぐれた才能を持つてゐた。園と號し、家集に桂園一枝及び同拾遺がある。著書には新學異見、百首異見、土佐日記創見、古今集正義などがある。天保十四年七十六歳で歿した。

朝な朝なおなじところ〇に聞ゆれどあらたまりゆく鶯のこゑ

○題「毎朝聞鶯」

毎朝同じ所で鳴くけれども、その鶯の聲は同じでない。日一日とあらたまつてゆく。即ち次第に鳴き方も巧みになり、春らしい聲になつてゆくといふのである。いかにも題詠的の歌であるが、趣向が面白い。

大井川かへらぬ水にかけ見えてことしも咲ける山櫻かな

○題「河上花」 ○大井川 大堰川。京都の西を流れてゐる。上は保津川、下は桂川となる。

大井川の一度流れ去れば再び返ることのない水に、その影をうつして、今年も春になつたので又咲いた山櫻であるとの意。去年の花は去年散つてしまひ、今年は又今年の花が咲くといふこと、水は流れて再び返らないといふこと、すべて自然の循環といふことの不可思議を思はせる歌である。

さやかなる月ゆゑだにも寝られぬを山時鳥なく夜なりけり

○題「月前郭公」

さやかに照る月を惜しむがためだけでも寝られないのに、まして山時鳥が鳴く夜であつて、かうした良夜をどうして見捨てて寝ることができようとのこと。幾分か理屈ばつた歌ひ方である。

浦風はゆふべ涼しくなりにけり海人の黒髪今かほすらむ

○題「夏浦夕」

浦を吹く風は夕方になつて涼しくなつた。海人は終日の業を終へて、今その水に濡れた黒髪を乾すことであらうかとの意。調のすぐれた歌である。

いづくより駒うち入れむ佐保川のさざれにうつる白菊の花

○題「菊映水」 ○佐保川 奈良の近傍を流れる川。 ○さざれ さざれ波、小波。

佐保川の岸に白菊の花が咲いてゐて、それが小波に映つて美しい景をなしてゐる。自分は旅をして今この佐保川を渡らうと思ふが、どこから馬を乗り入れようといふので、もし馬を入れれば水をかき亂して折角の美しい景を蹂躪してしまふであらうといふ意味、この美しい景をこのままにいつまでも眺めたいといふ心である。

夜も寒し瀬の音も高しみ吉野の大川のべに雪ぞふるらし

○題「河雪」

意味は平明である。萬葉集、卷四、大伴四綱の歌に「月夜よし河の音きよしいざここに行くも行かぬも遊びて行かむ」といふのがある。上二句など或はこの歌あたりに範を取つたものであるかも知れない。とにかく景樹の歌には古今調のものが多いが、この歌の如きはやや萬葉調に近いものである。なほ初句、第二句、結局の終がすべて「し」になつてゐて、そこに一種の音調があることが注意せられ、この點では催馬樂の「飛鳥井にやどりはすべし陰もよしみもひも寒しみまくさもよし」といふのが思ひ合せられる。

行けど行けどかぎりなきまでおもしろし小松が原の朧月夜は

○以下十一首は「事につき折にふれたる」とある中のもので、それらに景樹の特色のあらはれた佳作が少くない。

頗る平明な歌ひ方である。上句などはむしろ説明に過ぎるといふ感じさへあるが、しかし平明ながらに情趣のゆたかな歌である。

ゑひふしてわれとも知らぬ手枕に夢の胡蝶とちる櫻かな

酒に酔つて寝てしまひ、自分が自分であることを忘れて、手枕して寝ると、夢のやうに櫻が散る。莊子が夢に胡蝶となつたといふことがあるが、その夢の胡蝶のやうに、夢か現かわからぬけれども、ひらひらと櫻の花が散るといふのである。春の酔ひ心地が面白く歌はれてゐる。

蝶よ蝶よ花といふ花の咲くかぎり汝がいたらざる所なきかな

表現がまことに自由で面白い。

夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな

これも實に自由な表現である。殊に第四句の口語的の語法などは面白い。

根をたれてさざれの上に咲きにけり雨に流れし河原なでしこ

雨のために根がきれて流れた河原撫子が、小波の上に流れて花が咲いてゐることであるとの意。趣向の面白い歌。

見わたせば神もなるとの夕立に雲たちめぐる淡路島山

○神もなると 神は雷のこと。雷の鳴ることといふ地名とを掛けてゐる。

雷も鳴るところの鳴戸あたりの夕立に、見渡せば、淡路島の山を雲が立ちめぐるつてゐるといふだけの歌であるが、

雄大な景と張り切つた調とが相伴つてゐて佳作である。

朝づく日いまだにははぬ山の端の松の葉わたる秋の初風

朝日のまだ照り初めない山の端の松の葉を秋の初風が吹きわたるといふ歌で、人のあまり氣づかない所を歌つてゐる。

富士のねを木の間木の間にかへりみて松のかげふむ浮島が原

浮島が原の松の木立の中を行くに、時折ふりかへつては富士の嶺を見る。木の間木の間にかへりみながら、松の蔭を踏んでは進んで行くといふのである。富士の嶺をかへりみ、來し方を惜しみつつ、一步一步と進んで行く旅の情が快い調で歌はれてゐる。

箱根山ゆふる雲に宿からむ麓は遠し關はとざしぬ

箱根の山中で日が暮れて、今から麓の里まで行つて宿を借りようにも麓は遠いし、關所はとざしてしまつて通ることができない。行かうにも行けず、戻らうにも戻れない。まよよ、夕暮の山に棚引いてゐる雲のあたりに宿を借りようといふ旅情である。但し幾分か題詠的臭味がある。

明石瀉松の木かげに道はあれど磯づたひしてわかめ拾はむ

これも旅中の情で、海岸を少しく離れて松の立ち並んだところ、松の木蔭に道はついてゐるけれども、そこを通らずに、海岸に沿つて行つてわかめを拾はうとの意。

子はなくてあるがやすしと思ひけりありての後になきが悲しき

観念的の歌ではあるが、實感がしみじみと出てゐる。子を持つて後に子を失つた悲しさから思へば、子といふものは最初からない方が却つてさういふ愛さも悲しさもなく、いふと思ふのであるとの意。

なきを夢あるをうつつと思ひけりなほ世の中を世の中にして

○題「無常」

凡夫の悲しさ、世の中はやはり世の中であるとして、ないものを夢、あるものを現實と思つたのであるとのこと。しかし悟つて見れば世の中は常なきもので、あるもなきも結局は夢であり、又すべてが現實でもあるといふ理を裏にこめて歌つたのである。

まづゆくを慕ひ慕ひてつひに皆とまらぬ世こそ悲しかりけれ

すべての人がやがては同じ道に行かなければならない。ただ、ある人は早く行き、他の人はおくれで行くのである。先立つて行くところの人を、後に残つた人は惜しみ戀慕ひ、しかも結局は皆長くとどまることなく、死んで行つてしまふ世の中と思ふに、世の中といふものは悲しいものであるとの意。

追ひしきて取りかへすべきものならばよもつひら坂道はなくとも

○「をさなき子を失ひける時」の歌で、享和三年、男茂松が當歳で死去した時のこと。○追ひしきて 追ひ及びて、追ひついで。

○よもつらひ坂 黄泉津比良坂。黄泉(冥府)へ行く途中にある坂のこと、古く古事記に出てゐることば。

死んだ子を追つて行つて、追ひついて取返して行くことができるものであるならば、黄泉津比良坂にたとへ通るべき道がなくとも、どんな艱難にも堪へて黄泉に行つて連れ返らうものを、それができないばかりに、かくは徒らに歎くことであるといふ歌。

うれしさを包みかねたる袂より悲しき露のなごぼるらむ

○「葉月の始なりけむ娘孝子を伯耆守寛寧がもとに遣したりける歌をとて人々つどひてその夜もすがら舞ひ奏でなごぼるらむ」の中にひとりひそかに歌へるとある。

娘が成長して人の妻となること、人はそれをただ祝ふべきこととして祝つてくれる。それは勿論嬉しいことである。けれども又、親として娘のかうした姿を見るにつけて、いろいろ浮ぶ感慨は盡きぬものがあるであらう。さういふ情を歌つたのであつて、嬉しさを包まうとして包みきれない袂から、嬉しさの涙でなくて、悲しい涙がどうしてこぼれるのであらう。この喜ぶべき場合にこんなにも遣る瀾ない涙がこぼれるといふのは、我ながらどうした事であらうといふのである。なほ嬉しさを袂に包むといふことについては古今集、雑上、よみ人しらず「うれしきを何に包まむ唐ころも袂ゆたかにたてといはましを」といふ歌が思ひ合せられる。

わが齢むかしの數にかへらめやこのいり豆に花は咲くとも

これは俳諧歌である。熬豆いりまめに花が咲くといふのは、あり得べからざる事である。さういふ事がたとへあらうとも、我が年齢が昔の若さに返ることがあらうかといふので、熬豆に花が咲くといつたところが即ち俳諧たる所以である。

めせやめせ夕けのつま木早くめせ歸るさ遠し大原の里

○「黒木うるかたに」といふので、即ち大原女が薪を賣り歩く繪に題した歌である。○夕けのつま木 「夕け」は夕の食事。「つま木」は薪のこと。

上句は大原女の賣り聲を寫したもので、夕食のための薪を買ひ給へといふこと。「めせやめせ」と呼び賣りながら薪を賣つて歩く、その女たちは大原の里へ歸つてゆくのであるが、歸り道が遠いといふことを歌つたもの。表現の自由趣向の凡なるが如くにして凡ならざるところに注意すべきである。

家において暮しわびつる日數さへ今さら惜しき花の蔭かな

○「東山の花見にまかりて」

こんな美しい花であるならば、もつと早く来て見ればよかつたものを、今まで家にゐて、日の長いことをかこちなどしてゐた幾日かのことさへ、今更のやうに惜しく思はれる、それほど美しい花の景色であるとの意。

時鳥なくべき山のしけきかなおそくも花をたづね來にけり

○題「春殘花」

花を尋ねに來たけれども、大方は散つてしまつて、あまりおそすぎたことを思ふ。今はもう春も終に近く、間もなく夏になつて時鳥さへ鳴きさうな山の様子であるといふ歌である。

何とわくにほひならねど取りいでて去年なつかしき夏ごろもかな

○題「更衣」

どうといつて、はつきりわかる香があるわけではないけれども、今年も更衣の時になつて、夏の衣を取り出すと何となく去年のことが懐かしく思はれることであるとの意。

待つほどにはや夜はあけて時鳥なかぬ聲にも驚かれけり

○題「終夜待郭公」

夜もすがら時鳥の鳴くのを待つてゐた間に、早くも夜が過ぎてしまつて、とうとう鳴かなかつたのであるが、鳴かないにも拘らず鳴いたのではないかと、何となく時鳥の聲を聞くやうな氣がして、ハツと思ふことであるとの意。「なかぬ聲」といふのは面白い技巧である。

玉手まき寢ての朝髪たるひめの浦風さむし秋立つらしも

○題「湖早秋」 ○たるひめ 越中國にある垂姫の浦。

美しい手を纏ひ交して寝て起きた朝の女の髪といふことから、その髪が垂れてゐるといふことで「垂姫」とつづけたのである。即ち上二句は序である。垂姫の浦を吹く風が寒い。秋になつたやうであるといふ歌である。序の使ひ方が面白。

高圓たかまゐのをのへの宮の萩が花にほふらむとも忍ばむや誰

○「題」故郷萩。 ○高圓 奈良の近傍の地名。

高圓には聖武天皇の離宮があり、又萩の名所でもあつたので、萬葉集、卷二十、大伴家持「宮人の袖つけ衣萩萩にほひよろしき高圓の宮」とか新古今集、秋上、顯照法師「萩が花ま袖にかけて高圓のをのへの宮に領巾ふるや誰」とかいふやうな歌が古くある。この歌の題の「故郷」といふのは古く宮殿のあつた所といふ程の意味であつて、高圓の山の上の宮の跡が即ちそれである。その所に萩の花がたとへ美しく咲き亂れようとも、多くの人は昔の事を知らないから何とも思はないであらう。それを見て昔の事を思ひ浮べるのは誰であらう。誰がこの廢墟に立つて昔の事をしのぶことであらうといふ歌である。

武藏野をわがわけくればにげ水のゆくへまどはす蟲のこゑごゑ

○以下四首は「事につき時にふれたる」 ○にげ水 古來武藏野の逃水といつて、草深い武藏野に遠くから見ると一筋白く水の流れてゐるやうに見え、しかも近づいて見ると何も見えないといはれたものである。散木奇歌集に「あづま路にありといふなる逃

水の逃げ隠れても世をすごすかな」といふ歌がある。

武藏野の草深い中を分けて行くと、一面に蟲が鳴いてゐて、それに聞き惚れてゐると、逃水がどこへ流れて行つてゐるのか、つい見失つてしまふといふ歌で、逃水のゆくへをわからなくさせるところの蟲の聲といふやうにいつたのである。

山おろしの風にひとむらちる霞かやが軒端の玉すだれなり

○かやが軒端 茅葺の粗末な家の軒端。

意味は平明である。茅屋に玉の簾をかけたやうだと見立てたのである。調において特にすぐれた歌である。

墨染のゆふべの山をながむれば松の立てるも寂しかりけり

暗い夕暮の山を眺めるに、一面に暗い中に松の木立がそれと見えるのも寂しいものであるといふので、やや力の弱い感みはあるが、調の美しい温雅な歌である。

大海の舟ばたまきて寝たれどもなほ見る夢は妹が手枕

大海に舟を浮べてその舟ばたを枕として寝たけれども、やはり見る夢は家に残した妻の手枕であるといふ旅中の情である。

さよふけておのづからなる車井のこゑ物凄きこの寝ざめかな

○題「井」

夜が更けて、ふと目覺めると、誰かが水を汲んでゐるのであらう、おのづから車井が音を立ててゐる、その音が物凄く聞えることであるとの意。取材が新しく、趣向の面白い歌である。

良 寛

越後國三島郡出雲崎町に生れ、父は名主兼神職で山本新左衛門といつた人。幼名は榮藏。十八歳で出家し、良寛と稱し、また大愚といふ。備中の玉島に赴き、その他各地を遍歴し、歸郷して國上山坂の五合庵に住み、老齢に及んで乙子河畔の小庵に移り、更に島崎村の木村元右衛門の別舎に入り、天保二年七十五歳で入寂。

鉢の子にすみれたんぼぼこきまぜて三世の佛にたてまつりてん

○鉢の子 僧が托鉢する時に持つ鉢。 ○三世 前世、現世、來世をいふ。

菫や蒲公英を鉢の中に一緒に投げ入れて、それをそのまま三世の諸佛に奉らうといふ歌。花を佛前に供へるにしても、供へるやうにして供へるのではなくて、あり合せの鉢に順序も法則もなく菫や蒲公英をまぜて入れて、それを佛前に捧げようといふところに、無造作な性格と、形式に捉はれない自由無礙な境涯とがある。すべて良寛の歌には題詠は殆どなく、折に觸れて即興的に詠み來り、詠み去るといふ風である。僧正遍昭に「折りつればたぶさにけがる立て

ながら三世の佛に花たてまつる」(後撰集)といふ歌があるが、くらべてみると面白い。なほ良寛の歌に「この國の秋萩すすき手折りもて三世の佛にたてまつらばや」といふのもある。

飯こふとわが來しかども春の野に菫つみつつ時をへにけり

萬葉集、卷八に「春の野に菫つみにと采しわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける」といふ歌がある。それは山部赤人の歌で、菫を摘むために行つて歸ることを忘れてしまつたといふのであるが、良寛のこの歌は飯を乞ふため、即ち托鉢に出て、春の野を通りかゝると、菫が美しく咲いてゐるので、一つ摘み二つ摘み、菫を摘んで、つひに托鉢に出て來たのであることは忘れて、野に幾時かを過してしまつたといふのである。無邪氣な樂天的な良寛なるものをよくあらはしてゐる歌である。

春の野のかすめる中をわがくれればをちかた里に駒ぞいななく

春の野の一面に霞のこめた中を來ると、遠くの里に馬が嘶いてゐるといふだけの歌であるが、いかにものんびりした歌である。霞の奥に村里があるらしく、その方から馬の聲、いはゆる春駒の嘶きが聞えてくる。それを聞きながら、急ぎの用事があるでもない一人の出家が、あたりの景色を楽しみつゝゆつくりと歩いてゆく。まことに長閑なものである。

子どもらと手たづさはりて春のぬに若菜を摘めばたぬしくあるかも

子供らと手を携へて春の野に若菜を摘めば楽しいことであるとの意。子供を好んだ良寛、子供と共に童心を持つことのできた良寛の歌として面白。

いざ子ども山べに行かん櫻見にあすともいはば散りもこそせめ

初句は萬葉集、卷一、山上憶良の「いざ子ども早もやまとへ大伴の御津の濱松まちこひぬらむ」などにおけると同じく、さあ人々よ、と呼びかけることばである。良寛は子供が好きではあつたけれども、この場合の「子ども」を童兒のことと解するのは恐らく正しくなからう。やはり普通に用ひられてゐる意味であらう。一首の意味は櫻を見に、さあ人々よ、今すぐ山べに行かう、明日にとでもいつてゐると、明日は散つてしまふことであらうといふことで、類想の歌もあり、必ずしも新味はないけれども、安らかに淡々と歌つてゐるところに良寛らしいところがある。なほ良寛に「いざこもに山べに行かむ童兒に明日さへ散らばいかにとかせむ」といふ歌がある。

この里の桃のさかりに來て見れば流れにうつる花のくれなる

やはり淡々としてゐて頗る平明である。しかも桃の咲き盛つてゐることを直叙せず、水の流れを持ち來つて、それに映ずる花の色によつて満開の様子をあらはしたところの自然の技巧、「花のくれなる」と收めた結句の効果などに注意すべきである。

むらぎもの心たのしも春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば

○むらぎもの「心」の枕詞。

これも平明な歌で、悠々たる心境がのんびりと歌はれてゐる。「むらぎもの心はなぎぬ長き日にこれのみ園の林を見れば」といふ同じやうな形の同じやうな心持を歌つた歌もある。すべて良寛獨特の世界である。

○草のいほに足さしのべて小山田の山田のかはづ聞くがたのしさ

結句一本には「聞かくよろしも」とある。草庵にのんびりと足を伸ばして、近く小山田に鳴く蛙の聲をうつとりと楽しく聞いてゐるのである。「あしびきの山田の田居に鳴くかはづ聲のはるけきこのゆふべかも」又「あしびきの山田の原にかはづ鳴くひとりぬる夜のいねらえなくに」なども歌つてゐる。

子どもらと手毬つきつつこの里に遊ぶ春日は暮れずともよし

良寛は童兒、手毬、はじきを三好といつて好んだといふ。この歌の如き、最もよくその面目を示したもので、「暮れずともよし」といふ句など殊に良寛らしい。手毬の歌では貞心尼がみづから作つた手毬を良寛に贈つた時、その返禮として與へた歌「つきてみよひふみよいむなこのとを十と納めてまたはじまるを」といふ面白いのがある。

道のべに董つみつつ鉢の子を忘れてぞこしその鉢の子を

かういふ歌を讀むと、さながら良寛その人を見るやうである。托鉢に出て、途中で董の咲き亂れてゐる所がある

と、董の方に心が行つてしまつて、托鉢といふことは忘れてしまふ。子供のやうな熱心と純情とを以て、董を摘む。もうこれでいゝと思ふだけ摘んで、その董を持つて庵へ歸つて来てしまふ。鉢を忘れて歸つたのであるが、まだその時には氣づかない。翌日又托鉢に出ようと思つて、始めて鉢のないことに氣づく。そして考へてみると、昨日董を摘んだ時に、はじめは鉢を自分のすぐ側においたのであるが、董を摘みつゝ移動して、つひに鉢をおいた所からずつと離れてしまひ、歸る時には鉢のことを全く忘れてゐたのであつたことを思ひ出して、ひとりで微笑するのである。「道のべに董つみつゝ鉢の子をわが忘るれどとる人はなし」といふ歌もある。歌としては「とる人はなし」といつてしまつては却つて妙趣の減することを感ずる。

この宮のみ坂に見れば藤波の花のさかりになりけるかも

良寛は常に無造作に淡々と歌つてゐる。この歌でも最初から「この宮」といつてゐる。題か詞書かよあれば、何といふ宮であるかわかるわけであるけれども、さういふものがないから、「この宮」は何の宮であるかわからない。何の宮であつても良寛としては構はないわけである。とにかく今居るところの宮である。そしてその宮の坂で見ると、藤の花が咲き盛つてゐるといふことを、藤の花のさかりになつたことだと感歎したのである。藤は恐らく社の境内にあつたのであらう。「なりにけるかも」といふ句法なども萬葉のその踏襲ではあるが、極めて單純に無造作に使つてゐるので、いやみがなし。

秋もややうら寂しくぞなりにけるをざさに雨のそそぐを聞けば

驚くばかり單純で平明な表現である。笹の葉に雨のそそぐ音を聞いて、秋の寂しさを次第に強く感ずるといふ感じの細かいところに注意すべきである。

水や汲まん薪やこらん菜やつまん秋のしぐれのふらぬその間に

やがて時雨がふりさうだといふ時、ふらぬ間に水を汲んでおかうか、薪をとつて来ようか、菜を摘まうか、いろいろしたい事があつて、さて何をしたらよからうか、と迷ふところが面白い。良寛なればこそ面白い。「歌やよまん手毬やつかん野にや出でん心ひとつを定めかねつも」といふ歌もある。やはりその面目躍如たるものがある。

いにしへを思へば夢かうつつかも夜はしぐれの雨を聞きつつ

上句と下句との連接の妙を味はひたい。「夜は」といつてゐるので、晝は何かと紛れてゐて昔を思ふやうなこともないのであることがわかる。夜、殊に時雨でもふるやうな時に、その雨の音に聞き入りながら、過ぎた昔を思ふ。昔が夢とも現ともなく思ひ浮べられて、堪へ難い懐かしさと寂しさとの交錯した心持になるのである。

夜もすがら草のいほりにわれをれば杉の葉しぬぎ霰ふるなり

夜もすがらといへば終夜であるが、この場合必ずしも終夜目ざめてゐたわけではない。夜の更けるまで起きてゐた時、「夜もすがら草庵にゐると」といつたものであらう。「しぬぎ」は押分けてとほるといふやうな意味であるが、

杉の木立に霞がふり、その密生した葉を押分けるやうにふることをいつたものである。その光景を良寛は必ずしも見てゐるわけではない。草庵の中で、しかも夜深く坐つてゐるのである。そして外に霞がふつてゐることを知つてゐるのである。で、断定的に「霞ふるなり」といつてしまつたのである。しかも「霞ふるらん」といふやうにしては歌にならず、「霞ふるらし」といつては歌にはなつても平凡である。それらに比して「霞ふるなり」の妙味を味はなければならぬ。

たまさかに來ませる君を小夜嵐いたくな吹きそ來ませる君に

これは定珍に與へた歌である。定珍といふのは阿部氏。通稱酒造右衛門。やはり和歌詩文を好み、良寛の親しい友の一人であつた。良寛は庵にゐて、かうした友の來訪を非常に喜んだ。しかも稀に來た友である。夜が更けて歸るといふに、強い風が吹いてはさぞ困るであらう。と思つて、「いたくな吹きそ」と風に向つていふ。思ふ人さか親しい友とかの爲に風が吹かぬやうに、或は雨がふらぬやうにと祈ることは、古來の歌に多くあるけれども、この歌にはやはり良寛らしいところがある。「來ませる君」といつてゐるなども、人なつゝこい性質をあらはしてゐるやうに思はれ、第二句には「君を」といひ、結句には「君に」といつてゐるところなども非常に面白い。

山かげの檼の板屋に音せねど雪のふる夜は寒くこそあれ

第三句の「音せねど」は微妙な趣を持つてゐる。音はしないけれども雪がふつてゐるのであるが、音がしないで雪

がふる、音なくして雪がふるといふいひ方と結局同じことになるので、「音はしないけれども」の「けれども」に強い意味はないのである。雪のふる夜は寒いといふことは當然のことで、雪のふる夜は暑いとはまさかいへないであらう。當然のことをそのままにいつて却つていやみに聞える場合がある。雪のふる夜は寒いといふことも、いひ方によつては、いやみに聞えるであらうけれども、良寛のこの歌ではそれ程いやみには聞えないばかりか、却つて愛すべき稚氣があるやうにさへ感ぜられる。かういふ微妙なところを思ふと、結局歌は人であつて、人を離れて歌はあり得ないといふこと、「一般的にいへば「文は人なり」といふことをしみじみと感ずる。

またも來よ柴の庵をいとはずば薄尾花の露をわけわけ

こんな穢い柴の庵がいやでなければ又いらつしやい——といふ言葉そのままの歌である。「露をわけ〜」といひ捨てたところなども無造作でいゝ。この歌は貞心尼に贈つた歌である。貞心尼は長岡藩士奥村某の女、結婚はしたけれども幾年もたない間に夫に死別したので、柏崎の洞雲寺の泰禪和尚について得度した。二十九歳の時、良寛七十歳の時、初めて良寛に逢つてその教を受け、良寛の終焉まで師事した。明治五年に七十五歳で入寂。

君や忘る道やかくるるこの頃は待てどくらせど音づれのなき

同じく貞心尼への贈歌。久しく尼の來訪がなかつたので、君が私の事を忘れてしまつたのか、それとも道が離れてなくなつてしまつたのかといふやうに歌つたのである。殆ど戀人に對するものゝやうな熱情でありながら、天真爛漫

な淡々たる心持で歌つてゐる。

梓弓春になりなば草の庵をとく出て來ませ逢ひたきものを

○梓弓「春」にかかる枕詞。

これも貞心尼に贈つた歌である。結句の「逢ひたきものを」は宛然戀人に對する口吻である。しかしもとより戀人同志ではない。兩人共に出家の身で、年齢の差も非常に多い間柄で、全く性別を超越してゐるかのやうに、虚心平氣でかういつてゐるのである。

紀の國の高ぬの奥の古寺に杉のしづくを聞きあかしつつ

高野山に登り、ある寺に宿つた時の歌である。ありのままを歌つたまでであるが、どことなくしみぐとした趣がある。

里べには笛や太鼓の音すなりみ山はさはに松の音しつ

笛や太鼓の音がするといふのは恐らくは盆踊のことであらう。山の下の村里では賑やかに笛や太鼓の音がしてゐる。自分の庵のある山の中には絶えず夥しく松風の音がしてゐる。といふ意味である。三句切で、上句と下句との連接がたくまずしておのづから巧妙である。

秋の日にひかりかがやくすすきの穂これの高屋にのぼりて見れば

前に「この宮のみ坂に見れば」といふ歌があつたが、「これの高屋」といふのも同じいひ方である。今自分ののぼつてゐる高殿を強くさしていふのである。下句に「のぼりて見れば」といつて上句に「すすきの穂が秋の日に輝いてゐる。」とはいはず、「すすきの穂の秋の日に輝いてゐるのが見える。」ともいはないで、「秋の日に光り輝くすすきの穂」といひ切つてゐる。この「——すすきの穂——のぼりて見れば」といふ形は間の抜けた、整つてゐない感じがあると共に、膺揚な、のんびりした調子をも伴つてゐる。「光り輝く」といふ言葉も平凡に似て平凡でない。

月よみの光を待ちてかへりませ山路は栗のいがの多きに

定珍に贈つた歌である。定珍が良寛の庵を訪ねて來た時の歌である。月が出るのを待つてお歸りなさい。山路は落ちた栗のいがが多いから。といふ歌で、その時の實景が思ひやられ、良寛の眞情が溢れてゐるものゝやうに思はれる。同じく定珍に贈つた歌で「月よみの光を待ちてかへりませ君が家路は遠からなく」といふのがある。(これについては萬葉集、卷四、湯原王「月よみの光に來ませ足引の山をへだてゝ遠からなくに」が思ひ合せられる。)

風は清し月はさやけしいざともに踊りあかさん老の名残に

萬葉集、卷四、大伴四綱「月夜よし河の音清しいざこゝに行くも行かぬも遊びて行かむ」といふ歌がある。上句の句法は或はこの歌から學んだものかも知れない。しかし一首の意味は萬葉のとはちがつて、やはり良寛のものである。

る。同じやうな歌で「いざ歌へわれ立ち舞はんぬばたまの今宵の月にいねらるべしや」といふのもある。

山かげの岩間をつたふ苔水のかすかにわれはすみわたるかも

上句は序で、「苔水のやうに」といふことで下句につよく。「すみわたる」は水の澄むこと、自分の住むこと、をかけたものである。しかしさういふやうに説明してしまふと面白くなくなるし、さういふ技巧にむしろ氣づかないでもいゝ程に、技巧が自然である。山の中に庵を結んでゐる人の心と周囲の大自然とが全く融合してゐる。良寛その人が全的にあらはれてゐる。

いづこより夜のいめぢを辿り來しみ山はいまだ雪の深きに

○いめぢ 夢路。

良寛の弟に由之といふのがあつた。父の職をついで名主及び神官となつたが、年五十の時に職を男泰樹に譲つて出家し、天保五年に七十三歳で入寂したといふ人物である。この歌は良寛が夢にこの由之を見た時の歌である。自分の住んでゐる山はまだ雪が深いのであるから、入つて來ることは容易でない筈であるのに、おまへは夜の夢路を辿つてどこから入つて來たのであるか。といふ意味の歌である。夢に逢つた喜びを直接にはあらはしてゐないところに注意した。

あまづたふ日はかたぶきぬたまほこの家路は遠し袋は重し

○あまづたふ 「日」の枕詞。 ○たまほこの 「路」の枕詞。

日暮れて道遠しといふところであるが、結句の「袋は重し」が面白い。いはゆる頭陀袋である。それを首にかけて夕日の沈まうとするのを仰ぎながら「家路は遠し袋は重し」といつてゐる姿が見えるやうである。

かしましとおもてぶせにはいひしかどこの頃見ねばこひしかりけり

○かしまし 喧しい。 ○おもてぶせ 恥かしくて人に顔合せができないといふ場合にも使ふが、ここでは氣に入らないとか面白くないとかいふ意味である。

この歌は「およしさ」といふ童女に贈つた歌である。良寛は子供が好きであつたが、しかし時にはうるさく思つたこともあつた。さういふ時に、うるさい、喧ましいといつて子供を追ひ拂つてしまつたのであるが、それ以來子供が寄りつかなくなつた。「なくてぞ人はこひしかりける」といふ古歌もあるやうに、子供をさつぱり見なくなつてしまふと、又子供がこひしいのである。畢竟良寛は子供が好きであつたのであつて、この歌などはよくその面目を示してゐる。

老の身のあはれを誰にかたらし杖を忘れてかへる夕暮

野に出て花を摘みつゝ鉢の子を忘れて來たこともあつたのであるが、年を取るに従つて忘れることも多くなつた。忘れても、それが爲に直接困ることのない場合は構はない。忘れることを悪いとは思つてゐず、この次から忘れない

やうにしようなどと思つたことはない。けれども年を取つて杖を忘れた時、しかも夕暮で庵までかなり遠いといふやうな場合、流石に老の身で杖がなくては困る。そこで年を取つた自分を今更のやうに寂しく思ふのであるが、ひたすら寂しいと思ふ心持とは少しくちがふやうである。年を取つては駄目ですとか、一向埒もないことで、といふやうな調子で、むしろ一方では安らかな心持であるのである。この寂しさを語り合ふべき人もないといつて寂しがるのではない。老の身のあはれを誰に語らう、とたゞ口に出してみたゞけであつて、しひて語り合ふべき人を求めてゐるのではない。むしろ悠々たる心である。

加納 諸平

夏目兼麿の男。遠江國の白須賀に生れた。文政四年、十六歳の時に父に伴はれて畿内諸國を巡歴し、和歌山の本居大平を訪れた。翌年父が歿し、その後和歌山の醫師加納伊竹の養子となり、醫を學ぶと共に大平の門に入つて教を受けた。近世諸家の歌を選び集めた鶴玉集があり、落命を奉じて紀伊續風土記撰輯の事に従つた。家集を柿園詠草といふ。安政四年、五十二歳で歿した。

思ふ人なきが多くの年をへて今はたぬらす袖や何なり

○題「懷舊」○思ふ人なきが多くの拾遺集、哀傷、藤原爲頼「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くのな」にあるに基づく。

あの人が今まで生きてゐてくれたらば、と思ふ人が次々に死んで行つて、自分が年を取ると共に、思ひ出す人が多

くなる。そのやうに、死んだ人を思ひ出しつゝ多くの年月を経て来て、今自分も老の身となつて昔をしのぶに堪へ得ずして袖を濡らすといふのは、いつたい何としたことであらう。この意。自分で自分を疑ふやうにいつたのである。

うゑたてし園の梢は鶯の木づたふ聲に花もよひせり

○題「鶯」

平明な歌であるが、「花もよひせり」といふのが面白い。花が咲くやうに促し誘はれることである。

かげろふのたち野の眞柴折りしきてかへりみすれば花散りにけり

○題「落花」○かげろふの「立ち」にかかる枕詞。○たち野 大和國の地名。

立野の柴を折り敷いて、ふりかへつて見ると花が散つてゐるといふだけの單純な歌であるが、初句「かげろふの」が單なる枕詞だけでなくて、やはり野に陽炎の立つてゐる様を髣髴させてゐることに注意せられる。萬葉集、卷一、柿本人麿「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」新古今集、冬、藤原公衡「狩りくらし交野の眞柴折りしきて淀の川瀬の月を見るかな」などからヒントを得て作られたものであらう。

花ちりし山櫻戸はすみすてむ月のにほひもうとくなりにき

○題「新樹妨月」○山櫻戸 山櫻の多く咲いてゐる所にある家。

山櫻の澤山ある中の家に今までは住んでゐたが、春から夏になつて花が散つてしまつたから、この家はもう捨て

しまはう。花が散つて葉櫻になつてからは、月の美しさもその繁つた葉に妨げられて、よくは見えないやうになつてしまつた。花が散つたばかりでなく、月の景色さへ見ることができなくなつたのであるから、この家に住むことはもうやめよう。との意。趣向の面白い歌である。

あげまきがうかるる聲もおもしろしふれふれ粉雪山つくるまで

○題「雪」○あげまき 揚卷。總角。振分髪をまきあげて左右に結んだもので、上代の兒童の結髪の名稱であるが、轉じて兒童をいふ。

子供たちが浮かれ喜んで雪の歌を歌ふ、その聲も面白いといふので、下句はその雪の歌である。「山つくるまで」は山を作るまでといふことで、雪が澤山積つて雪の山が出来るほどにまでといふ意味である。「ふれ／＼粉雪」といふ童謡は古く徒然草に出てゐるし、讃岐典侍日記には鳥羽天皇が御幼時に歌はれたといふことが出てゐる。

み狩たつみ野の木枯寒ければ鈴のゆらぎに雪ぞちりくる

○題「鷹狩」

鷹狩をしてゐる野に吹く木枯が寒くて、鈴がゆらいで聞えると共に、雪がふりかゝつてくるといふ意味で、鈴は鷹の尾につけた鈴である。萬葉集、卷十四に「つむが野に鈴が音きこゆかむしだの殿のなかしと狩すらしも」といふ歌がある。諸平のこの歌も萬葉調である。

生駒山かすむあしたの見渡しに思ひつづくる花の上かな

○「伊丹にて大塚寛制がはなれ屋に宿りゐける時朝まだき外の面を見出して」とある。伊丹は攝津國川邊郡にある町。○生駒山 大和と河内との國境にある。

朝遠く見渡すと生駒山のおたりがかすんで見える。それを見てゐながら、あの霞の中には花がどんなにか美しく咲いてゐることであらうと、花のことを思ひつゞけるといふのである。春らしいのんびりした心持である。「見わたしに」といふ句、凡でない。

出づる日の影も朧の朝けかな霧にしをれて山路わけまし

○藩の命によつて風土記撰述のために紀州熊野地方を踏査した時の歌で、詞書に「紀伊國熊野風土記撰ばせ給ふ仰せことにて三たび熊野の村々海山をめぐりける時は夜盡といはず古今の事ども尊ねとひて書きしるし暇なかりければ、大方歌もえよまで過ぎにしかど一つ二つは懐紙のはしにかいつけおけるもありしを歸りて後、同じくは今一つ二つとよみ添へける歌ども」とある。以下抄出するところの六首いづれもその中の歌である。

一面の霧で、昇る朝日の影もおぼろにかすんで見える。朝早くから自分は旅をつゞけなければならぬので、霧を分け、霧に濡れて山路を辿らうとの意。山間の夜あけの大景をよく歌つてゐる。

み熊野のあら山中に海なして立つ朝霧をいくへわくらむ

「海なして立つ」とは海のやうに立つといふことで、霧がまるで海のやうに湧いて流れるといふ實景實感である。その霧を幾重分けてゆくことであらうといふ歌である。

みづちすむ淵を千尋の底に見て太刀の緒かため行く山路かな

蛟龍の棲んでゐる深い淵を、千尋の谷底に見ながら、その上の細い山道を、太刀の緒を固め、萬一の用意をして行くことであるとの意。萬葉集、卷十六、境部王「虎に乗り古屋を越えて青淵にみづちとり來む劍太刀もが」などから言葉の思ひつきは得たかも知れないけれども、歌そのものはやはり實感に基づいたものである。

煙たつ峰の炭やきやどりかせ夕日のおくにましら鳴くなり

夕方やつと辿り着いた炭焼小屋に宿を貸してくれと頼むのである。下句が非常にいい。深山の光景を實によくいひあらはしてゐる。

いただきに柚板のせて下る子がうしろで寒き那智の山風

子供が頭の上に柚板を載せて山道を下つてゆく。那智の山から吹く風がためたく吹きおろして、子供のうしろ姿がいかに寒さうに見えるとの意。

沖さけて浮ぶ鳥船時のまにかけりも行くかいさな見ゆらし

○沖さけて 沖の方に遠ざかつて。 ○鳥船 天の鳥船ともいつて神代にあつたといふ速力の非常に早い船。 ○いさな 鯨。遙か遠くの沖の方に浮んでゐる船足の早い船、見てゐると急に速力を出して走つて行くことであるが、鯨が見えたのであらうといふ意味で、これも實景をよく歌つてゐる。

引馬野の木の芽はり原入りみだれ春日くらすは昔人かも

○「縣居翁の靈社に奉らむとてくさぐさの歌よみける中に」の一首。 ○木の芽はり原 芽が張るさいふことと榛原(萩原)とをかけてある。

萬葉集、卷一、長奥麻呂の「引馬野ににほふはり原入りみだり衣にほはせ旅のしるしに」といふ歌に基づき、この歌も純然たる萬葉調である。引馬野の木は皆その芽が張り、芽を出した萩の原に入りみだれて長い春の日を暮すのは、今は亡い昔の人であらうかといふことで、「昔人」はやがて縣居翁(賀茂真淵)をさし、春の日を遊んでゐる人があるが、その中に自分の慕ふところの翁の姿は見えないといふことを嘆じたのである。なほ引馬野は三方原ともいつて、縣居翁の郷里濱松のすぐ近くである。

和田 嚴足

伊豆足とも書き、又眞震ともいふ。馬百合とも書く。通稱震七郎。熊本の弓削平八の二男で、和田園四郎の養子となつた。性磊落で酒を嗜み、武藝に達してゐた。和歌は長瀬眞幸に學んだ。事に坐して幾度も閉門謹慎を仰付けられ

た。それはいつも冤罪であつたが、彼はあへてそれを雪がうともしないで、つひに安政六年に七十三歳で歿した。

春はそも何をしをりにかへるらむ青葉しみみのねこし山こし

○題「暮春」 ○しみみに「しみらに」とも同じく、繁く、ひまなきこと。 ○ねこし山こし 幾つかの山を越して。「ね」は嶺である。古今集、東歌「甲斐がねをねこし山こし吹く風を人にもがもやことづてやらむ」賀茂真淵の歌に「を筑波も違つあしほもかすむなりねこし山こし春や來ぬらむ」などの用例がある。

春が暮れて、春はかへつて行つてしまふが、山にはもう夏めいて青葉が澤山に生ひ茂つてゐる。その山を幾つも越して行くのであらうが、いつたい何を道しるべにしてかへるであらうとの意。春といふものを擬人して、青葉の茂つた山は案内なしには歸れないであらうといふやうに想像して趣向を立てたものである。

酒のまむ友どちもがもしくしくに雨のふる夜はさびしきものを

○題「冬夜」 ○しくしくに 頻りに。

雨が盛にふりしきつてゐて寒い夜はまことに寂しい。こんな時に共に酒を飲むやうな友があればいゝといふ歌で、酒の好きな人らしい歌であり、雨のふる夜はさびしいといつてゐるところに無邪氣な心が見えるやうに思はれる。

玉くがねしじにつらぬる鱗なす龍とかがやく浪の月かげ

○題「水邊見月」 ○くがね「こがね」に同じ。 ○しじに 繁く。

その鱗はちようと玉や黄金を澤山に連ね並べたやうであるところの龍のやうに、浪のうねりに月のかげが映じて輝いてゐるといふ歌である。

をどりあがる鯉の廣鱸花にふり池のはちすの散らまくをしも

○題「池上蓮」

蓮池で、その中に鯉がゐる。鯉が躍りあがると、その廣い鱸が蓮の花に觸れて、花の散るのが惜しいとの意。取材も面白く、表現も巧妙である。

玉ふくむ井手の山振あはれあはれ駒にかふちふ露なこぼしそ

○題「山吹露」 ○井手 井出。山城國相樂郡にある。 ○駒にかふちふ 新古今集、春下、藤原俊成「駒とめてなほ水かはむ山吹の花の露そふ井手の玉川」といふ歌に基づく。

露の玉を宿してゐる井手の山吹よ。古歌に駒に水かふといふことがあるから、その露をこぼすではないぞとの意。俊成の歌では必ずしも山吹の露を馬に飲ませるといつてゐるのではないが、この歌では馬に飲ませるために山吹の露をこぼさぬやうにいつてゐるのである。

追へど追へどしこの村鳥かなとべの山田のをしね盗みとりはむ

○題「山家鳥」 ○しこ 醜。罵つていふ言葉。 ○かなと かぎ(門)のこと。 ○をしね 小稻。稻のこと。

いくら追つても追つても憎らしい澤山の小鳥が門邊の田の稻を盗んでは食べることであるとの意。一種の田園風景。平談俗語のやうにさら／＼といひ捨てたところに妙味がある。

月夜よしこほろぎと鳴く蟲のねにさそはれ出でて露に濡れぬわれ

○題「月前蟲」

「し、月夜です。出て来て御覽なさい。」とでもいつてゐるかのやうに鳴いてゐる蟲の聲に誘はれて、自分は月を眺めに出て、露に濡れたことであるとの意。「こほろぎ」といふのに音調の上から「來よ」といふことをきかせてゐる。全體として表現が面白。

しらぬひ筑紫の綿を村山にかづけたるなす花ざかりかも

○「櫻百首抄」の一首。 ○しらぬひ 「筑紫」の枕詞。

澤山の山一面にちようと綿をかぶせたやうな櫻の花ざかりであるとの意で、綿が筑紫から出るから「筑紫の綿」といつたのである。櫻の花の澤山に咲きつゞいた様を雲か霞のやうだとはよくいふが、綿をかぶせたやうだといつたのは面白い。なほ初句「しらぬひ」は四音の句で、この作者は四音の句をしば／＼用ひてゐる。

沖つ藻の名張の山の梅が香の風のたなれの馬に乗り来る

○題「依風知梅」 ○沖つ藻の 「なばり」にかかる枕詞。 ○名張 伊賀國にある。 ○風のたなれの馬 風といふ手馴れの馬。

名張山の梅の香が、常に乗り馴れてゐる馬ともいふべき風に乗つて、風と共に吹かれてにほつてくることであるとの意で、即ち梅そのものは見えないが、風に吹かれてくる香によつて梅のあることを知るといふこと、題の「依風知梅」といふ意味をそのままに歌つてゐるわけである。「風のたなれの馬」といつたところがこの歌の眼目である。なほ「なばり」といふ言葉は古語では「隠れる」といふ意味があるので、「名張」は山の名ではありながら、その山にあつて隠れて見えない梅であるが、風によつてその所在がわかるといふやうな心持に感ぜられる。萬葉集、卷一、當麻呂の妻「わが背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ」といふ歌でも「なばり」といふ言葉に隠れるとか暗いとかいふ意味がこもつてゐるやうに感ぜられるのである。

花にあかて暮るるむしろに油火をとだにも月のいはせざるかも

○題「月前見花」 ○むしろ ここでは宴席。

花を見て見飽かずして日が暮れた。夜になつても花を見ようとして、その席に燈火を用意させようとした。ちよう

どその時、燈火をといはせも果てず、月が出て、皎々と照つて燈火の必要なく、そのまゝ月の前に花を眺めたといふ情景。面白いところを歌つてゐて、表現も非常に氣がきいてゐる。

熊谷直好

香川景樹の門人として第一にあげられる人である。周防國岩國の人で、父を直昌といふ。少年時代から歌文の才があつた。文政八年、四十四歳の時、岩國を去つて難波に住み、家を輕舟亭、又は長春亭と號した。文久二年に八十一歳で歿した。家集「浦のしほ貝」は門人三井宗之の編で弘化二年の刊行。後に更に門人たちが洩れた歌を集めて「浦のしほ貝拾遺」として安政三年に刊行した。

志賀の浦のみぎはのこほりうちとけて霞も波もけさよりぞ立つ

○題「湖上朝霞」

「小夜ふくるままにみぎはやこぼらん遠ざかりゆく志賀の浦波」(後拾遺集、冬、快覺法師)といふ歌、又それを本歌として作られた「志賀の浦や遠ざかりゆく波間よりこほりて出づる有明の月」(新古今集、冬、藤原家隆)などと直接の關係はないし、又これらの古歌は冬の歌であつて、これは春の歌であるといふ相違はあるけれども、志賀の浦のみぎはの氷といふことは恐らくかうした古歌から得た取材であらう。着想は「谷風にとくる氷のひまごとうち出づる波や春の初花」(古今集、春、源當純)などに似てゐて、しかも霞と波とに掛けて「立つ」といつたところが

この歌の主眼である。湖上には春らしく霞が立ちこめてゐる。朝日が次第に高く昇るにつれて、今まで張りつめてゐた汀の水が解けて、そこに波が立つ。冬の間は凍つてゐたのが、春になつて、今朝から波が立ち、霞が立つ。といふ情景である。傳統的な歌ひ方ではあるが、やはり凡ならざる所がある。

岩に咲く波の花をも慕ひきて清瀧川に鶯ぞ鳴く

○題「水邊鶯」○清瀧川 京都の西に流れて末は桂川に合流する。

波が岩に當つて白く散るのを花に譬へ、花を尋ねて来る鶯が、波の花をも花と思つて、慕ひ寄つて鳴くといふ歌で、趣向の面白いといふだけのものである。

みだれ蘆の朽葉が下をかきわけて難波をとめは磯菜つみけり

○題「若菜」

難波は蘆の名所であることに基づいてゐる。趣向も面白く、調もすぐれた歌である。

ひとすぢに思ひきぬればふり積る雪の中にも道はありけり

詞書に曰く「正月二十八日琵琶の大曲つたへ給ふべきことによりて、花園三位の君の田中の御殿に参らむとする

に、あしたのほど雪いたくふり出でたれど、からうじて下賀茂のあたりまで行きて、河原にさしかかるに、とく里人のふみわけたる跡ありて、なか／＼迷ふ方なく御殿に到り着きて」といふのき、歌の意味は、大曲の傳授を受けることの嬉しさに、ひたすらの心で尋ねて来たので、ふり積る雪の中にも自然道があつて、迷ふことなく御殿へ辿り着くことができた。といふことである。直好は管絃の道をも嗜み、神樂歌及び催馬樂の註釋書なる梁塵後抄の著もある程である。

木づたひし鳥はねぐらにかへれども暮るるも知らず梅の花みる

○題「夕梅」

晝の間は木の枝を傳つては鳴いてゐた鳥が夕方になつて塙に歸る。鳥は歸るけれども、自分は日の暮れるのも知らず梅の花を見てゐるとの意。

春雨の雲はれがたになりぬらし松の音高く風立ちにけり

○題「春風」

松の梢に音高く風が吹き初めた。雲も收まつて春雨が霽れ方になつたやうであるとの意。調の高い所がいゝ。

櫻花ちりのまがひに暮れにけり今宵はいかに夢もまどはむ

○題「夕落花」

櫻の花が散る、そのまぎれに日が暮れてしまつた。今宵は夢の中でもどんなにか花の散り紛ふ様が見えて仕方がないことであらうとの意。第二句は古今集、春下、よみ人しらす「この里に旅寝しぬべし櫻花ちりのまがひに家路忘れて」に基づくものである。

霞しく堀江の浪はくらけれど碇とるなりあけのそほ舟

○題「江上春曙」 ○あけのそほ舟 そほといふ赤い土を塗つた舟。萬葉集(卷三)に「旅にして物こほしきに山下のあけのそほ舟 沖に漕ぐ見ゆ」(高市黑人)などの古歌がある。

霞の一面にこめてゐる堀江の浪のあたりは暗くて、まだ夜が明けきらないけれども、赤い舟は船頭が碇をあげて舟出の用意をしてゐるとの意。結句「あけ」は朱と曙との掛詞になつてゐる。

ぬぎかへばうつろひやすき心ぞと花の袂や我をうらみむ

○題「更衣」 ○花の袂 春の衣をいふ。

夏になつて夏の衣とぬぎかへたならば、ぬぎ捨てられた春の衣は、うつり易い人の心、情の薄い人の心であるといつて自分を恨むことであらうとの意。なほ結句の「うらみむ」は「裏」を掛けて「袂」の縁語になつてゐる。

今年生ひの竹のよすがら風ふけばさらさら夏の心地こそせぬ

○題「竹風夜涼」

竹の節と節との間を「よ」といふので、「竹の上」といつて「夜すがら」とつづけたのである。下句は決して夏のやうな心地はしない。秋のやうに涼しいとの意。

旅人の夢の浮橋なか絶えて葛城山にくひな鳴くなり

○題「水鷄驚夢」

葛城山に水鷄が鳴いて、それが爲に旅人の夢が破られるといふ趣を歌つたもの。夢の浮橋が絶えるといふことは夢が破られることで、新古今集、春上、定家「春の夜の夢の浮橋とだえして峰にわかるる横雲の空」を始として後鳥羽院御集「松風に夢の浮橋とだえして旅寢夜ぶかき秋の夜の月」俊成女集「思ひねの夢の浮橋とだえしてさむる枕にきゆるおもかげ」などの用例がある。

さみだれに茅はら蘆はら水こえてわたし場遠し神崎の里

○題「五月雨」

神崎は淀川の河口にある。特に調の點においてすぐれた歌である。

日ざかりに夏野をくればいくたびか驚く蛇の草がくれゆく

○題「夏蟲」

蛇が人の足音に驚いては草の中に隠れてゆくといふ夏の野の情景。

涼しさはふらぬ里まであまりけり夕だつ山の峰の松風

○題「遠夕立」

遠い山の頂、松に風の吹くあたり、夕立の雨がふる。此處の里には雨はふらないけれども、餘所の夕立の涼しさが餘つて、此處までも涼しいといふ意味で、表現の技巧においてすぐれた歌である。

わび人は露も涙もかけなれて袖には秋をおどろかぬかな

○「ある時つづけたる」

「わび人」はわびしく住んでゐる人で、即ち作者自身をいふ。「かけなれて」といふのは常に露や涙を袖にかけることに馴れてゐるといふ意味で、即ちわびしく起き臥してゐるから涙はいつも袖にかかつてゐる。秋になると草木などに一般に露けさを増すものであるが、自分は平生から涙に浸つてゐるから、袖がいつも濡れてゐて、秋が来ても驚かない。即ち、秋が来たからといつて、特に袖が濡れるといふことはないとの意。これも表現の技巧を見るべき歌であ

秋の野の尾花がうれを吹き亂り風の目に見ゆる時は來にけり

○題「秋風」

秋の野の尾花の末を風が吹き亂し、その風の吹き通るのが目に見える時になつたとの意。この作者の歌は一體に温雅であつて、ややもすれば平弱に流れ、低調に過ぎるのであるが、この一首の如きは珍しく緊張した高い調子であつて、その點で特に注意すべき作である。

いそのかみふる野の薄ほに出でて昔の人の袖かへすなり

○題「薄似袖」

○いそのかみ 「ふる」にかかる枕詞。○ふる野 大和國の布留といふ所の野。

布留野の薄が穂に出て、それが袖のやうに見えるといふので、昔の人が袖を翻すやうであるといつたのである。薄の穂が風に吹かれる様を袖を翻す様に思ひよそへたもので、「布留」が「古」に通ずる縁から「昔の人」といつたのである。

河口のみをのしるしや見えつらむからる押しつれ雁は來にけり

○題「河邊雁」

○みをのしるし 浮標。みをつくし。水脈を示すための標。

雁の鳴く聲は鱸の音に似てゐるといはれてゐる。そこで、多くの雁が空鱸を押し連れて來たといつたのである。従つて、河口の浮標が見えたのであらうといふやうな趣向を立てたのである。

ふけゆけば鹿の音ながらおろすなり川上とほき宇治の山風

○題「夜鹿」

遠い川上なる宇治の山から吹きおろす風が、夜が更けると、鹿の聲を吹き送ることであるとの意。「鹿の音ながらおろす」といふところが面白いので、即ち鹿の聲もろとも吹きおろすといつたやうな趣である。

難波江の汀の蘆のみだれ葉にうす雪白し夜目に見れども

○題「江寒蘆」

用語に技巧を凝らしたもののよりも、この歌のやうに單純にあつさり詠み捨てたやうなものの方が却つていい。

魚ねらふ鷺のぬき足かひもなし川の瀬白く影の見ゆれば

○題「河邊鳥」

趣向が面白いといへば面白い譯である。しかしいかにも作つたものといふ感じがする。

うちなびく風を姿の秋なればえこそとどめね蒨萱の關

○題「關」 ○蒨萱の關 筑前國筑紫郡にあつた關所。

關といふものは人を止めるものであるが、秋といふものは人とはちがつて、草木を靡かせる風このものを姿としてゐるものであるから、蒨萱の關も秋を止めることはできないとの意。どこの關でもいいわけであるが、特に蒨萱の關といつたのは「蒨萱」が「うちなびく風」といふに縁があるからである。秋といふものが人間のやうな姿のあるものであつたならば、止めることも出来ようが、さうでなくて、草木を靡かせる風が即ち秋の姿であるから、それがいくら關の所を吹き通つたところが、それを止めることは出来ないといふ、幾分理屈ばい歌である。趣向の面白さはありながら、内容は空虚である。この類がこの作者には多く、これは正に古今集の傳統に立つところの桂園風の一特色であり、しかも今日の目から見れば、むしろ缺點としなければならぬところのものである。

木下幸文

景樹の門人で熊谷直好と並び稱せられる人である。備中國淺口郡長尾村の人。父を義錦といふ。初名義壽、義質などといひ、後に改めて幸文といふ。文化の初年に京都に出て、岡崎に住み、朝三亭と號した。文政二年大阪に移つて、亮々舎（やぶらや）と稱した。歌を慈延、澄月らに學んだが、景樹を知るに及んで、その門に入つた。文政四年に四十三歳で歿した。家集を「亮々遺稿」といふ。

さし捨てし筏の上にはほふかな嵐の山の櫻もる月

○題「川春月」

嵐山の櫻に月が照つて、櫻の木の間に洩れる月の光が、筏の上に落ちてゐる。山の麓を流れる川の川上から下して来た筏であるが、此處まで来て捨てられてゐる。その捨てたままになつてゐる筏の上に、夜は月が宿つて、艶なる情景を見せてゐるのである。

行きてみむこれや花ある寺ならむ松原ごしに鐘聞ゆなり

○題「尋花」

松原ごしに鐘が聞える。その鐘の聞えてくるところの寺こそ花の美しく咲いてゐる寺であらう。と思つて「行きてみむ」といつたのである。長閑な春の氣分、花を尋ねて歩く悠々たる心持がよくあらはれてゐる。技巧がなく、率直に歌はれてゐるところがよい。

かはほりの飛びかふ影も靜まりて月になりゆく花の上かな

○題「夕花」

夕方蝙蝠が飛び交ふが、やがてその影も見えなくなつて、日が暮れてゆくまに月が昇る。そして花が、月の光に

よつて趣を添へるやうな景色になつてゆくとの意で、第四句が眼目である。

〇ここかしこ岸根のいばら花咲きて夏になりぬる川ぞひの道

〇題「首夏川」

「夏になりぬる」は夏らしい景色になつたこと。淡々たる歌ひ方がいい。

卯の花の垣根たづねて時鳥こよひは來鳴け月もさやけし

〇題「月前郭公」

これも率直な歌ひぶりで、言葉のこみいつた技巧などのないところがいい。調も高い歌である。

夕立は今ふりくらし卷向の檜原が上に雲きほふなり

〇題「夕立」 〇卷向 大和國城上郡卷向山。萬葉集、卷十「卷向の檜原もいまだ雪ふねば小松がうれゆ沫雲流る」など参照。

「雲きほふ」は雲が群がり立つこと。夕立のまさに至らんとする時の情景を歌つたもので、調が緊張してゐて、氣持がさす。

ぬばたまの夜はふけぬとも歸らめや月さへ出でて涼しきものを

〇題「納涼」 〇ぬばたまの「夜」の枕詞。

ただでも涼しいところへ月さへも出て一層涼しさが増したから、夜は更けようとも歸るまいといふ意味である。これらの歌、いづれも調においてすぐれてゐて、桂園流の平弱な繁風に陥つてゐない。

奥山のしげきが中の萩が花よる鳴く鹿のかくし妻かも

〇題「萩」 〇しげき 繁木。

萩の花や女郎花などを鹿の妻に見立てることは傳統的事で珍しくはない。「奥山のしげき」といつたことと「隠し妻」といふこととが照應してゐるなども普通の技巧である。しかし一氣に詠み下した強い調をとるべきであらう。

汐みてば磯もとゆすりよる波に影みだれちる秋の夜の月

〇題「磯月」

上句は、汐が満ちてくると、磯のところを揺り動かすやうに、どうどうと打ち寄せる波といふことである。有聲の畫といふ感がある。

秋風に萩の上葉のかへれるを蝶のゐるかと思ひけるかな

〇「人々とよみける實景百首の中に」とある一首。

頗る平且である。この歌風はまさに香川景樹のそれに通ずるものであつて、殊にたとへば「夏の夜の月のかげなる桐の葉を落ちたるのかと思ひけるかな」などの系統を引くものと考えていいのである。

ふけゆけば氷の上に月さえて鴨がね高し廣澤の池

○題「鴨」○廣澤の池 山城の國にある。

冬の一景。讀んで氣持のいい歌である。同じ作者に「夕されば蘆の葉みだりおく霜に鴨がね寒し三鳥江の里」といふがあるが、似た調である。

朝びらき漕ぎ出でてゆく船見れば追手の風をほこりがほなる

○題「朝眺望」 ○朝びらき 朝、船が港を出てゆくこと。萬葉集、卷三、沙羅滿誓「世の中を何にたとへむ朝びらき漕ぎにし舟のあとなき如し」など参照。

朝、港を漕いで出てゆく船の様子を見ると、折しも吹く追風を得て、いかにも誇らしげな様子であるとの意。

み山路を夜だちに立ちてわがくれば有明の月に鴉なくなり

平明な歌であるが、清新の味がある。殊に鴉といふのが面白い。

吾妹子とねてのあさかの濁見れば千鳥ぞあさるおのがどちゐて

○題「濁千鳥」組題百首の中の一。 ○あさか 淺香。攝津國にある。萬葉集、卷二、弓削皇子「夕されば潮みち來なむ住吉の淺香の浦に玉藻かりてな」などと歌はれてゐる。 ○おのがどちゐて 自分の仲間を連れて。

上二句は妻と共に寝て起きての朝といふことから「淺香」とつづく序である。(古今集、大歌所御歌「水菘の岡のやかたに妹とあれと寝ての朝けの霜のふりはも」などから思ひついたものであらう。) 淺香の濁を見ると、千鳥が自分たちの仲間と共に餌をあさつてゐるとの意。第二句の「あさか」と第四句の「あさる」とがおのづから同音の照應をなしてゐる。

かにかくに疎くぞ人のなりにける貧しきばかり悲しきはなし

○以下十三首、貧窮百首の中。この貧窮百首は山上憶良の貧窮問答に想を發したもので、文化四年の年末から翌五年正月三日までに詠んだものをまとめたのである。文化五年は三十歳の時であつた。

貧しければ、何のかのといつて結局人は疎遠になつてしまふ。金銭で交際する人の多い世の中である。富といふものが恨めしい。貧しいほど悲しいことはないといふ詠歌。すべてこの貧窮百首は在來の百首や題詠とちがつて、實感に基づき、生活に即した歌で、當時にあつて稀に見るところのもの、かつ今日の目から見ても價値の高いものである。

さかしらに貧しきよしといひしかど今日としなればここらすべなし

○まかしらに 賢ぶつて、なまじひに。 ○こころ 深山、非常に。

いたづらに支那の聖人の口真似をして、脛を曲げて枕にしたり、陋巷に安んずるなど、或は清貧に甘んずるなどといひ、貧しいのがいいのだなどと悟つたやうな事をいひはしたものの、いよく歳暮の今日となると、貧しさに何としようとしても致し方がないことである。

ますらをのをのこさびすと打ちあげて泣かぬ心ぞまこと悲しき

男だから男らしくあらうとして、泣きたいのをぢつと堪へ、聲を立てては泣かずにある自分の心、實にやる瀬ない極みである。

人のいふ富は思はず世の中にいとかくばかりやつれずもがな

富が欲しいなどとは思はないが、もう少しどうにかなりたい。こんなにまでみすばらしい姿でゐたくはないといふ痛切な叫びである。

聞くならく那落の底に入りぬべしこころの鬼のわれを責むるは

いはゆる債鬼である。多くの債鬼が自分を責める。聞いてゐる奈落とかいふ世界のどん底に落されるやうな心持であるとの意。初句から第二句への「ならく」は勿論同音の反復といふ一種の技巧である。

今年さへ縫ふ妹をなみからごろも肩もまよひぬ袖もまよひぬ

○まよふ 綻ぶこと。

萬葉集、卷十四「風のとの遠き吾妹が着せしきぬ袂のくだりまよひきにけり」といふ歌に基づいてゐる。妻があれば綻びても縫つてくれるのであるが、今年もまだ妻がないので、平生着たままの着物の肩のあたりも袖のところも綻びてしまつたと歎いた歌である。

いにしへの人の飲みけむかすゆ酒われもすすらむこの夜寒しも

古人といふのは山上憶良のことで、その貧窮問答の歌の一節に「かすゆ酒うちすするひて」(萬葉集、卷五)とある。その糟湯酒を啜らう。今夜は非常に寒いといふ歌。

かくしのみわびむと知らばふるさとの吉備の山田もつくりてましを

こんなにもわびしい生活をするのだとかねて知つてゐたならば、最初から都會に出て来ないで、田舎で田でも作つてゐればよかつたものをとの意。この當時は京都にゐたのである。

まがり木にまじる直木のちちわくに人はいふとも我は我なり

○ちちわくに 千々分に。いろくくと、面倒に。拾遺集、雜上、人麿「ちちわくに人はいふとも織りて着む我はたものに白き麻

ぎぬ」など参照。

曲つた木に真直な木がまじつてゐる。曲つた木ばかり、真直な木ばかりではなくて、種々雑多である。といふことから「ちちわくに」と續くので、上二句は序である。いろ／＼に——とやかく——うるさく人は自分のことをいはうとも——人がどんな事をいはうとも、要するに自分は自分であるといふ歌で、貧窮の間に處して、結局自分より外に頼るべき人はないといふことを自覺した時の感懐である。

つひにはと思ふ心のなかりせば今日の悔しさ生きてあられめや

貧窮なるが故に受けた侮辱であらう。今こそ侮辱されてゐるが、今に見ろといふ心があるからこそ、悔しさに堪へてゐるのである。その心がなかつたならば、到底生きてはゐられないといふ歌。

わが宿に何のよろこびうるさうるさ門さしこめてなしといはばや

正月になつて萬歳などが新年の御慶を申して来る。さういふ場合の歌で、こんな貧しい自分の家に、新年が來たと何の喜ばしいことがあらう。御慶も何も無い。うるさいことである。いつそ門を閉ちて、留守だといひたいとの意。

たちかへる年や笑はむこりずまに今年はとのみ頼む心を

國文學大講座 第一七

近世和歌史

定價二圓五十錢

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

近世和歌史

編輯者

國文學大講座刊行會
代表者 吉川與志次

印刷者

吉川與志次
東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行所

東京市神田區小川町三丁目二四
日本文學社

筆執家大門專各 座講大學文國

◇國文學史	文學博士藤井乙男著	送價菊料判	二二四〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇國語學史	文學博士吉澤義則著	送價菊料判	二二四〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇古事記選釋	三高教授阪倉篤太郎著	送價菊料判	二二三八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇萬葉集選釋	京大助教授澤瀉久孝著	送價菊料判	二二二八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇源氏物語講義	奈良女高教授岩城準太郎著	送價菊料判	二二四〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇枕草子選釋	三高教授島田退藏著	送價菊料判	二二四八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇平家物語講義	東京女高師教授石川佐久太郎著	送價菊料判	二二二八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
◇古今和歌集選釋	文學博士尾上八郎著	送價菊料判	二二二八	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇

◎本書は書て本會に於て出版して噴々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した篤學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の内特に文檢受験者必須なるものを選擧統一したものである。

筆執家大門專各 座講大學文國

◇文法及口語法	奈良女高師教授木枝増一著	送價菊料判	三四六	五	六	二	六	二	六
◇言語學概論	文學博士新村出著	送價菊料判	二二三	四	一	八	二	八	二
◇謠曲講義	東京文理大教授能勢朝次著	送價菊料判	二二三	四	三	五	六	二	六
◇有職故實	風俗研究所長江馬務著	送價菊料判	二二三	四	五	八	六	二	六
◇俳句選釋	京大助教授額原退藏著	送價菊料判	二二三	四	二	五	六	二	六
◇新古今和歌集講義	女子學習院教授佐成謙太郎著	送價菊料判	二二二	四	一	八	二	六	二
◇王朝文學概論	文學博士吉澤義則著	送價菊料判	二二二	四	〇	八	二	六	二
◇國文學問題詳解	京都女專教授田中健三著	送價菊料判	二二三	四	五	八	二	六	二
◇近世和歌史	東京文理大教授能勢朝次著	送價菊料判	二二三	四	五	八	二	六	二

筆執家大門專各 座講大學文國

<p>◇江戶文學概說</p> <p>文學博士 藤井乙男著</p> <p>送價菊料判 二二二 八二二 錢錢頁</p>	<p>◇更科、泉式部、紫式部 日記講義</p> <p>宮田和一郎著</p> <p>送價菊料判 二二四 六八五 錢錢頁</p>	<p>◇西鶴五人女評釋</p> <p>鈴木敏也著</p> <p>送價菊料判 二二三 八五二 錢錢頁</p>	<p>◇大鏡增鏡鏡類選釋</p> <p>金子原亮 堀江秀一 荒瀬邦雄 著</p> <p>送價菊料判 二三五 六二八 錢錢頁</p>	<p>◇保元物語大平記選釋</p> <p>清水泰衛著</p> <p>送價菊料判 二二三 四二八 錢錢頁</p>	<p>◇徒然草講義</p> <p>金子彦二郎著</p> <p>送價菊料判 二二二 四九〇 錢錢頁</p>	<p>◇江戶時代風俗史</p> <p>風俗研究所長 江馬務著</p> <p>送價菊料判 二一二 八二六 錢錢頁</p>
---	--	---	---	---	--	---

610
200

終

